

奈良国立文化財研究所年報

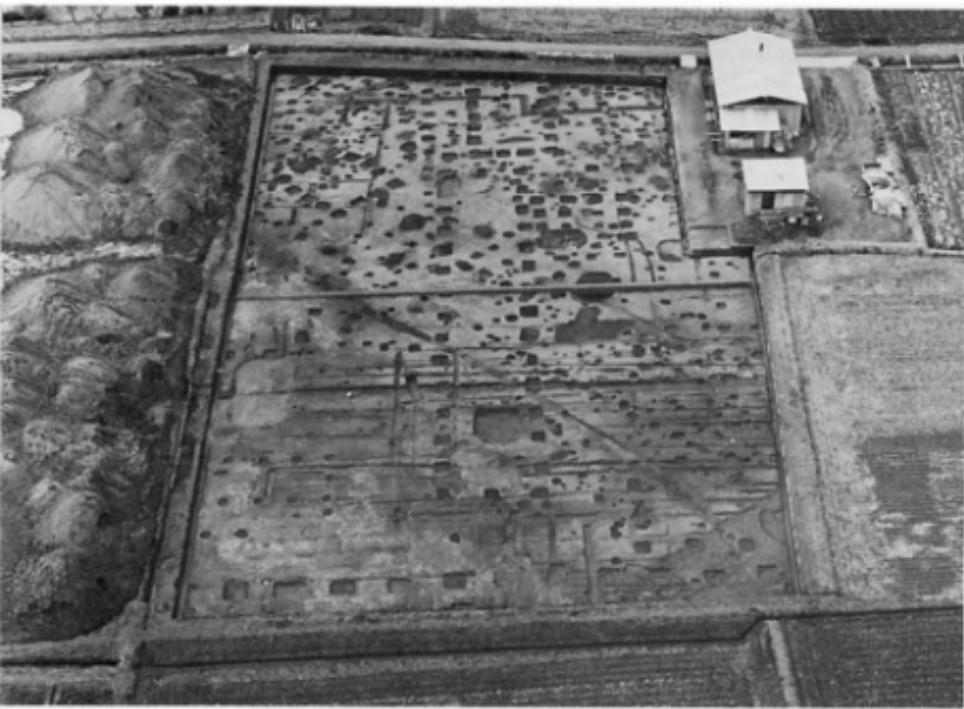
1985



奈良国立文化財研究所

1 平城宮第二次朝堂院朝庭発掘構造(大内宮跡)と大極殿院整備状況(南から)
撮影 田中幹雄

2 石神道跡(東北から)(上) 石神道跡石組井戸(南から)(下) 撮影 井上直夫



4 山田寺東回廊中央扉口(東から)(上) 藤原宮跡第44次調査区(東から)(下)

撮影 井上直央



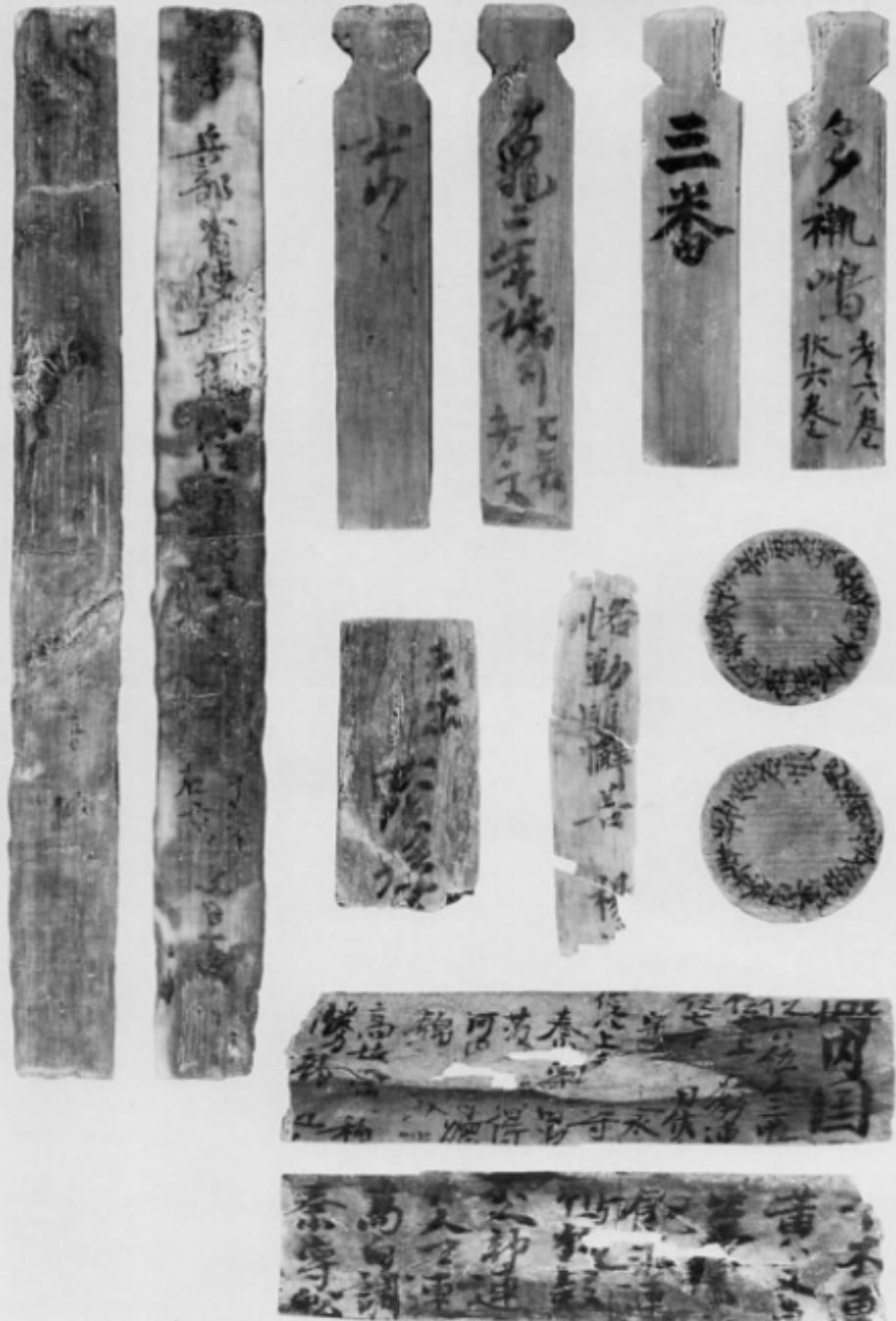
5 平城宮南面大垣東端地区(西から)(上)

平城宮第一次朝堂院東南隅区(東から)(下)

撮影 鶴 祐惟



6 平城宮第二次朝堂院東第一堂(北から)(上) 薬師寺回廊東南隅区(東から)(下)
撮影 鈴木幹雄



8 平城宮跡出土木簡 (左、坦し板木口は5)

撮影 加賀屋

目 次

口 絵 1 平城宮第二次朝堂院朝廷発掘遺構(大嘗宮跡)と大極殿整備状況	
2 石神遺跡	5 平城宮南面大垣東端地区
石神遺跡石組井戸	平城宮第一次朝堂院東南隅区
3 豊浦寺下層建物	6 平城宮第二次朝堂院東第一堂
水落遺跡銅管	薬師寺回廊
4 山田寺東回廊中央扉口	7 飛鳥・藤原京復原模型
藤原宮跡第44次調査区	滋賀・觀音寺本堂
	8 平城宮跡出土木簡

はじめに	1
飛鳥地域の発掘調査	2
藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査	15
平城宮跡・平城京跡の発掘調査	21
平城宮跡出土の木簡	36
法隆寺百万塔および陀羅尼經の調査	40
「石山寺」扁額	42
滋賀県近世社寺建築の調査(2)	44
奈良県近世社寺建築の調査	46
旧奈良町の町並調査(Ⅲ)	48
本山寺鎮守堂の修理	49
大覚寺大沢池の発掘調査	50
平城宮跡出土瓦のパソコンによるデータ検索活用システム	51
島根県荒神谷銅劍埋納遺跡の調査	52
動物遺存体の調査	54
コンピューターによる発掘調査記録システム	55
年輪年代学(5)	56
銅象嵌の保存処理	57
保存科学研究集会	58
飛鳥資料館の特別展示	59
飛鳥・藤原京復原模型の製作	60
平城宮跡・藤原宮跡の整備	61
在外研修報告	65
公開講演会発表要旨	66
調査研究彙報	67
奈良国立文化財研究所要項	70

奈良国立文化財研究所年報 1985

発行日 1985年12月25日 編集発行 奈良国立文化財研究所 税金 税金・川越俊一 印刷 日本写真印刷株式会社

はじめに

奈良国立文化財研究所が平城宮跡の発掘事業をはじめて満30年、大極殿閣門前庭部で奈良時代の大嘗宮の遺構を明らかにすることことができた。かって1965年の造酒司関連遺構の発掘で、聖武天皇の大嘗祭関連の木簡の出土をみたことから、いつかは大嘗宮遺構の発掘ができるのではないかと期待していた。1983年度の大極殿前庭の儀式用の仮設物遺構の検出は、それまでの宮内殿舎の発掘で得られなかった宮廷儀式の実態をさまざまと見せてくれるおもいがした。それにもまして即位儀式のなかでも最も重要な場を現実に発掘することができたのである。この一連の調査成果は、単なる宮殿の建物の配置の変遷を知るというよりは、その場で現実の儀礼に参加した古代人の息吹をじかにきくおもいがするもので、1961年の木簡の検出に匹敵する発掘の画期として永く記憶される年になるであろう。飛鳥地方における水落遺跡北部遺構の調査、その東北に隣接した石神遺跡で発掘した遺構は複雑の度合をましてきたが、まさに古代史を掘る実感をあじあわさせてくれる興味のつきない資料を多く得ることができた。木簡の発掘では1966年に多量に出土した勤務評定木簡出土土地の隣接地の発掘で、考課の実務をうかがわせる資料がさらに追加されたばかりでなく、種子島の官人の考課書類につけられた付札、肥後國第三益城軍團兵士歴名帳、出羽国郡司考課に関する軸の発見など、全国各地の下級官人、兵士にいたるまで、その実態を都で把握していたことを如実と知ることができた。

その他、「法隆寺昭和資財帳」関連の諸調査、近世社寺建築の調査、年輪年代学的調査、各種情報処理システムの研究、保存科学的研究、考古・庭園遺跡の調査指導、研究集会、埋蔵文化財センターの各種研修事業など多岐にわたる成果の一端をここに集録した。組織・予算の両面ともきわめてきびしい昨今、文化庁をはじめ各方面的御指導とはげましの中で研究所員一同がどのように働いているかを御理解いただければと考える次第である。

1985年12月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足

飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

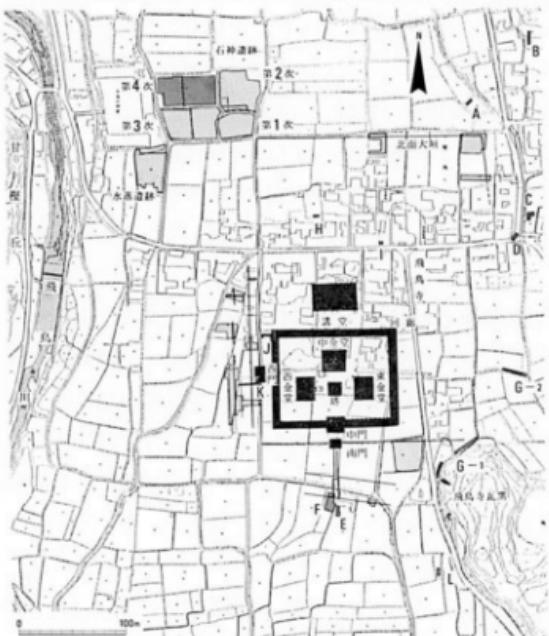
1984年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では飛鳥地域において、石神遺跡、水落遺跡、飛鳥寺跡およびその周辺地域、川原寺跡、橋寺跡、豊浦寺(宮)跡、山田寺跡など16件の発掘調査を実施した(20頁参照)。ここではそのうち主要な発掘調査についてその概略を述べる。

1. 石神遺跡第4次調査

飛鳥寺の西北隅に接し、水落遺跡に南で接する石神遺跡は、1902年に噴水装置とみられる須弥山石・石人像が出土したことによく知られている。当調査部では1981年から継続して調査を行ってきた。その結果、須弥山石の転落位置が確認されるとともに、石組溝、石敷を伴う掘立柱建物、南の水時計地区と北の饗宴地区を区画する基壇付きの東西壙などの貴重な遺構の発見が相次いだ。今回は過去の調査成果をふまえて、各時期の遺構の範囲確認とその実態究明を目的に実施した。調査地は東で第2次調査区に接し、南で第3次調査区に接する水田で、東西約50~53m、南北28~30mである。検出遺構は7世紀前半から中世におよぶが、ここでは7世紀中頃から8世紀初頭にかけての遺構を取りあげる。この時期の遺構は建物・壙の方位、重複関係、整地土、出土遺物からⅠ~Ⅳの4期に大別でき、Ⅰ期をさらに2期に細分できる。

Ⅰ-1期 井戸1、掘立柱建物2、石組溝4、方形区画、石敷がある。建物の方位は方眼北に対して東に約2°振れる。建物の柱抜取状態はまず柱周囲を不整形に掘り下げる、その後ほぼ直上に柱を抜き取り、山上で埋め戻すという特徴がある。これらの点はⅠ・Ⅱ期に共通する。

井戸SE 800はくり抜いた最大厚18cmの杉板材を2枚組み合わせて井戸枠とし、その周囲に人頭大の玉石を方形に敷き、石敷縁として側石を立てたものである。井戸の



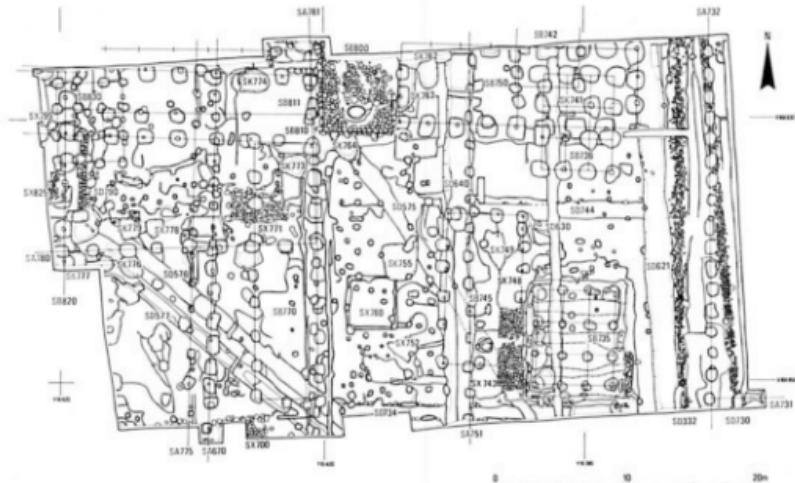
飛鳥地域調査位置図

北には一段低い排水溝を設ける。石敷は、東西が 5.3 m ある。南北規模を側石からみると当初、南側から 4.8 m で側石が西に折れるが、次期には 6.7 m の位置で西に折れ、石敷を拡張している。井戸の深さは 3.8 m あり、約 3 m ほど井戸枠が残る。井戸枠の平面形は紡錘形で、東西の内法は上面で 1.37 m、底面で 1.2 m、南北の内法は各々 0.81 m と 0.67 m である。井戸枠の北と南には、底面の近くに 40~45 cm の孔があく。掘形側に石を詰めており、おそらく取水口の役割を果していたのであろう。なお、井戸からは多数の土器・木器が出土した。

井戸の東と西には石敷の調石掘形と重複して東西に SB 750-810 が建つ。造構の切り合い関係が、柱掘形→側石の掘形→柱抜取穴の順なので、井戸と建物は同時に存在していたことは確かである。SB 750 は桁行 8 間（柱間 2.27 m 等間）、梁行 3 間（柱間 2.0 m 等間）の東西棟建物で、桁行の中央に間仕切りがある。SB 810 は桁行 8 間以上（柱間 2.08 m 等間）、梁行 2 間（柱間 2.6 m 等間）の東西棟建物である。

石組溝には SB 750 の東に北流する SD 730-332, 南に西流する SD 744, 西に SB 810 と重複して北流する SD 790 がある。側石は SD 322 に 1 石残るのみで、他は抜き取られ、SD 744 以外の溝には底石を敷く。なお SB 810 と SD 790 は重複部分の施工順序からみて、共存していたと思われる。

井戸の南方に方形区画 SX 760 がある。幅 20~30 cm、深さ 25 cm の溝状の溝みが一辺約 4 m で方形に巡る。溝状溝みの中央部は粘土化し、北西側で先端を東にした長さ約 30 cm の釘が出土した。釘には縦方向と横方向の木目が残っているので、方形の溝状溝みには四隅を釘止めにした木材が埋没されていた可能性が強い。



石神遺跡第4次調查遺構圖

I—2期 井戸1, 挖立柱建物2がある。井戸は石敷が北へ拡張された時期である。SB 745は桁行5間(柱間1.65~2.95m), 梁行は北妻3間(柱間1.93m等間), 南妻2間(柱間2.9m等間)の南北棟建物である。SE 800の西にあるSB 811は, 桁行6間以上(柱間2.6m等間), 梁行2間(柱間2.5m等間)の東西棟建物である。井戸周辺の石敷の拡張に伴って, SB 810とほぼ同規模の建物を北へ約2mずらして建替えたものと想定される。

II期 挖立柱建物3, 挖立柱塀2, 石組溝1がある。SB 735は桁行3間(柱間2.4m等間), 梁行3間(柱間2.0m等間)の南北棟総柱建物, SB 736は桁行3間(柱間2.4m等間), 梁行3間(柱間1.8m等間)でやはり南北棟総柱建物である。両建物は西側柱筋を揃え, 妻柱間の心々距離で約9m離して, 南北に配列する。SB 735の柱掘形は東西約7.5m, 南北1.2~2m, 檜出面からの深さ1.5mの布掘り工法で施工されている。さらにこの建物の四周に, 柱心から北, 南, 東の三方が約1.6m, 西は約2.8mにわたって石敷が巡る。石敷と建物の柱との間には溝が巡っており, この溝を建物と石敷との間に設けた縁石の抜取跡とみると, 建物の床下は外周石敷より一段高くなっていたと推定できる。西面石敷の西側にはバラス敷SX 743があって, 遺存する範囲は狭いが, 当初はSB 735の周間に幅広く敷かれていたと思われる。石組溝SD 734がこの建物の南面石敷の西延長線にはほぼ一致して, 西流する。側石に一石をたて並べたもので, 底石はない。調査区の西端にあるSB 820は, 桁行6間以上, 桁行2間以上で, いずれも柱間2.4m等間の南北棟とみられる建物である。

掘立柱南北塀SA 670-775は調査区西半部にあり, 北と南は調査区外に延びる。SA 670は16間分(柱間1.69m等間), SA 775は11間分(柱間1.8~2.25m)を検出した。

III期 挖立柱建物2, 挖立柱塀3, 小鎧治炉跡がある。遺構の方位は方眼北とほぼ等しく, 柱抜取法はI・II期とは異なり, 柱掘形を壊す工法である。SB 770は桁行8間(柱間2.1~3m), 梁行2間(柱間2.4m等間)の南北棟建物である。抜取穴からは藤原宮期の土器が出土した。SB 742は桁行2間以上(柱間2.4m), 梁行2間(柱間2.4m)の南北棟とみられる建物である。SA 732は調査区東端にある南北塀で, 北は調査区外に延びる。この南北塀は, 調査区南端で東西塀SA 731と接続する。調査区内でSA 732は16間分(柱間1.65m)を, SA 731は2間分(柱間2.1m)を検出した。一方, SA 751は調査区東半にある南北塀で, 調査区内で11間分(柱間2.1m等間)を検出した。SX 795は調査区西端の北寄りにある。一辺0.6mの範囲に黄褐色粘土を敷き, その中央部が熱のために赤変して焼きしまっている。

IV期 挖立柱建物1, 挖立柱塀2, 素掘り溝2, ほかに土壤が数多くある。遺構は方眼方位北に対して, 西に約1.5°振れる。SB 830は桁行3間(柱間2.0m等間), 梁行3間(中央柱間2.9m, 脇柱間1.5m)の南北棟総柱建物である。この南面と東面にL字状に折れ曲がる塀SA 780とSA 781とがあって, この建物をとりかこむ。調査区内で, SA 780を8間分(柱間2.4m等間), SA 781を6間分(柱間2.7m等間)を検出した。調査区の東半には2条の南北溝SD 640とSD 641がある。いずれも素掘りで, 北流する。このほかに7世紀後半から8世紀初頭の土器が出

土した SK 748・749・755・762~764・773・774・776~779などの土壙が多数ある。

遺物 瓦、土器、土製品、金属製品、木製品、石製品のほか、玉類、動・植物遺存体など出土遺物は多種多彩である。ここでは特徴的なものだけ取りあげる。

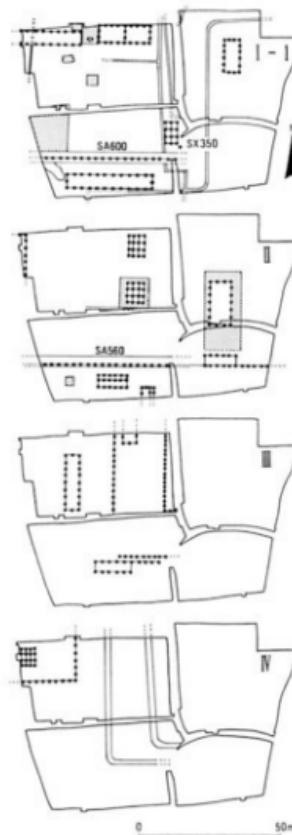
瓦類は主に SB 735 を覆う黄褐色粘土層から出土した。軒瓦は軒丸瓦26点で、その大半は单弁8弁の角端点珠をもつ軒丸瓦と飛鳥寺創建時のそれに類似した单弁10弁軒丸瓦である。

土器には、绳文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器をはじめ、中世の瓦器などがあるが、なかでも7世紀中頃から8世紀初頭の時期(飛鳥III・IV・V)の土師器、須恵器が圧倒的に多い。特にSE 800 の埋土からは飛鳥III期と考えられる約200個体におよぶ土器が出土した。ほかに頸・胸部に梢円形の列点文・鋸歯状文・点半円文をめぐらした新羅土器壺、内面のみを焼した東北地方の黒色土器杯がある。土製品には9脚に復原できる獸脚壺のほかに、円面壺、土馬、フィゴの羽口がある。

金属製品には大量の鉄製品のほか、銅製品もある。鉄製品は主に藤原宮期の整地土・土壙から出土した。鎌、斧、鎌、刀子、ヤリガンナ、カスガイ、釘などの多くの種類がある。なかでも鎌は150点以上あり、特に注目される。

まとめ 今回検出した7世紀中頃から8世紀初頭にかけての造構を、過去の調査成果とともにまとめておく。

I-1期と井戸SE 800の石敷調石を改作したI-2期との時期は、井戸出土土器から、7世紀半ばをやや降る時期と考えられる。第3次調査で饗宴地区と推定した堀SA 600の北側には石敷を作った井戸を中心とし、大規模な建物を配する。このあたりかたは、今後饗宴地区的構造を知る上で重要な手振りになるものと思われる。II期の時期には、堀SA 600の位置は、堀SA 560として踏襲されるが、井戸、石組溝は埋められ、建物配置も異なっている。その時期は7世紀後半でも天武朝の時期に求められる。さらにI期とII期の間には、単なる改作にとどまらない大きな画期がある。饗宴場として利用され続けたものであるか否か、この一帯が早くから飛鳥淨御原宮跡と推定されてきたこととの関連を含めて、なお慎重な検討を必要とする。III期は天武朝の後半期と推定されるが、先の2期とは根本的に異なる単位のもとに当地域が利用



石神遺跡主要遺構変遷図

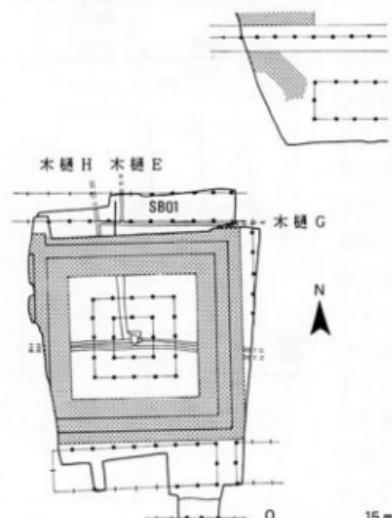
されていたと考えられる。Ⅳ期は藤原宮期にあたり、Ⅲ期の南北塀の位置を踏襲して素掘り溝が掘られ、そこから離れた西北部は塀で区画される。この塀で囲まれた建物は、この地区の中心建物とは言いがたい。従来この時期の遺物は大量に出土していたにもかかわらず、遺構は稀薄であった。今回、建物・塀を検出したことにより、藤原宮期における利用形態の一端も明らかになったといえよう。

2. 水落遺跡第5次調査

史跡整備のための資料を得る目的で行った調査である。調査地は時計台の建物のすぐ北側で、昨年まで旧飛鳥小学校の校舎が建っていた跡地である。発掘した範囲は、東西25m、南北約6m、面積150m²ほどである。

検出した遺構はⅠ期・Ⅱ期の二時期に大別でき、Ⅱ期はさらにⅡ-1期、Ⅱ-2期に細分できる。Ⅰ期は時計台の建物と同時期で7世紀中頃を少し下った時にあたり、Ⅱ-1・Ⅱ-2期は、7世紀後半でも中頃以降に相当する。この時期区分は石神遺跡のⅠ・Ⅱ両間に相応する。

Ⅰ期の遺構には、掘立柱建物1、木樋3、銅管がある。掘立柱建物SB01は時計台の建物の外周貼り石溝のすぐ北にあり、東西9間(24.3m)以上、南北1間か2間(4.2m)の東西棟である。桁行の柱間寸法は、2.74m等間。時計台の建物や、その南に建つ掘立柱の付属建物と柱筋が通っており、これらの建物が一連の計画で造営されたことは確実である。柱掘形は方1.6m、深さ1.5mとくに大きい。柱は径38cmの円柱で、すべて抜き取られており、時計台の建物と一緒に解体されたことが知られる。この建物の地下には、水を流すための銅管や木樋が縱横に張りめぐらされている。



水落遺跡第5次調査遺構図

銅管は内径が0.9cmの細いもので、長さ6.5mを検出した。1981年に時計台の建物の中央で発掘したものの北延長部にあたり、今まで総長18.2m分を検出したことになる。銅管は建物SB01の地下で二又に分かれており、一本はそのまま北へのび、枝分かれしたもう一本は建物の北端で地上に立ち上がる。後者は長さ30cmを残すのみで、先端は失われている。銅管を地中に埋め込むにあたっては、まず、木くずを漆で塗り固めたものでくるみ、さらに、これを幅10cmほどの材木を木樋のようにくりぬいた中におさめて、ていねいに埋めこむ。時計台の建物の中央から北へ次第に低くなり、分岐点まで80cmの落差がある。この銅管は、時計台の建物内から北方へ水を導くための通水管とみられ、水落遺跡の北

方には、特殊な水カラクリの存在が想定できる。

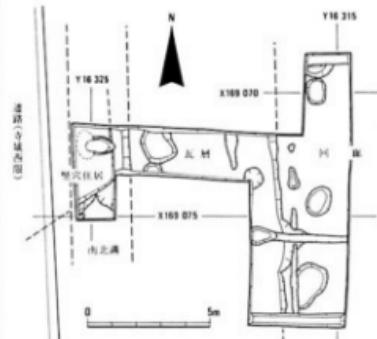
木樋は2条ある。木樋Eは外寸で、幅・深さとともに約30cm。水時計で使う水を取水したあとの余剰水を北に流す暗渠で、建物SB01の地下を南北に通って、北へ抜ける。木樋Gは本体は遺存していないが、その掘え付け痕を検出した。建物SB01の南縁に沿って東から西へとのび、木樋Eや銅管の上を立体交差して、さらに西へ連なる。木樋Eとほぼ同規模で、全長18m分を確認した。木樋GはSB01の西よりで、北へ折れる木樋Hに連結し、建物外の北へ続く。木樋Hは本体は遺存しないが、外寸幅50cmで木樋E・Gに比べて一まわり大きい。全長6m分を確認した。このように、水落遺跡の付近一帯には、水時計を中心に、銅管や木樋を使った地下水路が複雑に張りめぐらされているのであり、今後、全体像の解明が期待される。

なお、II-1期には東西7間、南北2間の掘立柱建物が、II-2期には東西4間以上、南北3間で、北廻付きの東西棟とみられる掘立柱建物がある。II期の建物群は時計台の建物を撤去後に建てられており、7世紀後半に、この地域の土地利用に大改造のあったことが知られる。

3. 飛鳥寺周辺の遺跡

飛鳥寺西回廊（J地点）の調査　車庫改築に伴う事前調査である。1956・57年の調査成果によれば、調査地は回廊西北隅に近く、西回廊から寺域西限施設までの間と推定された。調査の結果、回廊基壇の基底部とみられる高まりを検出した。この高まりは版築状の薄い粘土層からなり、調査区の東端から西へ約3mの位置で急激に落ちている。この上面の西端に、南北方向の細長く浅い土壤がある。もしこの高まりを回廊基壇の一部と考えれば、この土壤を縁石抜取痕とみることができる。高まりに接して、西側には瓦屑が厚さ約20cmで広がっている。瓦は敷かれた状態ではなかった。瓦屑は伴出した土器などからみて、奈良時代の整地層だろう。調査区の西端で、南北溝の東半部を検出した。浅いU字状を呈した素掘り溝で、位置から飛鳥寺の西限を区画する施設に沿って南北に延びる溝とみられる。瓦屑で覆われており、溝の理土から大量の瓦片とともに、7世紀中頃～後半の土器片や円面鏡が出土した。なおこの南北溝の下で、カマドを作りつけた竪穴住居を検出した。出土土器や層位から6世紀代と考えられる。

飛鳥寺西門（K地点）の調査　農小屋建築に伴う事前調査で、調査位置は安居院の西約70mである。1956年の調査（飛鳥寺第1次）で西門の造構の一部を検出しており、この調査区の東端に西門南西部がおよぶと推定される。一方、1966年には今回の調査区の西と南にある水田で、樋原考古学研究所が調査を行った（飛鳥京第11次）、石敷や石組溝などが検出されている。さらに北の水田では1969年の調査



飛鳥寺西回廊（J地点）調査遺構図

(飛鳥京第18次)で、石組溝の延長部が確認されており、今調査区にも一連の遺構がおよぶものと推定されている。そこでこれらの成果にもとづいて、西門、および周辺部の実態究明を目的に調査を実施した。

調査の結果、南北トレンチで二種の積土層を確認し、東西トレンチで西から順に石組小溝、石組大溝、石列等を検出した。西門については明確な遺構を検出できなかったが、その位置からみて、南北トレンチの積土層が西門の基壇土の一部と考えられる。積土層の上面には小石の抜取痕跡があった程度で、礎石や基壇縁石などの抜取痕跡は確認することはできなかった。飛鳥寺第1次調査で検出した礎石上面高の推定値より、今回の積土層の検出面高が、約40cm下であるのを考えると、基壇土自体が後世に大きく削平されているのだろう。

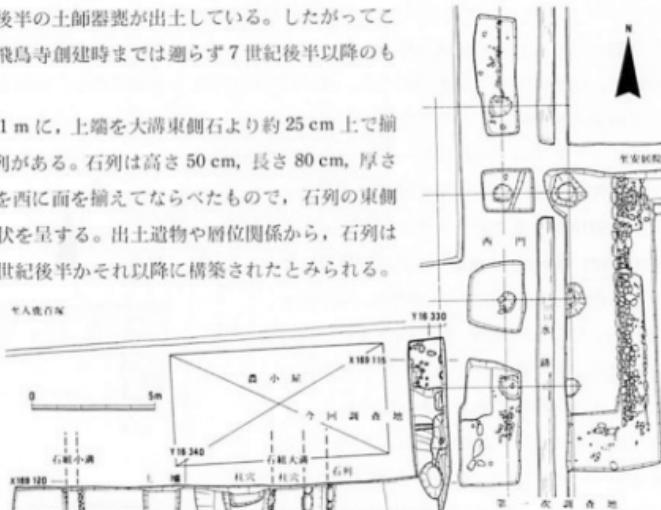
石組小溝(県調査SD 6684)は上幅42cm、深さ13cmの南北溝で、長さ1.2m分を検出した。南側での調査分をいれると南北総長26m以上となる。溝は礫・瓦片を含む整地層を切りこんで作られている。側石は20cm大の玉石一段からなるが、西側が総じて大振りである。しかも西側石が据え付け溝の底にあてているのに対して、東側石は10cm余浮いた状態にある。溝の東西にみられる整地層の違いを重視すれば、西側石は西にある基壇の縁石の可能性が考えられる。

石組大溝(県調査SD 6685)は上幅1.25mの南北溝で、長さ1.2m分を検出した。この溝はすでに検出されている石組溝と一連であるから、飛鳥寺寺域西殿にそって、すくなくとも南北約120mにわたって設けられていることになる。側石は80cm大の花崗岩、河原石一段からなる。側石の上端の高さをみると、東側石の方が約10cm高い。側石の裏込めから、多量の瓦片・礫とともに7世紀後半の土師器甕が出土している。したがってこの石組大溝は、飛鳥寺創建時までは遡らず7世紀後半以降のもとのみられる。

石組大溝の東1mに、上端を大溝東側石より約25cm上で掘えた、南北の石列がある。石列は高さ50cm、長さ80cm、厚さ20cmの花崗岩を西に面を揃えてならべたもので、石列の東側は一段高い基壇状を呈する。出土遺物や層位関係から、石列は大溝と同じく7世紀後半かそれ以降に構築されたとみられる。

なお石組大溝と

素掘り溝の下の
2ヶ所で柱穴を
検出した。いず
れも一辺1.2m
以上の大型の掘
形である。出土
遺物からみて、



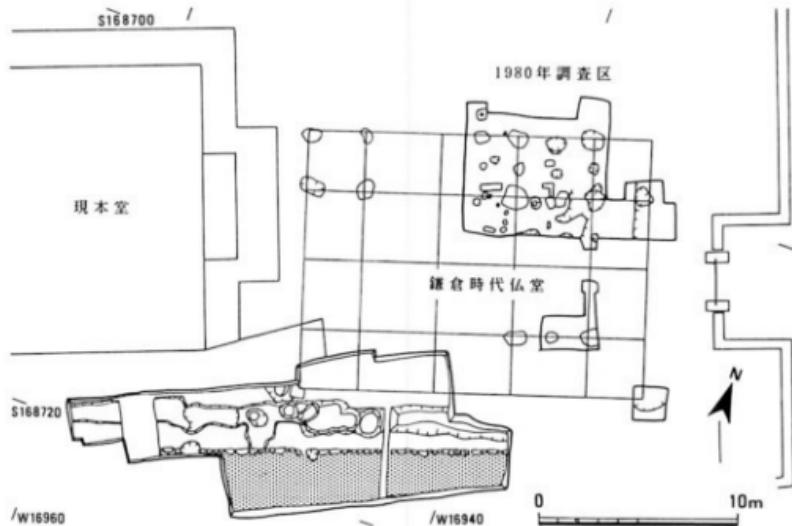
飛鳥寺西門(K地点)調査遺構図

時期が異なるとみられる。飛鳥寺の西方は『日本書紀』に記された概本の広場の存在が想定されており、その一角とみられる石神遺跡では、7世紀に大改造された遺構群が重複していることが判明している。西門西方で検出された石組溝、石列等についても同様の状況下で造作・整備されたものと理解できる。

4. 豊浦寺・豊浦宮の調査

向原寺の庫裡改築に伴う事前調査である。周知のように周辺一帯は蘇我氏が造営した豊浦寺あるいは推古天皇の豊浦宮の故地に比定されており、すでに数回にわたる調査が実施されている。1957年には奈良県教育委員会によって、境内で中世の礎石建物、その南接地で7世紀後半の瓦をともなう二重基壇の建物、さらに南で塔と推定される遺構が検出されている。1980年には当調査部が薬師堂の改築に伴って、中世の礎石建物を再調査した結果、この建物は鎌倉時代初めに再建された床板張りの仏堂で、室町時代後半に焼失したこと、その下層に創建時の基壇とみられる版築層が存在することが判明した。今回は、創建期基壇の規模や年代、さらに下層遺構の存否の確認を目的とし、東西22.5m、南北7.7mの範囲で発掘調査を行った。検出した主な遺構には、創建時の豊浦寺にかかる遺構と豊浦寺創建以前の下層遺構がある。

豊浦寺の遺構 調査区の北半部で、創建期の版築基壇を検出した。基壇は掘り込み地業をせずに、古墳時代の遺物を含む黒褐色土や先行する整地上の上に直接版築して築く。版築層は黄褐色土と青灰色土とを主体に、平均5cmの厚さで積み重ね、最も遺存状態の良い所で、高さ1.1mを残す。版築土中には丸瓦や平瓦の小片がかなり含まれていた。基壇の上面は近世に



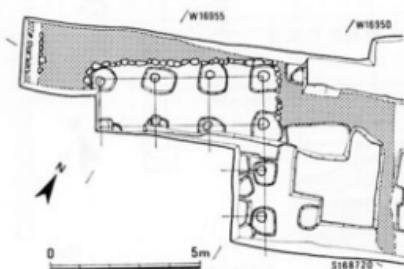
豊浦寺調査遺構図

著しく攢乱されており、鎌倉再建仏堂の礎石位置を示す遺構すらすべて破壊されていた。

調査区南半部ではひと抱えほどの大きさの花崗岩玉石や基壇化粧の凝灰岩切石を転用して東西に並べた石列を検出した。この石列は創建基壇の南縁を画する雨落溝の南側石と考えられる。全長約18mにわたって遺存し、発掘区外に延びる。基壇化粧石はすべて抜取られていた。雨落溝のすぐ南には25cm前後の大きさの玉石が敷かれており、さらにその南側は人頭大から拳大の玉石を使った石敷へと続く。雨落溝と玉石敷は下層から出土した土器からみて、奈良時代以降に設けられたことは明らかである。創建時には基壇だけでその外側は整地土がそのまま境内面になっていたとみられる。

今回検出した基壇建物は、豊浦寺創建時に遡る主要な建物の一つである。基壇の規模は前回の調査成果を総合すると、東西30m以上、南北15mとなり、建物は大規模な東西棟礎石建物であったと考えられる。その規模や位置から、この建物は講堂の可能性が高い。建物の方位は方眼北に対して、西へ約19°振れている。また造営した時期は、基壇南側から多量に出土した単弁軒丸瓦や丸瓦・平瓦から7世紀の第2四半期とみられる。その後、奈良時代以降に雨落溝や玉石敷がつけ加えられ、10世紀以降に倒壊ないし焼失したものと考えられる。鎌倉時代初頭になって、この基壇の東寄りの部分を利用して仏堂が再建されたが、この建物も室町時代後半には再び焼失したとみられる。なお、基壇築成に先行する土壤からは飛鳥寺と同様の単弁軒丸瓦が多数出土し、また版築土からも瓦が出土しているから、この大規模な基壇建物に先行して、別に瓦葺きの建物が周辺に存在した可能性が強い。

下層遺構 基壇とその南にひろがる整地層の下層から石敷とともに掘立柱建物などを検出した。建物は桁行3間(柱間約1.56m等間)以上、梁行3間(柱間約1.83m等間)の南北棟総柱建物である。柱掘形は一辺1m、柱の復原径は約30cmあり、建物の方位は方眼北に対して30°西へ振れる。施工順序は、まず旧地表面に掘形を穿つて柱を立て、その上に厚さ約10cmの整地土を盛り上げる。北妻柱筋から北へ約1.5mの位置には拳大の玉石を並べ、その北側に玉石を敷いて建物周囲を化粧する。その後西側の丘陵から土が流れ込んで玉石が埋没するに及んで、建物の内側や周辺を再度黄褐色山土で整地する。さらに柱筋から約30cm離して建物の周間に



豊浦寺下層建物遺構図

玉石列を設け、その外側には玉石やバラスを敷き詰め、また床下にあたる部分にもバラスを敷いている。建物の西側では柱筋から約2m離して見切りの玉石を据え、その外側に幅約25cmの雨落溝とみられる施設を設けている。この建物の時期は出土した土器からみて、7世紀初頭をそれほど下らないものと考えられる。

この下層建物は玉石敷を伴うことなど飛鳥

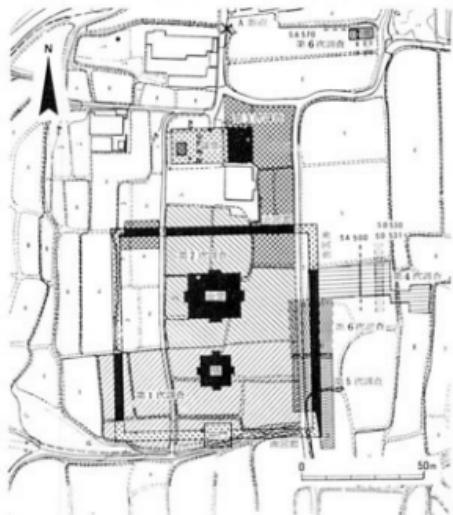
の他の宮殿造構に共通する点が多い。しかも豊浦寺は豊浦宮（593～603年）の跡地に造営されたと伝えられており、今回検出した下層造構が豊浦宮の一部にあたる蓋然性は強いといえよう。周辺地域での今後の調査の進展を期待したい。

5. 山田寺東回廊・寺域東北部（第6次）の調査

第4・5次調査によって回廊の規模が判明し、また回廊の建築部材が多量に出土したため建物の復原が可能になった。東回廊の東では、南北方向の基幹排水路と南北堀を検出し、これが寺域内を区画する施設である可能性が強かった。今回は回廊建物のより詳細な復原資料を得ることと、南北23間を数える東回廊の中央12間目での入口の存否を検討すること、さらに基幹排水路と南北堀の性格を明らかにすることを主たる目的として調査を実施した。東回廊の調査区は北から9間目から15間目までの南北29m、東西18mの範囲で、北は第4次調査区に、南では第5次調査区に一部重複する。寺域東北部では南北堀の東北側の推定位置に、東西10m、南北5mの調査区を設定した。

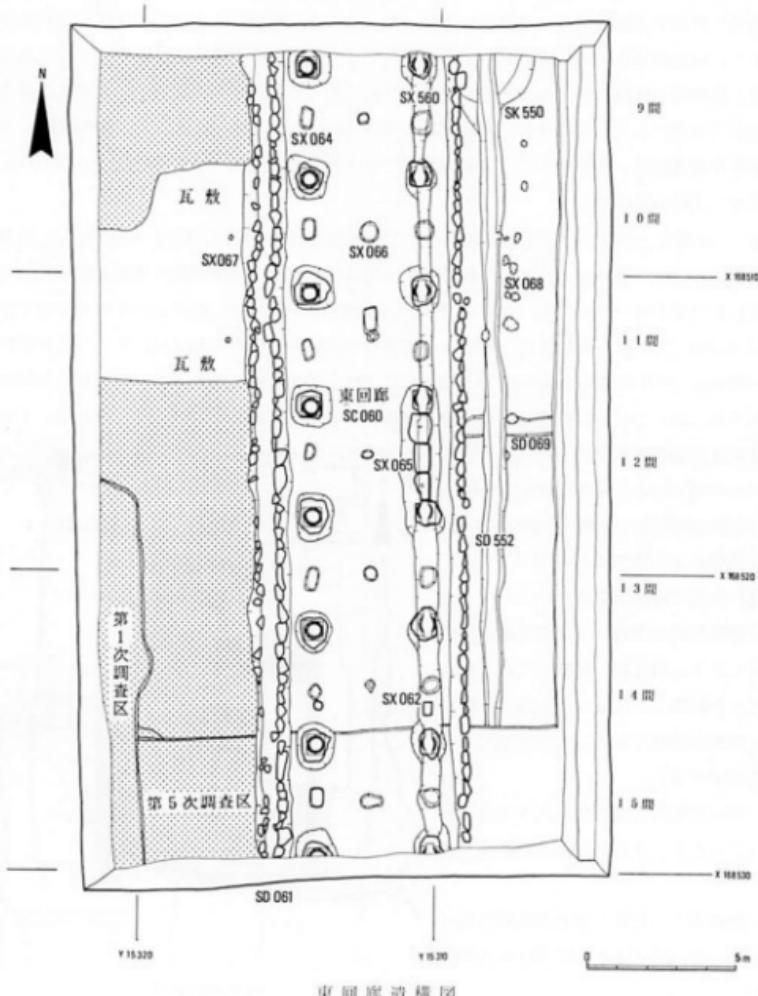
回廊　回廊は土間床の單廊で、礎石はすべて原位置を保つ。柱間の桁行・梁行ともに3.78mの等間で、1尺=36cmの高麗尺で計算すれば10.5尺になる。回廊の東西基壇化粧は、おもに花崗岩の自然石を一段立て並べたものである。基壇幅は約6.4m、礎石心から基壇縁までの距離は1.3mである。東側柱列では北から12間目の入口推定位置を除けば、すべての柱間に幅60～80cm、深さが礎石上面から30～35cmほどの小溝があり、なかに瓦・博・板石が詰め込こんでいた。これらは地覆石を抜き取った後、その空隙に詰めたものと考えられる。その時期は第5次調査の所見によれば、9世紀前半～中頃である。基壇西側の化粧石は、回廊西雨落溝の東側石を兼ねており、溝の西側石より大型の石を用いている。基壇の東側には雨落溝は設けられていない。建築部材は調査区南半部で遺存度が良好である。特に13・14間目で連子窓が組まれた状態で出土するなど、部材の量・種類が豊富である。今回判明した要点を列記する。

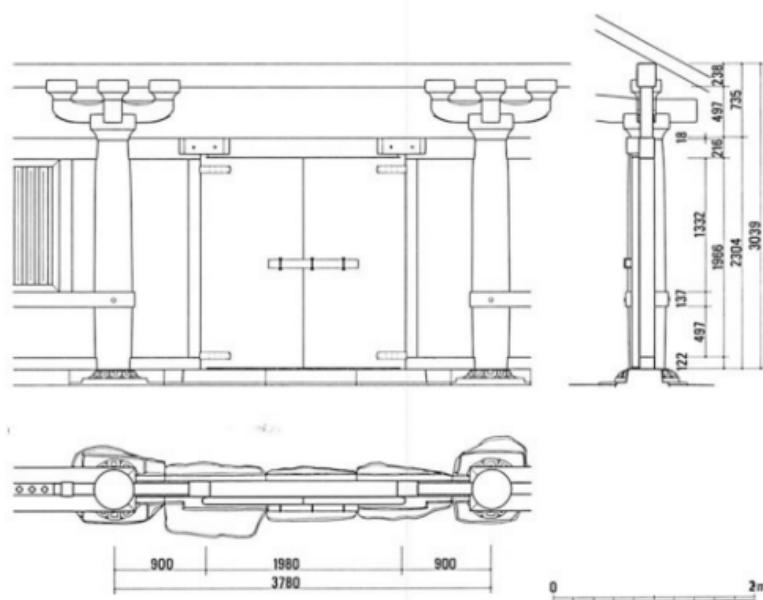
- (1) 13～15間目の頭貫のうち1本は、三間分にわたり、その全長は11.32mである。
- (2) 腰壁東と斗栱間小壁とが良好に残っており、その高さはともに50cmと判明した。



山田寺調査位置図

- (3) 肘木は第5次調査で、舌を有することが判明している。今回出土した肘木のうちの一本はその上半部が良好に残っており、全長が1.2m、巻斗の心々間が50cmと判明した。上面の巻斗間には背縫りを施した上にさらに箆縫りを設けている。
- (4) 茅負は3点が良好に残る。L字状の断面形を呈し、断面の寸法で大小2種がある。大型のものは15cm角の材で、残存長が5.7mに及ぶ。瓦縫りの間隔は約31cmで、柱間一間(3.78m)につきほぼ12列並ぶ。垂木には釘で打ち付けており、釘穴間隔は長いところで2.51mに及





東廻廊建物中央扉口復原図

ぶ。小型のものは 11 cm 角の材で、釘穴 2 本が約 60 cm 離れて残っている。垂木割りは瓦割りにはほぼ一致していたものと判断される。

(5) 壁木舞は縱横一方を心として、その両面から直交方向の木舞で挟むが、腰壁・連子牆小壁は横木舞を、斗拱間小壁は縱木舞を心とする。

東扉口　回廊の 12 間目で東扉口を検出した。東側柱列の礎石間に、原位置を保つ 3 個の花崗岩製地覆石があり、この上に地覆材が残っていた。地覆座の幅は 3 つとも 32 cm 前後である。北と南の地覆石には礎石の地覆座と同じ幅(25 cm)の切り欠きがある。地覆石の長さは北から順に、101 cm, 90 cm, 95 cm である。北と南の地覆石には軸摺穴(径 8 cm, 深さ 5 cm)が穿たれ、北側の軸摺穴の中には内径で 6 cm ほどの軸摺金具が残存していた。

遺存した部材から、扉口は連子窓を構える他の柱間と同一の加工で、柱高も変らず、一連の屋根が続く構造となることが判明した。さらに以下の諸点が知られる。

- (1) 扉は内開きで、軸摺穴は地覆石を直接穿つ。軸摺穴の心々間の距離 1.98 m は、柱間が高麗尺で 10.5 尺なのに対して、5.5 尺に当る。法隆寺の 6.5 尺余に較べて開口幅が狭い。
- (2) 戸当りとなる地覆は柱間いっぱい入れる。地覆の幅は他の柱間より狭く頭貫の幅に揃える。
- (3) 扌口にも内法長押は用いず、軸摺穴を穿った別材(臺座)を頭貫に打ち付けたと判断される。扉口付近から出土した部材に、長さ 50 cm で両端木口を斜めに切り落とし、ノミ彫りの釘穴 2

ケ所を残したものと、軸摺穴の一部とみられる断片があり、墓座と考えられる。

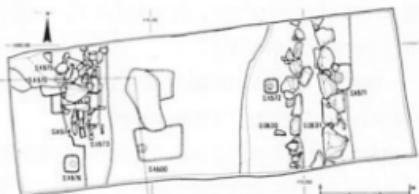
(4) 連子窓下の長押は、扉口両脇の柱で留に回す。

以上から復原できる扉構えは、頭貫・地覆間に方立を立て、地覆石と墓座に穿った軸摺穴に扉板を釣り込む形式となる。法隆寺回廊の扉口の現状に較べて、開口部が狭く、構成部材の少ない簡単な形式である。扉板の形状、門等の施錠施設は不明である。なお復原図は柱間寸法から割り出した1尺=36cmを採用し、最小単位を5分・2分として数値を整理したもので、整理途中の暫定的数値である。

寺域東北部 道構は複重関係から3期に大別できる。

I期には南北解 SA 500、東西解 SA 570、柱穴 SX 571、南北素掘り溝 SD 530がある。南北解 SA 500は2間分を検出しただけである。東北側の柱は南東方向に抜き取られており、南側の柱掘形の一部を壊している。南の柱掘形には上部をノミで切断した径29cmのヒノキの柱根が残る。柱間寸法は約2.3mになる。東西解 SA 570の西側の柱掘形は新しい土壤で大半が壊されていたが、柱掘形の一部と柱痕跡とを確認した。掘形の大きさと柱痕跡の径とからみて、南北解 SA 500は西にL字状に折れ曲り、東西解 SA 570に連なるとみて間違いない。東西解 SA 570は、従来北限を画する解の一部と考えられていた柱穴(A地点)に連なるのである。時期を特定できる手懸りはないが、塔・講堂建立時には存在したとみられる。位置・規模からみて、南北解 SA 500、及び東西解 SA 570は、寺域内の区画施設の可能性が強いと考えられる。溝 SD 530は、上幅3.5m、深さ30~40cm。溝 SD 530の東肩部で柱穴 SX 571を検出した。径37cmのケヤキの柱根が残る。II期の道構には柱穴 SX 576、暗渠 SX 573-574、石組溝 SD 531がある。暗渠 SX 573は底と側に埠を用い、埋土から奈良時代末の瓦が出土した。暗渠 SX 574は、暗渠 SX 573を改作した暗渠で、東側は暗渠 SX 573の埠をそのまま使い、西側を石組とする。埋土から平城宮III期に属する瓦が出土した。暗渠の上部には土解状の構築物の存在を推定することができる。石組溝 SD 531は、上幅が65cm、深さが40~60cmである。埋土からは多量の瓦、そして土馬・土師器・須恵器・黒色土器が出土した。土器では11世紀前半頃までの遺物が含まれる。

III期には暗渠 SX 573-574を壊して土壤 SK 575が掘られた。土壤 SK 575の埋土から10世紀から12世紀前半にわたる土器が多く出土した。



寺域東北部調査道構図

以上のように、今回の調査において、東回廊の扉位置を確認し、その構造を復原できる資料を得るとともに、寺域東北部の実態を解明する手懸りを得た。山田寺の全体像を理解するためには南門、あるいは僧房、食堂などの諸施設を明らかにすることが今後の重要な課題である。(木下正史・深澤芳樹)

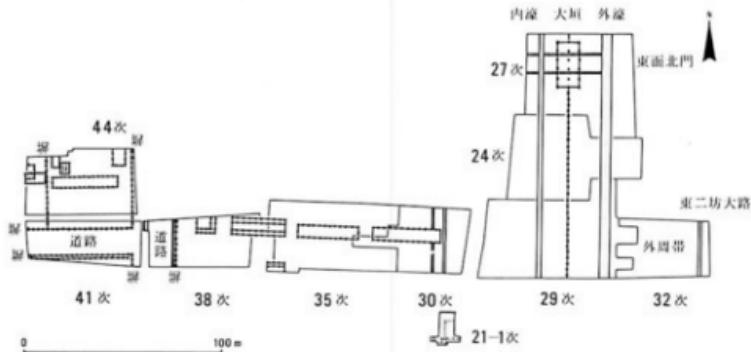
藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1984年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、藤原宮・京城において、東方官衙など20件におよぶ発掘調査を実施した(20頁表)。以下に主要な調査の概要を報告する。

藤原宮東方官衙地域(第41・44次)の調査 東方官衙地域では、過去3回の調査で、東面北門の西側に整然と並ぶ長大な建物群が確認されている。調査地は第38次調査区の西に接する水田で、内裏と宮内先行条坊東二坊大路の位置を踏襲した宮内道路との間にある。検出した主な造構には掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土壤、道路跡などがある。その時期は弥生時代から中世に及ぶがなかでも藤原宮期の造構は、A・Bの2期にわけられる。

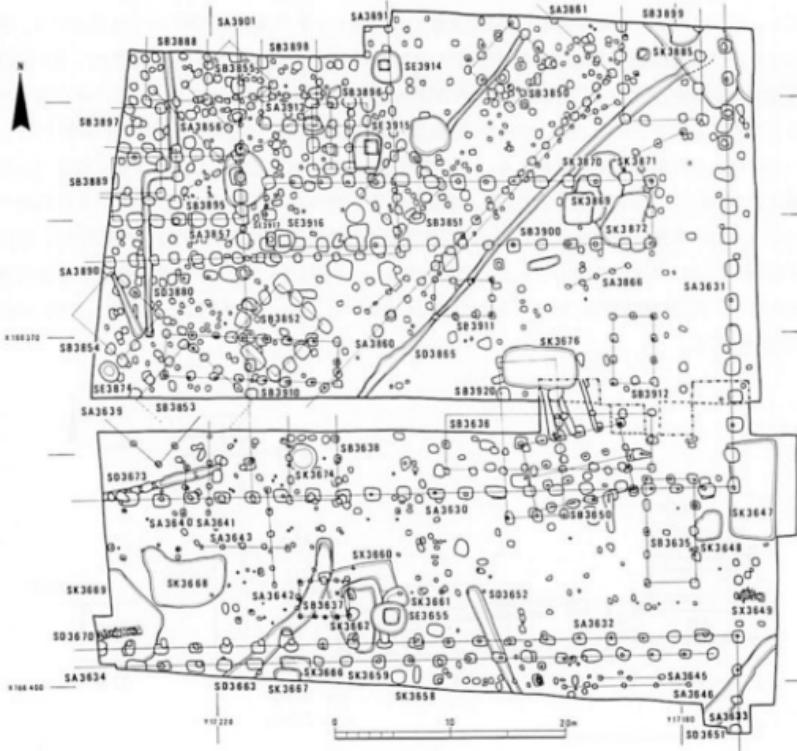
藤原宮A期 掘立柱建物SB 3895-3896と、長大な掘立柱塀SA 3630~3634がある。この地区は東西および南北方向の塀によって二つのブロックに区画され、その区画内に建物が配置される。北のブロックは東西塀SA 3630(柱間2.6m前後)と南北塀SA 3631(同)で区画される。南のブロックは北面を限る塀が当初SA 3634(柱間2.6m前後)であったものが改作されてSA 3632(柱間2.6m前後)となり、東は南北塀SA 3633(柱間2.7m前後)で区画される。この両ブロックが各々異なる官衙と推定され、官衙を区画した東西塀の間は、宮内の南北道路SF 3499にとりつく道路として機能したと思われる。この東西道路心から東面北門心の西への延長線までの距離は約90mで、この数値は東面北門と東面中門の距離のはば三分の一にあたる。北の官衙ブロック内では2棟の建物を検出した。東西棟建物SB 3895は桁行6間(柱間1.77m等間)、梁行3間(柱間1.77m等間)を検出したが、西妻があるいは間仕切りとなって建物が西に延びる可能性もある。南北棟建物SB 3896は桁行3間(柱間1.77m等間)、梁行3間(柱間1.6m等間)の柱建物である。



東方官衙地域造構配置図

藤原宮B期 挖立柱建物 SB 3897-3898-3900 と掘立柱塀 SA 3630~3633-3901 がある。北官衙ブロックの塀 SA 3630-3631 と南官衙ブロックの塀 SA 3632-3633 は踏襲される。北官衙ブロックは南北塀 SA 3901 (柱間 2.65 m 等間) によって、さらに小さく東西の 2 区画に分けられる。この塀は南を画する塀 SA 3630 の東から 17 番目の柱に取り付く。塀 SA 3901 の西側の区画内で東西棟建物 SB 3897 を検出した。桁行は 2 間以上 (柱間 2.65 m), 梁行は 3 間 (柱間 2.35 m 等間) である。東側の区画内では北を正面にコの字形に配置された 3 棟の建物を検出した。南に建つ東西棟建物 SB 3900 は桁行 14 間 (柱間 2.35 m 等間), 梁行 2 間 (柱間 2.65 m 等間) の細長い建物で、藤原宮官衙建物の特徴を備えている。南北棟建物 SB 3898 は SB 3900 の北西にあり、桁行 2 間以上 (柱間 2.65 m 等間), 梁行 2 間 (柱間 2.35 m 等間) である。南北棟建物 SB 3899 は SB 3900 の北東にあり、桁行 3 間以上 (柱間 2.65 m 等間), 梁行 3 間 (中央間 3.2 m, 脊柱間 1.8 m) である。

古墳時代の造構 5 世紀代と 6 世紀代後半の造構がある。前者は掘立柱建物 SB 3650 である。桁行 5 間 (総長 8.8 m), 梁行 3 間 (総長 5.7 m) の東西棟総柱建物で、棟持柱を妻中央部分の妻柱



第41・44次調査造構図

筋から約20cm外側に立てる。柱根は合計15本残存していた。すべての断面が長方形の角柱で、棟持柱は梁行方向に長辺を向けているのに対して、他の柱はすべて長辺を桁行方向に合わせている。棟持柱や長方形の角柱の存在が注目される。

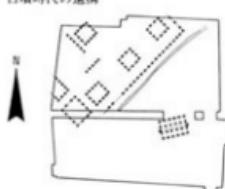
6世紀後半では掘立柱建物、掘立柱塀、斜行溝等を検出した。斜行溝SD3865は、方眼北に対して約45°振れる。SD3865の北西方へ2.5m離れた位置に、これと平行する掘立柱塀SA3860があり、調査区の北東端ではほぼ直角に折れ曲がって掘立柱塀SA3861に連なる。建物SB3850～3852は塀SA3860から約4m離れた内側に、柱筋を揃えて、隣棟との間隔をほぼ等しくして建ち並んでいる。また建物SB3853～3855や塀SA3856・3857もSA3860とSA3861とに囲まれた中に集中する。このように塀と溝などで区画した内側に、計画的に建物を配置しており、豪族の居宅や屯倉等の公的施設に関連する可能性が考えられる。

7世紀後半の遺構　掘立柱建物、掘立柱塀等を検出した。調査区の北西部に東西塀SA3890とこれにL字形に取り付く南北塀SA3891がある。塀で区画された内側には南北棟建物SB3888と東西棟建物SB3889がある。これらは宅地の一部と考えられ、藤原宮直前のこの地域における居住地の様相を具体的に解明していく手懸りが加えられたといえる。

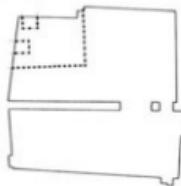
平安時代初期の遺構　掘立柱建物、掘立柱塀、井戸がある。桁行7間の大きな建物を中心配置する形式は、初期庄園遺構として注目されている北陸の諸遺跡等にみられる配置と類似しており、庄園関連遺跡である可能性が高い。この点で、藤原宮第36次調査で出土した庄園関係木簡が注目される。これには「宮所庄」という庄園名が記載されていた。本調査区南方に「宮所」という小字名があることなどから考えて、藤原宮城内に文献史料にみえない小規模庄園を想定できよう。本遺構もこれらの庄所の一つに関連させて理解することもできる。

以上、今回検出した藤原宮期の官衙遺構は、内裏のすぐ東に接する重要な場所にあたり、70～80m四方の敷地を占めていたとみられる。A期には中を特に区分することなく使用していたが、B期では南北塀SA3901を設けて敷地を東西に二分し、A期とは全く異なる官衙配置に変えている。藤原宮の官衙配

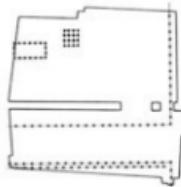
古墳時代の遺構



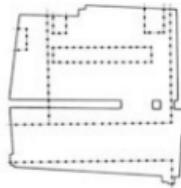
7世紀代の遺構



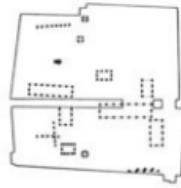
藤原宮A期の遺構



藤原宮B期の遺構



平安時代の遺構



第41・44次調査主要遺構変遷図

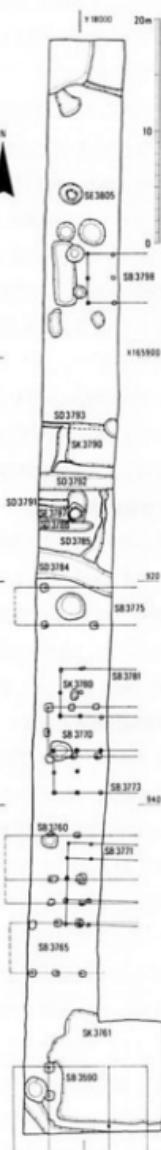
置に2時期の変遷があり、しかもその間に大幅な変更があることが初めて明らかになった。藤原宮の存続期間はわずか16年であり、この改造は掘立柱建物の耐用年数といった技術的な要因によるものとは考えがたく、政治的な理由による可能性が強い。ここで想起されるのは、遷都後6年して発布された大宝律令である。A-B 2時期の変遷は、大宝律令をもとにした官衙機構の整備・充実の結果と解される。とすれば、今回の調査で初めて明らかになった官衙配置の大幅な変更は、東方官衙の1ブロックにかぎられた現象ではなかろう。また当地域では藤原宮期だけではなく、古墳時代から平安時代に至る各時代を通して建物遺構が検出されており、各時代の建物の性格や配置を考えるうえで貴重な資料を得た。

右京二条三坊（第43次）の調査

右京二条三坊（第43次）の調査 国道165号線櫛原バイパス建設工事にともなう事前調査である。昨年度実施した第39次調査区に南接し、藤原京条坊では、右京二条三坊東北坪・東南坪にあたる。南北98m、幅6mのトレンチを設定した。検出した主な遺構に、藤原宮期の掘立柱建物5、溝1、土壙1のほか中世の掘立柱建物4、溝5、石組井戸がある。

藤原宮期の遺構のうち、溝 SD 3793 は調査区北から南へ 35 m のところにある幅 0.4 m の東西溝で、二条条間路北側溝にあたる可能性が高い。第39次調査区の北端で検出した建物 SB 3590 は、桁行 7 間、梁行 4 間の南北棟東西廂付き建物であることが確定した。柱間寸法は桁行 2.65 m、梁行は身舎部分が 2.65 m、東廂 3.5 m、西廂 3.2 m である。これ以外の建物はいずれも東西棟とみられるが、発掘区が制約されていたために全貌は明らかでない。SB 3765 は SB 3590 の北 8.4 m にある。桁行 4 間以上で、柱間は 2.1~2.4 m とやや不揃いである。梁行総長は 4.5 m である。SB 3765 の北にある SB 3760 は桁行 3 間以上の東西棟建物である。身舎の桁行 2.6 m、梁行 2.0 m、南に出幅 2.2 m の廂をもつ。SB 3770 は SB 3760 の北 6 m にある。桁行 3 間以上、梁行 2 間の東西棟建物である。柱間寸法は桁行 2.0 m、梁行 2.2 m である。建物間に直接重複関係はないが、SB 3760 と SB 3765 とは棟間間隔が 1.6 m と近接しており、建物方位も異なるので、時期を異にするとみられる。SK 3790 は浅い土壙で藤原宮期の土器が少量出土した。SK 3790 は二条条間路北側溝 SD 3793 と重複し、溝より新しい。

第39・43次の調査成果を総合すると、右京二条三坊東南坪では、藤原宮期の建物には二時期の建替えのあったことが知られる。しかし建物の占地状態から、両時期を通じて細かく分割されることなく、一坪全体を



第43次調査遺構図

古地した宅地であったと考えられる。

左京二条三坊(第41-13次)の調査 住宅新築にともなう事前調査である。調査地は藤原京左京二条三坊西南坪にあたる。西と東とに調査区を設定し、坪内の利用状況を明確にする目的で調査を実施した。西区では藤原宮期の掘立柱建物2、東区で掘立柱塀1を検出した。

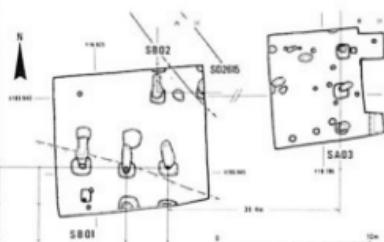
西区の建物SB01は、東と西に廂をもつ南北棟建物と考えられる。大半は発掘区外となる。柱掘形は一辺1.2~1.4mと大きく、北あるいは東からの抜取穴がある。このうちの一つには直径約29cmの柱根が遺存していた。抜取穴と柱根から復原される柱間寸法は身舎梁行2.9m、廂2.7m、栱行2.4mで宮の殿舎に匹敵する規模をもつ。坪の内での主殿あるいは脇殿級の建物であろう。SB01の北約4.8mにある建物SB02は、東西1間、南北1間を検出したのみで、建物の規模等詳細は不明である。柱掘形は一辺1mで、柱抜取穴には凝灰岩質砂岩が含まれていた。建物方位はSB01と同じく北でやや東に振れる。

東区には南北塀SA03がある。これは柱穴3個を確認しただけであり、建物の可能性もある。柱掘形は一辺1mの方形で、北からの柱抜取穴がある。柱間寸法は2.6m等間に復原できる。柱穴の埋土や規模からみて、塀SA03は西区の建物SB02と同一時期の造構と考えられる。

今回検出した建物SB01は坪内の中心的建物群の一部を構成するものである。その位置を条坊地割との関わりで検討しておくと、妻柱の位置は東三坊大路と東三坊坊間路の二分の一に、東入側柱は道路分を差し引いた坪の二分の一にほぼ一致する。さらに、北側柱列は推定二条大路の北約90mにあって、坪の三分の一に一致し、この南北棟建物は坪のほぼ中央部にあることになる。今回調査では、宮周辺の坪内で大規模な建物を確認し、宮を挟んで対称位置にある第39・43次調査の成果とともに藤原京の宅地割・建物配置を究明する上で手懸りを得た。

右京二条三坊(第41-16次)の調査 店舗新築にともなう事前調査で、右京二条三坊東北坪および一条大路の想定位置にあたる。南北28.5m、東西3.5mのトレンチを設定し、調査を実施した。その結果、藤原宮期の掘立柱建物1、土壙1、溝1を検出した。

調査区中央に位置するSB02は栱行5間、梁行1間の南北棟である。SK03は南北径1.7m、深さ0.3mの土壙で、西半部は発掘区外にひろがる。SD01は、現状で幅1.3m、深さ0.3mの東西溝である。堆積層は2層にわかれ、土師器、須恵器が少量出土した。東西溝SD01は一条大路南側溝の想定位置に合致し、規模・形状・出土遺物の上からもこれに相当するものと考えられる。一条大路の推定地については、従来数次にわたって調査を実施してきたが、その確認には至っておらず、今回初めてその資料を得ることができた。



第41-13次調査造構図

(木下正史・深澤芳樹)

1984年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部調査一覧

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6 AJ F-B	藤原宮 41	84. 4. 3~84. 10. 20	1,260 m ²	東方官衙
6 AJ Q-E	藤原京 42	84. 4. 7~84. 5. 15	618 m ²	右京二条二坊西北坪、東北坪
6 AJ Q-E·F	藤原京 43	84. 6. 11~84. 8. 7	749 m ²	右京二条三坊東北坪、東南坪
6 AJ F-B	藤原宮 44	84. 10. 22~85. 4. 24	1,750 m ²	東方官衙
6 AMG-H	藤原京 41-1	84. 4. 11	9 m ²	左京十条三坊東三坊間路
6 AJ P-U	藤原京 41-2	84. 4. 13	4 m ²	右京二条一坊西南坪
6 AJ H-S	藤原京 41-3	84. 4. 22~84. 4. 26	80 m ²	右京七条二坊東北坪
6 AJ P-S	藤原京 41-4	85. 5. 17~84. 5. 18	20 m ²	右京二条二坊東北坪
6 AMM-B	藤原京 41-5	84. 5. 10~84. 5. 22	130 m ²	左京十条一坊東北坪
6 AMW-D	藤原京 41-6	84. 7. 9~84. 7. 16	80 m ²	右京十条四坊
6 AJ P-K·L	藤原京 41-7	84. 7. 23~84. 7. 31	120 m ²	右京二条一坊東北坪
6 AJ F-F	藤原宮 41-8	84. 8. 7~84. 8. 9	10 m ²	東方官衙
6 AJ P-R	藤原京 41-9	84. 9. 19~84. 9. 22	60 m ²	右京一条二坊東南坪
6 AJ H-U	藤原京 41-10	84. 10. 8~84. 10. 9	12 m ²	右京七条二坊東北坪
6 AJ J-B	藤原京 41-11	84. 10. 23~84. 10. 24	12 m ²	右京三条二坊二条大路
6 AJ H-P	藤原京 41-12	84. 11. 19~84. 11. 29	150 m ²	西方官衙
6 AJ N-N	藤原京 41-13	84. 12. 6~84. 12. 25	140 m ²	左京二条三坊西南坪
6 AJ Q-F	藤原京 41-14	84. 12. 19~84. 12. 20	8 m ²	右京二条三坊東南坪
6 AWR-D	藤原京 41-15	85. 2. 15~85. 2. 27	172 m ²	右京八条二坊西北坪
6 AJ Q-K	藤原京 41-16	85. 3. 18~85. 4. 1	100 m ²	右京二条三坊東北坪
6 AMD-U	石神遺跡 4	84. 7. 9~85. 5. 7	1,400 m ²	飛鳥淨御原宮推定地
6 AMD-N	石神遺跡周辺 A	84. 4. 6	5 m ²	飛鳥淨御原宮推定地
6 AMD-L	石神遺跡周辺 B	84. 8. 7~84. 8. 8	19 m ²	飛鳥淨御原宮推定地
6 AMD-V	水落遺跡 5	85. 2. 25~85. 4. 10	151 m ²	飛鳥淨御原宮推定地
5 BAS-E	飛鳥寺周辺 G	84. 5. 1~84. 5. 11	95 m ²	寺城東部
5 BAS-Q	飛鳥寺周辺 H	84. 5. 9~84. 5. 10	9 m ²	寺城北部
5 BAS-E	飛鳥寺周辺 I	84. 5. 22~84. 5. 24	12 m ²	寺城北部
5 BAS-J	飛鳥寺周辺 J	85. 1. 10~85. 2. 1	56 m ²	西回廊
5 BAS-B	飛鳥寺周辺 K	85. 1. 23~85. 2. 23	35 m ²	西門
5 AKB-A	飛鳥寺周辺 L	84. 7. 17~84. 7. 25	24 m ²	寺城南方
5 BYD-M·J	山田寺 6	84. 8. 6~84. 12. 28	572 m ²	東回廊、寺城東北部
6 BKH-A	川原寺 A	84. 7. 31~84. 8. 2	32 m ²	寺城西南部
6 AKN-B	川原寺周辺 B	84. 4. 26	6 m ²	寺城西方
5 BTB-A	橘寺	84. 10. 3~84. 10. 4	23 m ²	寺城東南部
5 BTU-L	豐浦寺	85. 2. 26~85. 5. 16	115 m ²	講堂
5 BOQ-Q	奥山久米寺	85. 3. 8~85. 3. 11	25 m ²	寺城東方

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

1984年度、平城宮跡発掘調査部では、平城宮跡内で第二次朝堂院東第一堂地域や南面大垣など17件(宮北方遺跡を含む)、京域内で、左京四条二坊一坪、十五坪や薬師寺の調査など25件、計42件の調査を実施した(35頁参照)。以下その主な調査の概要を報告する。

1 平城宮跡の調査

南面大垣東端地区(第155次)の調査　南面大垣東端部の復原整備に先立ち、南面大垣とその北側の溝・二条大路北側溝を一体に把握することを目的とした調査で、調査地は第32次及び第32次補足調査区と一部重複する。調査の結果、(1)南面大垣についての従来の調査結果を再確認するとともに、(2)大垣東端部分の築成時期が神亀末年に降ることが明らかとなり、また、(3)大垣の改修・補修を検討する上で得た新知見を得た。

検出した主な遺構は南面大垣とその北側の溝、二条大路とその南北両側溝、南北溝5条、左京三条一坊の北面築地等である。

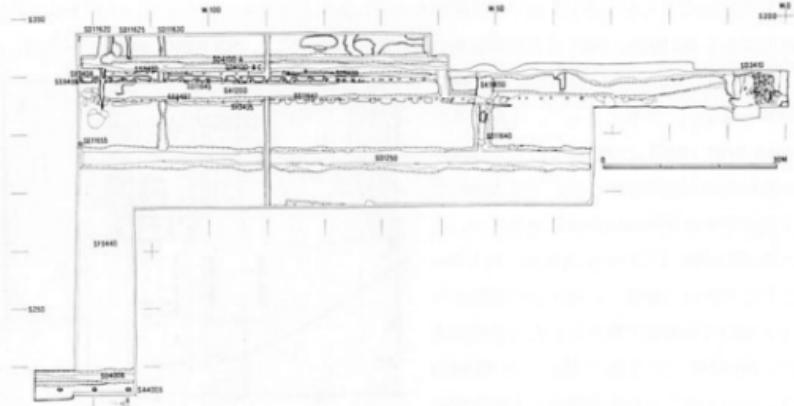
南面大垣 SA 1200　SA 1200は、大垣本体築土部、犬走り築土部、犬走り部にある掘込み地業、5列の柱穴列、1条の溝からなる。大垣本体の築土は調査区西端から東へ89mまで残存し、以東は後世の削平で消失している。大垣本体は基底幅2.7mで、砂質土と粘質土とを互層に版築する。犬走りの築土は大垣北側にのみわずかに残存し、南側は後世の削平で消失している。版築は大垣本体の版築よりやや粗い。犬走り部には掘込み地業SX 9494・9495があり、柱穴列SS 9496・9497を避けるように地業を行っている。大垣本体の南北に沿って東西方向の柱穴列4条があり、二種に分類できる。犬走り築土が残存する大垣北側にあるSS 9496では、柱痕跡・柱抜取穴を犬走り築土上面で、柱掘形を犬走り築土下面で各々検出した。大垣本体との位置関係からSS 9496・9497は大垣築成時の振板留めの添柱穴で、SX 9494・9495と一連のものと思われる。SS 11645・11647はSS 9496・9497とほぼ同じ柱筋にあって、重複関係からSX 9494・9495より新しく、大垣改修時の添柱穴の可能性があるが、大垣本体の築土残存部分に改修の痕跡は認めがたい。東西溝SD 9488は大垣本体北端から約1.5mにある素掘りの細溝で、埋土中に遺物を含まず比較的短期間で埋められた可能性が強い。SD 9488埋土下面で検出したSS 9489は、大垣本体との位置関係から大垣築成時の足場穴であろう。



平城宮跡発掘調査位置図

SD 4100 と 5 条の南北溝 SD 4100 は南面大垣の北側にある東西溝で、溝底位置の差と出土遺物の差から 3 時期に区分できる。A 期の溝は大垣本体北端より北へ 4 m にあり、平城宮土器編年 II 期の土器と郷里制下の木簡が出土した。B 期には南へ 1 m 移動し、奈良時代中頃以降の蹄脚鏡が出土した。C 期は B 期より 0.3 m 北へ移り、東へ行くにつれ南に振れ幅もひろがり、奈良時代後半の土器が出土した。溝心が異なるのは各時期での性格の差に基づくとみられ、A 期は宮内道路 SF 1761 南側溝、B・C 期は大垣の雨落溝または大垣からの雨水排水溝であった可能性が強い。SD 4100 には 2 条の南北溝が注ぐ。SD 11620 は 4 時期あり、A～C 期の溝は SD 4100 の A～C 期に対応する。SD 11625 は SD 4100 の B・C 期に対応する。SD 11630 は宮内から二条大路北側溝に注ぐ大垣本体築成以前の溝で、工事用の水抜き等に利用され、短期間で埋められたと思われる。SD 11640 も SD 1250 に合流する溝で、大垣との交叉部では溝理土上に大垣築土が残り、靈亀 3 年～神亀 5 年の木簡が出土した。このことから、SD 11640 は早い時期に埋め立てられたのち大垣が築かれた可能性があり、更に SD 11640 以東の SD 4100 からは殆んど奈良時代前半の遺物が出土しないことも考慮すると、SD 4100 は当初東へ伸びず SD 11640 となって南流していたのが、SD 11640 が埋め立てられたことで東へ延長東流させられた可能性もでてくる。SD 3410 は官東端の基幹排水溝で、大垣本体築土が削平されていて大垣部分が暗渠か開渠かは不明である。堆積土は 2 層に大別できるが、9 世紀前半に擾乱があったため出土遺物に時期差はない。

二条大路 SF 9440 南面大垣心から 12 m 南に二条大路北側溝 SD 1250、49.5 m 南に南側溝 SD 4006 があり、また南側溝のすぐ南には左京三条一坊の北面築地 SA 4005 がある。SD 1250・4006 はともに素掘りの東西溝。SD 1250 東半部では護岸の杭が打ち込まれ、一部にはシガラミもある。SA 4005 は築土が削平されているが、基底部上で築地寄柱穴 3 個を検出した。



南面大垣東端地区発掘調査遺構図

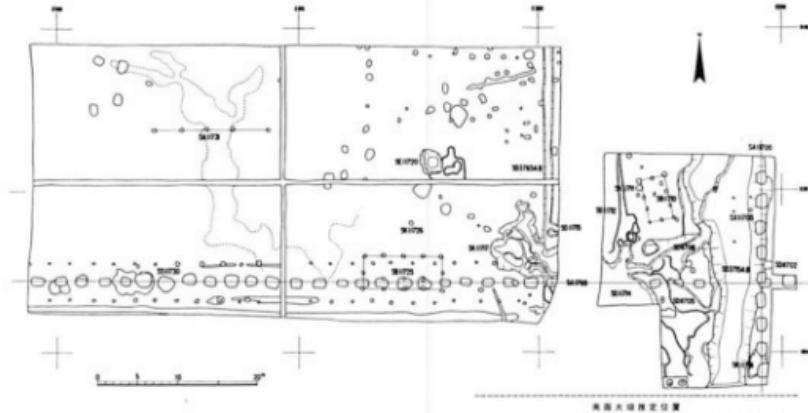
第一次朝堂院地区東南隅(第157次)の調査

第一次朝堂院地区の調査は、第一次東朝集殿推定地を含め継続して行ってきた。今回は該地区的最南端を調査した。調査の目的は、(1)第150次調査で検出した第一次朝堂院地区東限の築地と南面大垣との関係を解明し、(2)宮基幹排水路の一つである SD 3715 の宮最南部での知見を得ることにあった。調査の結果、(1)第一次朝堂院地区南半に建物は存在せず広場であったことを再確認し、また(2)南面大垣に先行する当初の宮区画施設の可能性もある東西堀と第一次・第二次朝堂院の間に位置する南北堀の存在を確認したが、(3)東限の築地想定延長位置は現水路直下で、存否の確認はできなかった。

検出した奈良時代の主な遺構は、掘立柱堀 2 条、溝 2 条、井戸 1 基等である。

2 条の掘立柱堀 SA 1765 は第16・17次調査で既に 4 間分を検出済みの東西堀で、今回新たに 35 間分を検出し、更に調査区外東方へ延びることを確認した。南面大垣心より北約 16 m にあり、大垣に平行する。各柱間中央の南北には柱筋から各々 2.4 m を隔てて足場穴 SS 11730 がある。SA 1765 は本調査区内の奈良時代の遺構の中では最も古い。南北堀 SA 11700 は SD 3715 東岸にあり、9 間分を検出した。SA 1765 より新しく SD 3715 より古い。

2 条の南北溝 SD 3765 は第一次朝堂院地区当初の基幹排水路で、2 時期ある。南半は削平をうけているが、下層は SA 1765 以南に延び、上層は途中で東流させられていたらしい。SA 1765 廃絶後の開削である。SD 3715 は SD 3765 より新しく掘られた該地区的基幹排水路で、南端は南面大垣想定心から北約 2 m の位置まで検出した。埋土は 3 層に大別できるが、宮廃絶後の流路である上層を除き、出土遺物には中・下層に大きな時期差はない。下層がほぼ一定の幅を保つのに比べ、中層は西側に大きく幅をひろげる。中層の時に架けられていたと思われる橋脚 SX 11703 の残欠が東岸寄りにある。中・下層からは削肩を含む木簡・下駄・曲物等と大量の土器が出土した。特に須恵器では陶邑窯以外の製品が多数を占める。



第一次朝堂院地区東南隅発掘調査遺構図

第二次朝堂院地区（第161・163次）の調査 第二次朝堂院地区については、第152・153次調査で大極殿門前方及び朝堂院北面築地南方の朝庭東北端部が調査区内に含まれたことがあるが、該地区の本格的調査は今回が最初である。主な課題は、従前の第二次大極殿地区での調査成果をうけて、(1)東第一堂の規模、(2)大極殿院地区下層掘立柱建物群対応遺構の存否、(3)朝庭上での遺構の有無、等の解明にあった。調査の結果、(1)東第一堂の規模が判明し、(2)東第一堂下層に掘立柱建物の存在を確認、また(3)朝庭にも多数の掘立柱建物が検出された。特に奈良時代の大嘗宮・廻立殿の遺構を突き止めたことに大きな意義がある。

検出した奈良時代の遺構はA～D期の4時期に区分でき、A・B期は下層の掘立柱建物群の時期、C・D期は上層の礎石建物と仮設の掘立柱建物とが併存する時期に各々相当する。

A期 既に一部を検出済みであったSB11201とその南で側柱筋を備えたSB11775はともに7間2間の南北棟で、軒・棟通りに足場穴を伴い、恒常的な建物とみられる。SB11813とSB11812とは側柱筋を備える南北棟であるが、互いの妻柱列が相接するので同時存在とは考えがたく、A期は更に細分できる可能性がある。

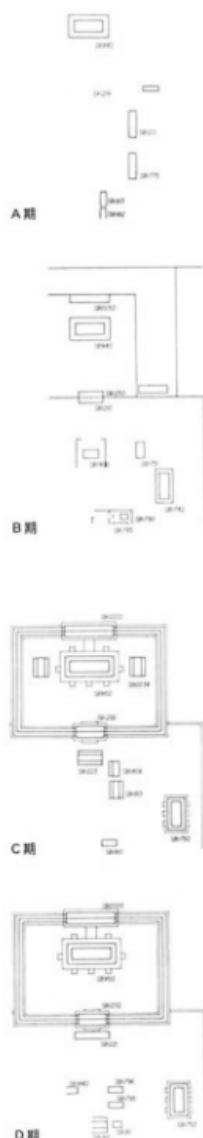
B期 SB11740は身舎7間3間の四周に廐の付く南北棟で、大極殿院下層の建物群と一連の建物である。柱間寸法は身舎梁行のみ9尺で、他は全て10尺である。第153次調査で既検出の下層建物群の東辺を限る掘立柱跡SA11320の南延長部にあたる個所で柱掘形1個を検出した。



第二次朝堂院地区発掘調査遺構図

SB 11900 は 4 間 1 間の東西棟で、大極殿間門下層の掘立柱の門 SB 11210 から南約 45 m に棟通り筋がくる。SB 11900 の東北西の三方を取り開んで軒状遺構 SA 11860・11850・11870 があり、南には朝堂院東西二等分線に対し左右対称の南北柱列 SA 11855・11857 がある。SB 11900 東方にある SB 11751 は 4 間 3 間の南北棟で、北妻中央西側に柱ではなく、東南隅人側に一本の柱が立つという異例の柱配置をとる。SA 11780・11800・11825・11827・11830・11835 の 6 条の溝状遺構は柴垣据付溝で、SA 11780・11825・11830・11835 は調査区外へ延びる。SA 11800 は、朝堂院東西二等分線から東約 2.7 m で閉じ、西に接して検出した柱穴 1 個は柱間 1 間の門 SB 11820 の東柱。SA 11830 は朝堂院東西二等分線に沿い、SA 11825 は北端から 3 m 南で 3 m にわたり途切れられたのち南へ延びる。溝の途切れた部分が門 SB 11826 で、真東に SA 11827 がある。SA 11780・11800・11825 で開まれた空間の中には SB 11785・11790 がある。SB 11790 は 3 間 2 間の東西棟で、この南 3 m に東妻柱列を備える SB 11785 があり、桁行 5 間を検出した。

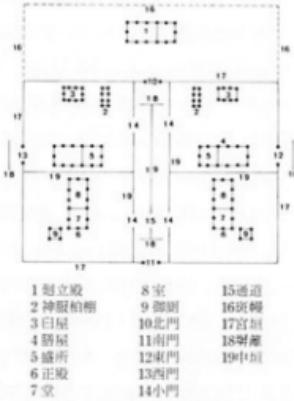
C 期 東第一堂 SB 11750 は基壇北半が完全に削平され、南半の基壇土の残存かとみられていた土壇状の高まりも旧耕土・整備土で厚く覆われ、礎石抜取穴 6 個を検出するにとどまった。しかし、その規模は、身舎 5 間 2 間の周囲に廂が付く南北棟で、身舎桁行・梁行柱間寸法は 13 尺、廂の出 10 尺、基壇の出 7 尺で西面 3 カ所に階段があり、その出は 1.8 m と推定される。基壇外装及び上面の敷石には凝灰岩切石が用いられ、基壇の周囲には小躍敷の舗装がされていたと思われる。SB 11750 は D 期にも引き続いて存在している。SD 11748・11749 は SB 11750 の基壇北・西の外側小疊敷の見切りとなる溝で、基壇外周の水抜き溝とみられる。なお基壇の東・南方は削平をうけていて SD 11748・11749 に相当する溝は検出されなかった。朝堂院東面築地 SA 11330 は削平をうけ築土がわずかに残るだけで基底幅は不明である。SA 11330 の西 2.4 m には素掘りの雨落溝 SD 11331 がある。朝庭には、SB 11223・11806・11801・11890・11810 の 5 棟の仮設の掘立柱建物がある。これらの建物は柱掘形に瓦・凝灰岩を含み、SB 11801 の柱痕跡からは平城宮瓦編年Ⅱ期の軒平瓦 6691A が出土していて C 期の年代の一端を知ることができる。



第二次 大極殿院朝堂院変遷図

D期 大極殿門南で検出した9間2間東西棟SB11221と、その真南に70mを隔ててある8間2間の身舎に南北両廻が付く東西棟SB11815が主たる建物で、両建物の間には3棟の東西棟SB11796・11795・11840があり、さらにSB11815東脇にはSB11811がある。その他、SB11221の南には朝堂院東西二等分線に対し左右対称に配されるSX11885・11910、SX11884・11911、SX11875・11880がある。

まとめ 今回の調査で特に顕著な成果は朝庭にある3期に及ぶ儀式関連遺構の中のB期の遺構を検出したことである。B期の遺構は極めて規格性に富んだ配置計画をとり、『儀式』等から復原される大嘗宮・廻立殿の配置・規模に基本的に近い。大嘗宮は悠紀院の北端部を検出したことになり、SA11780・11800は大嘗宮の東・北を限る宮垣、SA11830は悠紀院・主基院を画する中籬、SA11825は悠紀院西側中垣、SB11826は小門、SB11785は膳屋、SB11790は臼屋に各々当たる。ただ『儀式』等には記載のない屏籬SA11827を小門東正面に検出している。廻立殿は『儀式』等から5間2間の東西棟に復原されるが、SB11900は4間1間で、大嘗宮からの距離も『北山抄』とは異なる。しかし、SB11900は閑門下層の門と大嘗宮の宮垣との中央にあること等から廻立殿に相当すると考える。B期の遺構を用いて大嘗祭を行った天皇は、奈良時代に即位した7代の天皇のうち『続日本紀』によって大嘗祭の場が判明する孝謙天皇(南蔭園新宮)、淳仁天皇・光仁天皇・桓武天皇(太政官院)の4代以外で、大嘗祭の場を明記していない元正天皇・聖武天皇・称徳天皇の3代のうちに求められる。称徳天皇の場合は、第一に菩薩戒をうけた身での重祚であり、第二に大嘗祭当日が恒例の卯でなく酉で、しかも道鏡をはじめ僧侶達が参加するという特殊な事情がある。さらに大嘗祭関連遺構はいずれにしろ聖武天皇以降である上層遺構に先行する下層遺構のB期に属することから称徳天皇の可能性はない。出土遺物の中にはSB11900の柱抜取穴から出土した軒丸瓦6225Aがある。6225Aは今回の遺構変遷上ではC期に当たる上層遺構の第二次大極殿・築地回廊所用瓦である。大嘗宮が短時日で壊却されることからみてB期の遺構の造営はC期に極めて近いと考えられ、B期の遺構は元正天皇よりも聖武天皇の時とする方が蓋然性が高い。聖武天皇大嘗祭に伴う遺構とすると、『続日本紀』に比較的詳しい記事があり、発掘調査の成果と文献史料との対比ができる好個の事例となり、奈良時代の大嘗祭を研究する上で貴重な発見である。また軒丸瓦6225Aが聖武天皇の即位前後に既に存在していたとなると、この瓦の年代観が『基準資料2』のII期から『平城宮発掘調査報告XI』でIII期に変更されていただけに、第二次大極殿院・朝堂院及び下層掘立柱建物遺構群の年代観・性格を論ずる上で刮目すべき事実である。(橋本義則)



大嘗宮・廻立殿建物配置復原図
〔『儀式』卷第三段作大嘗祭儀中に基く〕
(原図は池添三『家屋文教の世界』による)

2 平城京跡の発掘調査



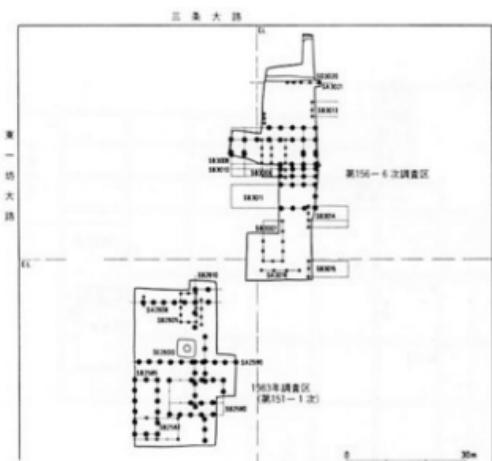
平城京跡発掘調査位置図

左京四条二坊一坪(第156-6次)の調査 ホテル建設に伴う事前調査。一坪は北を三条大路、西を東一坊大路、東と南を坪境小路に面している。調査地は一坪の中央やや北寄り、1983年度の第151-1次調査区の東北にあたる。主な検出遺構は、掘立柱建物8棟、廻4条の他、溝と土塁がいくつもある。重複関係や出土遺物から、遺構は3期に区分できる。

奈良時代前半には南北棟 SB 3007・3008、東西棟 SB 3013・3014・3015というあまり規模の大きな建物が建つ。SB 3007・3014・3015の3棟は、相互に柱筋を揃える。

奈良時代中葉には調査区中央に四面廁付き東西棟 SB 3009 があり、前半代の小規模な建物は姿を消す。SB 3009 は坪の中央やや北寄りに位置し、柱間は桁行・梁間とも10尺等間、柱掘形は身舎部分で一遍 0.7~0.8 m をはかる。

奈良時代後半にはSB 3009と同じ位置に、三面廻付き東西棟SB 3010が建つ。梁間を12尺等間にひろげ、南廻を欠く以外はSB 3009と同規模である。SB 3010と13尺を隔てた南には、柱筋を揃えた東西棟SB 3011が並ぶ。両者の間隔が狭いのは、軒を接して2棟を一体の殿舎とするためである。SB 3010の柱穴には石や塼を埋め込んで礎板の根石とした特殊な地業があり、特に北側柱筋と入側柱筋に顕著であった。同様の地業がSB 3011でも確認されたので、この2棟



左京四条二坊一坪遺構概略図

宅地、SB 3008・3013 には $\frac{1}{2}$ 町から $\frac{1}{4}$ 町の宅地が想定できる。西半の2棟は各々 $\frac{1}{2}$ 町を占めるのであろう。このように奈良時代前半の一坪はいくつかの宅地に分割して利用されている。奈良時代中葉になると宅地割と建物配置が大きく変化する。主殿 SB 3009 が坪の中央北寄りに建ち、前面を広場とする。坪の東西二等分線が SB 3009 と重複し、南北二等分線は広場を横切るので、この時期には坪全体が一つの宅地になるとみてよい。83年調査区では SA 2590 があり、その南に SB 2580・2585、北に八角形井戸 SE 2600 がつくられる。後半代には宅地割に変化はないが、主殿が2棟を一体としたより大型の建物にかわる。83年調査区の SB 2610 は南北棟建物の可能性が高く、坪の中心建物はコ字形配置をとる。

今回の調査によって、一坪が前半代の細分された宅地割から中葉以後1町の宅地へ変化することが明確となった。さらに、1町の宅地の主殿を確認し宅地の利用形態の一端を明らかにしたことも今調査の成果である。

左京四条二坊十五坪(第156-8次)の調査

賃貸用宿舎建設に伴う事前調査。十五坪は東を東二坊大路、南を四条通、北と西を坪境小路に囲まれ、岸俊男氏の研究によって藤原仲麻呂の邸宅「田村第」の地に比定された左京四条二坊東半部の一角に位置する。検出した主要な遺構は掘立柱建物10棟、塀5条、井戸1基といいくつかの溝・土壙である。十五坪については1982年に第145次調査を今調査区の西約30mの地点で実施し、礎石建物2棟、掘立柱建物2棟、塀3条などを検出しているので、両地区的成果をあわせて報告する。

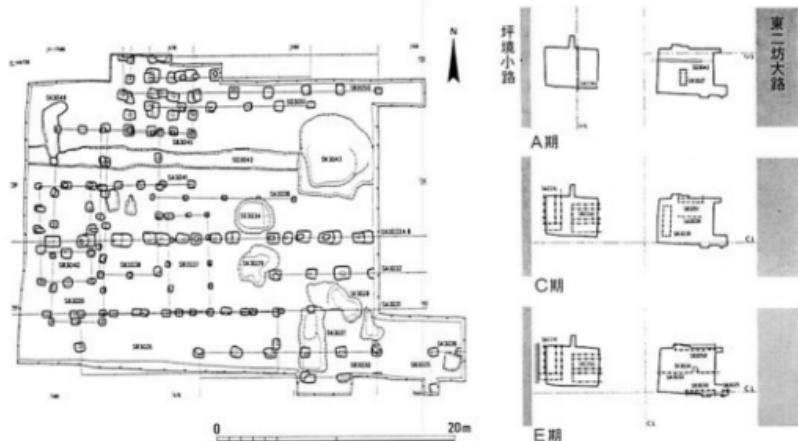
検出した遺構は相互の重複・配置関係や出土遺物から、A～Eの5時期に区分できる。A期(奈良時代初頭)には、SA 2240、SB 3037、SD 3042がある。SA 2240は坪東西の計画寸法(450尺)の五等分線とほぼ一致し、SD 3042は南北三等分線に近い。後者は宅地割施設の可能性が高い

棟はこの点からも一対の建物であったことがわかる。

次に、昨年度の調査成果をあわせ一坪の宅地利用状況とその変遷を述べる。奈良時代前半には83年調査区の SB 2582・2605 を含めて7棟の建物がある。宅地割施設は確認されなかったが、坪の東西二等分線が SB 3007・3008 の西を通るので、坪は東西に二分割されていた可能性がある。東半では、柱筋を揃える SB 3007・3014・3015 の3棟には坪の南北二等分線をはさむ $\frac{1}{2}$ 町の

が、坪西半の前回調査区までは延びないので、坪は東西に二分割され、さらに各々が細分されていたらしい。B期(奈良時代前半)にはSB 3035・3040・3045, SA 3032・3041等がある。SB 3035と前回調査区のSB 2230が坪の南北二等分線上に位置するので、少なくとも坪の南北は一連の宅地であろう。C期(奈良時代中頃)には前回調査区の礎石建物SB 2200・2210が出現する。両者は南側柱筋と南妻柱筋を揃えて建ち、奈良時代末頃まで存続する。今調査区ではSB 3039・3051, SA 3036がC期。D期(奈良時代後半)の建物配置はC期と似る。SB 2200の南側柱筋と20尺を隔てるSA 3031がある。E期(奈良時代末以降)には、SB 3025・3030・3050, SA 3033等がある。SB 3025とSB 3030, SB 3030とSB 3050が各々柱筋を揃える。SA 3033はSE 3034に接する位置で柱間を広げ、通路としている。E期には十五坪全体を一連の宅地としたことが明らかである。さらに、坪の西辺に築地を想定すると、これがSB 2210の西側の軒先と重複することになるので、十坪との間の坪境小路は宅地内にとりこまれておらず、十坪と十五坪とは一連の宅地であったことが推定できる。E期のこの宅地利用はSB 2200・2210の現れるC期にまで遡らせることができる。

以上、十五坪についてはA期に坪を東西に二分し東半部はさらに南北に細分していたこと、B期には坪の中心をはさむ南北が一連の宅地となることは判明したが、B期の宅地が1町規模であったかは不明である。そしてC期以後坪全体が一連の宅地となり、それは十坪を含む宅地だった可能性が強い。しかも京内では稀な礎石建物が現れる。ここで十五坪が「田村第」推定地の一部であることを念頭におけば、C期の年代つまり奈良時代中頃とは、藤原仲麻呂が從三位(天平18年)、從二位(天平勝宝2年)に進み、「田村第」の名が初めて史料にみえる(天平勝宝4年)時期でもある。しかし、十五坪を含む宅地がどこまでひろがりをもち、そしてこの地が



左京四条二坊十五坪発掘調査構造図・遺構変遷図

「田村第」であったのかを決するには、今後一層の調査を待たねばならない。

左京八条一坊三・六坪(第160次)の調査　工場建設に伴う事前調査。坪境小路をはさんで東西に並ぶ三坪と六坪は、北を八条条間路、南を坪境小路と接し、三坪の西に朱雀大路が、六坪の東には東一坊坊間路がはしる。調査は主に三坪の東南部と六坪の西南部について実施し、奈良時代の遺構多数を検出したほか、古墳時代と中世の遺構を確認した。

奈良時代の遺構は三・六坪あわせて、掘立柱建物47棟、塀8条、道路2条、池1、井戸1基、土器埋納遺構3基と、溝・土壙がいくつかある。遺構は大きくA～C期に区分できる。

三坪　坪の東辺は中世河川SD3340により遺構が失われていた。調査区西辺にある池SG3500が奈良時代を通じて存続し、建物はいずれもその東岸で検出した。A～C期のうちC期は2細分できる。建物は、A期のSB3350、C1期のSB3477が廻をもつものの、大半が桁行3間程度の小規模なものである。しかも、各期とも3～4棟が雑然と並び、計画性は高くないところから、この地区は奈良時代を通じて雜舎の空間であったと類推できる。SG3500は古墳時代の河川が条坊設定後、坪内に池として残ったものである。これ自体が園池であった微証に乏しく、南端にとりつく南北溝SD3399とともに、調査区の南あるいは南西に想定される園池への給水施設であった可能性が高い。また、3基の土器埋納遺構のうち、SX3388はSB3360の北妻外側にあり、SX3434はSB3420の南妻に接して検出された。両者とも内容物が遺存せず、埋められた位置は建物の出入口にあたる。民俗例等からみて陶衣壺の可能性が強い。他の1基SX3466は「神功開宝」銭1枚を納めて池の東岸に埋められていた。水に関する呪術行為を示すものであろう。

六坪　A～C期のうちA期が2細分される。奈良時代前半のA1期には、調査区中央の空闊地を開んで小規模な建物(SB3180-3195-3212-3230-3250)が建つ。この空闊地にはC期まで建物が建たない。井戸SE3260もA1期に掘られる。また、坪西辺を南北溝SD3333(坪境小路東側溝)が限る。坪内に本格的に建物が建つのは次のA2期である。付属屋SB3225-3320Aを伴う東西棟SB3200が調査区の東南部にあり、坪境小路近くに南北棟SB3330が建つ。東西溝SD3310A



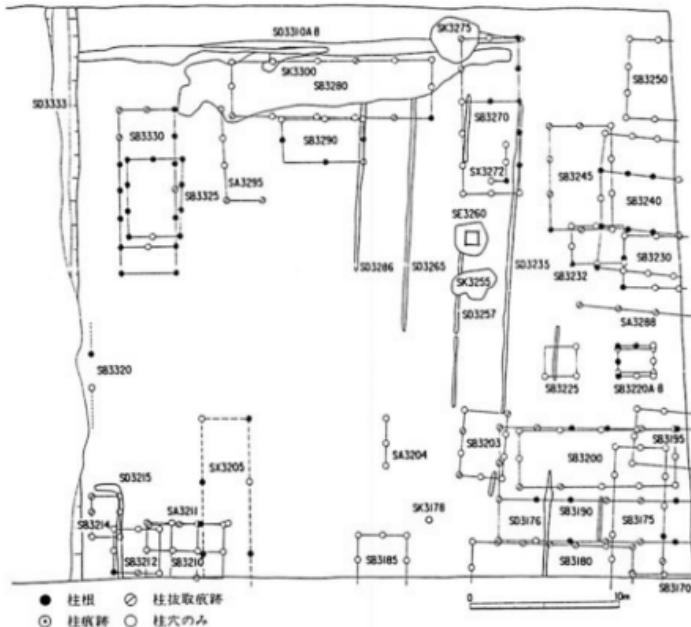
左京八条一坊三坪遺構模式図

は坪の南北二等分線の約3m(10尺)南にあり、坪を二分する幅2丈の坪内道路の南側溝であろう。

B期には、南廻付き東西棟SB3190がA2期のSB3200と同位置で、南北棟SB3225が同じくA2期のSB3330と同位置で各々建て替えられている。建物配置にA2期と共通点がある一方、宅地割には変化がみられる。即ち、調査区北辺にあるB期の建物SB3270・3280は、坪内道路南側溝SD3310Aと重複するので、この坪区画施設が廃止され宅地は北へ拡大したことが明らかである。門SB3320が坪境小路にひらくのも宅地拡大とその区画施設の整備されるB期とみられる。B期の年代は奈良時代後半から末頃である。最後のC期は、どの建物も方向が北で東に振れ、条坊の計画を離れた奈良時代末から平安時代初めの時期であろう。建物はまとまりがなく、期を伴い独立性が強い。二面廻付き東西棟SB3240以外はいずれも規模が小さい。

遺物は、土壙SK3300から平城Ⅱ～Ⅲの、池SG3500からは、平城Ⅰ～Ⅳの土器が多量に出土した。鳥形鏡や計105点の墨書き土器を含む。SB3190の柱抜き取り穴からは漆紙文書が出土。

平城京以前の遺構として、掘立柱建物を主体とする古墳時代の集落の一角を発見した。遺構はⅠ～Ⅳ期に区分され、出土遺物からみて5世紀後葉から6世紀後半に至る集落である。Ⅰ～Ⅲ期には、SG3500の前身である河川SD3400の周辺に、溝や扉で区画された建物群がある。特にⅢ期(6世紀前半)にSD3400の東岸にある建物群は、床束をもつ倉庫風の建物3棟と大型



左京八条一坊六坪遺構模式図

建物1棟が柱筋を揃えてL字形に並び、周間を溝と塀で囲んでいる。Ⅳ期にはそれまで顕著であった建物のまとまりと配置の規則性が崩れ、この集落は衰退に向かう。このほか、調査区中央の河川SD3340は遺存地図などから室町時代の佐保川の旧流路であることが判明した。

今回の調査で、三坪では給水施設らしい池状造構を検出し、近傍に園池の存在が推測された。三坪は朱雀大路に面し、何らかの公的施設に関連する可能性がある。六坪では主屋級の建物を検出し、この坪が宝塚としてあまり細分されない利用状況を明らかにすることができた。

右京三条三坊四・五・六坪(第162次)の調査 マンション建設に伴う事前調査。四・五・六坪は各々坪境小路をはさんでL字形に並んでおり、四坪の東は西二坊大路に、四・五坪の南は三条大路に、五・六坪の西は西三坊坊間路に面している。調査は西・中央・東の3調査区を設けて実施したが、そのうち東区では遺物を含まない幅約22mの南北溝を検出したにとどまる。他の2調査区では奈良時代から鎌倉時代の造構を検出した。主な造構は掘立柱建物10棟、塀10条、井戸3基、溝、土壤などである。

西区北部では五・六坪の坪境小路 SF 1250 とその両側溝 SD 1251・1252 を検出した。溝心心距離は約 10 m あり、小路としては広い。建物・塀はすべて五坪内で検出した。南廂付き東西棟 SB 1261 の規模がやや大きい以外は、小規模な建物ばかりである。坪北辺には小路にひらく門 SB 1259 がある。このほか、四隅に支柱を立て棒板を落し込んで組み上げる井戸 SE 1270 や須山町の土蔵を田形の四隅に組み上げた SX 1271 がある。

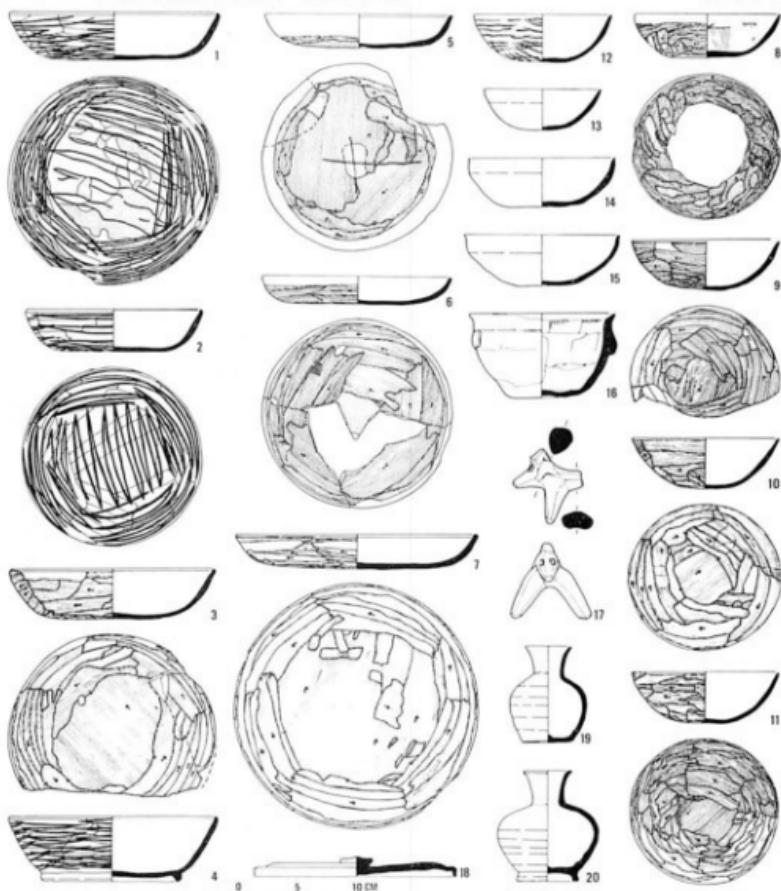


右京三条三坊四・五・六坪堀掘調査遺構図(左・西区、右・中央区)

井戸 SE 1270(西区)出土土器

なお、SE 1270 出土の土器は、保存状態が良好であるため、以下に実測図を掲げた。土師器には杯A・杯B・杯C・皿A・椀A・椀C・壺B・甌があり、すべて平城宮土師器のⅡ群土器である。a₁ 手法は椀A 02, b₁ 手法は杯C 05, c₁ 手法は杯A I (3)・皿A I (7)・皿A II (6)・椀A (8~11), c₂ 手法は杯B II (4), c₃ 手法は杯A I (1)・杯A II (2)に認められる。須恵器には杯B 蓋 (18)・壺A 蓋・壺L (20)・壺M (19)・甌がある。長岡宮土器と異なるのは、杯 A (1・2) が c₁ 手法で調整され、ヘラ磨きが残ることであり、平城宮土器編年 V 期 SK 2113 土器と異なるのは、椀A (8~11) にヘラ磨きがなくなり、杯A (3) が c₀ 手法によることがある。平城宮土器編年 V 期末の特徴を示す。

(山崎信二)



右京三条三坊五坪内井戸 SE 1270 出土土器実測図

3 平城京内寺院の調査

本年度は、薬師寺、興福寺、元興寺の各寺域内で建物建設に伴う事前調査を実施した。

このうち奈良時代の遺構を検出した薬師寺での発掘調査について、その成果を述べる。

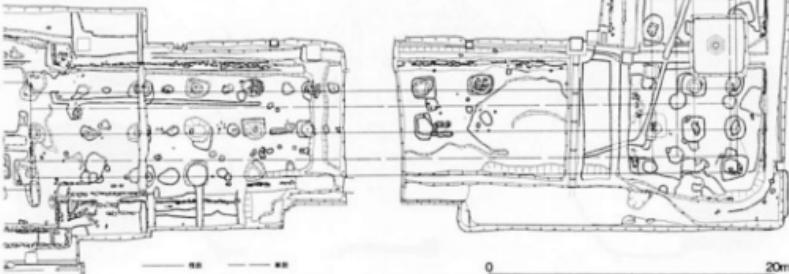
薬師寺回廊の調査 金堂・西塔・中門の再建に引き続く南面回廊の再建に先立って、南面回廊東半部（以下東南区）、回廊東北隅と西南隅の計3カ所で発掘調査を実施した。東南区では、1949・1982年の中門の発掘成果から想定した通り、複廊回廊の基壇と礎石の据え付け穴・抜き取り穴、足場穴を検出した。これに加え今回、複廊に先行する礎石据え付け穴と抜き取り穴を検出し、これが単廊の柱位置を示すことが判明した。単廊の基壇は版築により造成されるが、両側は緩く傾斜し外装を施した形跡がない。また、単廊の礎石抜き取り穴埋土と複廊基壇の拡幅部積み土とが同じ土と認められたので、単廊は未完成のまま礎石が撤去され、同時に基壇拡幅と複廊の建設が進められたとみられる。

以上の東南区での所見は他の2調査区でも確認されたので、創建回廊は当初四面とも単廊に計画され、基壇を造成し礎石を据える工程まで建設は進行したが、その段階で複廊に計画が変わり、基壇の拡幅と礎石の据え直しを行い複廊が完成した、と考えられる。単廊の柱間は、金堂等の調査結果から1尺=0.297mとすると桁行12.5尺、梁行12.5尺に復原される。中門取り付き部の2間は15.5尺を等分するか、1間が3尺と短いのかもしれない。複廊の柱間は1尺=0.299mで桁行13.5尺、中門に取り付く2間のみ12尺とするのが妥当である。

出土遺物には、創建時の軒瓦を含む大量の瓦や土器、金属製品があり、東南区からは塑像の頭部が出土した。本来は東塔にあったものであろう。（花谷 達）



薬師寺回廊発掘調査位置図



薬師寺回廊発掘調査遺構図（東南区）

1984年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	調査面積 (m ²)	備考
6AAI	平城宮 第155次	84. 3. 29~ 7. 5	3,100	宮南面大垣東端地区
6AGA	平城京 第156~1次	84. 4. 2~ 4. 9	187	右京一条二坊五坪
6AHP	平城京 第156~2次	84. 4. 2~ 4. 7	270	左京九条一坊三・六坪
6ABN	平城宮 第156~3次	84. 4. 4~ 4. 9	54	宮北面大垣
6AFH	平城京 第156~4次	84. 4. 23~ 5. 1	139	左京三条三坊三坪
6ADA	平城宮 第156~5次	84. 4. 24	24	馬寮地区北方
6AFM	平城京 第156~6次	84. 5. 4~ 5. 24	760	左京四条二坊一坪
6AGU	平城宮 第156~7次	84. 5. 15~ 5. 16	16	宮北方遺跡
6AFM	平城京 第156~8次	84. 5. 22~ 6. 29	750	左京四条二坊十五坪
6BKF	平城京 第156~9次	84. 5. 25~ 5. 26	10	興福寺境内
6AGD	平城京 第156~10次	84. 6. 11~ 7. 5	1,340	右京二条三坊十二坪
6AGT	平城京 第156~11次	84. 6. 22	15	右京北辺四坊
6AFV	平城宮 第156~12次	84. 7. 5~ 7. 6	5.3	宮北方遺跡
6ADA	平城宮 第156~13次	84. 7. 6~ 7. 7	6	宮北面大垣
6AHQ	平城京 第156~14次	84. 7. 4~ 7. 6	90	左京九条大路
6AGP	平城京 第156~15次	84. 7. 20~ 7. 23	35	右京五条三坊十二坪
6AGV	平城宮 第156~16次	84. 7. 27~ 7. 28	9	宮北方遺跡
6AFG	平城京 第156~17次	84. 8. 1~ 8. 13	176	左京三条四坊四坪
6AFE	平城京 第156~18次	84. 8. 17~ 9. 22	400	左京二条三坊三坪
6ABN	平城宮 第156~19次	84. 9. 28~10. 1	23	推定大曇職地△
6ADB	平城宮 第156~20次	84. 10. 8~10. 11	21	馬寮地区北方
6AGD	平城京 第156~21次	84. 10. 11~10. 18	70	右京二条三坊八坪
6AFD	平城京 第156~22次	84. 11. 8~11. 20	180	左京二条三坊六坪
6AHQ	平城京 第156~23次	84. 11. 7~11. 28	886	左京九条大路
6ADH	平城宮 第156~24次	84. 11. 2	4	宮西面大垣
6BGG	平城京 第156~25次	84. 11. 16~11. 19	17	元興寺境内
6AGA	平城京 第156~26次	84. 12. 13~12. 15	39	右京一条二坊一坪
6AFQ	平城京 第156~27次	84. 12. 13~12. 27	480	左京五条二坊一坪
6BGG	平城京 第156~28次	85. 1. 7~ 1. 10	31.5	元興寺境内
6ADB	平城宮 第156~29次	85. 1. 9~ 1. 11	18	馬寮地区北方
6AFV	平城宮 第156~30次	85. 1. 10~ 1. 11	10	宮北方遺跡
6ACA	平城宮 第156~31次	85. 1. 28~ 2. 2	77	御前池南岸
6AII	平城京 第156~32次	85. 2. 20~ 3. 2	324	右京八条一坊十四坪
6AEK	平城京 第156~33次	85. 3. 4~ 3. 27	350	左京(外京)五条五坊九坪
6ABL-BY	平城宮 第157次	84. 7. 9~11. 1	2,750	推定第一次朝堂院地△東南隅
6AEB	平城京 第158次	84. 7. 4~ 8. 16	610	左京(外京)二条六坊十二坪
6AAD	平城宮 第159次	84. 7. 13~ 7. 25	90	内裏東方官衙地△
6AHL	平城京 第160次	84. 8. 7~10. 26	3,300	左京八条一坊三・六坪
6AAR-AS	平城宮 第161次	84. 10. 1~12. 26	2,700	第二次朝堂院東第一堂
6AGH	平城京 第162次	84. 11. 21~12. 25	1,820	右京三条三坊四・五・六坪
6AAS	平城宮 第163次	85. 1. 8~ 4. 2	4,100	第二次朝堂院朝庭北東部分
6BYS	藥師寺 次数外	85. 1. 16~ 4. 27	1,000	藥師寺回廊

平城宮跡出土の木簡

平城宮跡発掘調査部

1984年度の調査では、平城宮内の2カ所と平城京跡の2カ所の調査区から総計1,648点の木簡が出土した。各調査区の出土点数は表のとおりである。主な木簡の訳文は『平城宮発掘調査出土木簡概報18』(1985年6月刊)に報告したので、ここでは顕著な内容をもつ平城宮跡出土のものを中心に報告する。

南面大垣東端地区（第155次）

調査区は宮の東南隅にあたり、かつて13,000点にのぼる木簡が出土した第32次補足調査区の西と南に接する場所で

地 区 名	次 数	点 数
南面大垣東端地区	第155次	1,500点
推定第一次朝堂院地区東南隅	第157次	146点
左京八条一坪三・六坪	第160次	1点
慈師寺回廊西南隅		1点
合 計		1,648点

ある。木簡の出土地点は、東西溝 SD 4100 (69点)、二条大路北側溝 SD 1250 (100点)、南北溝 SD 11640 (1,198点)、南北溝 SD 3410 (106点)である。このうち SD 4100 は南面大垣の北を東流して、東面大垣の西に沿って南流する SD 3410 に合流し、その SD 3410 は南で二条大路北側溝 SD 1250 へ流れ込むことが確認されている(年報1966・1967)。また SD 11640 は東面大垣から西へ約50mのところで SD 4100 と SD 1250 を結んでいる南北溝である。SD 11640 からは雲龍3~神龜5年の年紀をもつ木簡計7点と、郷里制の記載のある1点が出土している。また SD 4100 は3期(a b c)に区分できるが、木簡はいずれも最も古い溝aから出土し、その中にやはり郷里制の記載をもつ木簡1点を含んでいる。

第155次調査出土木簡の最大の特徴は式部省関係木簡が多数を占めることである。式部省関係木簡は SD 4100、SD 11640、及び SD 11640 と SD 1250との合流点で出土した。式部省関係の木簡は第32次補足調査でも SD 4100 と SD 3410 から多数出土している。ただし第32次補足調査木簡と比較してみると、相違点もあり、いくつかの新しい知見を得たことは重要である。その1は、(1)の木簡が出土したことである。表には考課の際の評価、官職、位階、姓名、年齢、本貫地と、1年間の上日を記し、裏には考課令分番条にみえる分番官の三等評価のうち下等にあたる文言すなわち「通達不上、執当虧失」といった語句が記されていたと考えられる。形態は上から約4.5cmの部分の側面から孔を穿っており、從来から知られていた考課関係木簡と同一である。この木簡は上日数からいっても、評価が1年分であることから考えても1年間の考課に関わる木簡であり、通常の木簡でないことはあきらかである。ところが、從来考課木簡として考えられていたのは第32次補足調査で出土した次のような木簡であり、記載が異なっている。

(A) 去上 位子從八位上伯祢広地 年用二
内國安宿都

(木簡概報4)

これまで(A)が考課木簡の典型とされてきたのは、他に考課の木簡の完形品が出土しなかった

ことによる。ところが、今回(i)の木簡が出土したことによって、官人一人一人について作られる考課の木簡が一種類のみではなく複数存在することが確認され、それぞれの使われ方を検討する必要が生じたといえる。そしてこの(i)の考課木簡の使われ方であるが、この記載内容を正倉院に残る考文と比較すると、個々の官人に關する部分の書き方が極めてよく類似することがわかる。考文の一部を示せば、

中上 正七位下陰陽師高金藏	年五十九
能太一 道申 天文 六壬式	日參百歎
恪勤匪懈善	古ト效驗多者最

(大日本古文書24-552)

のごとくである。考課令内外初位条によると、式部省では各官司から考文が集まってきたあと、「色別為記」とあり考文をもとにして様々な種類の記録を作ることになっている。それらについて合集解の各説は上中下といった評価別、位階別、長上・番上・雜色の別といった各種の記録である、と述べている。そうすると、式部省では考文の記載を官人毎に木簡に書き写しておき、それらを何度か並べかえることによって各種の記録を作成したのではないかという想定が可能となる(東野治之『正倉院文書と木簡の研究』70頁)。もし、この想定があたっているとすれば、まさに(i)の木簡はこの作業の中で作られたものといえるのではなかろうか。そして(i)の考課木簡がこのような場で使われたとすると、(i)の木簡はまた別の場面で使用されたこととなり、今後の検討課題となろう。

また、第32次補足調査や第155次調査で多数出土した削屑のうち(i)のような考課令の善・最条を記した削屑は(i)の裏に書かれた文言と対応することが判明し、1年間の上日数を記した削屑もまたこのタイプの木簡から削り取られたことがわかり。その点でも(i)の木簡出土の意味は大きい。

特徴の第2は、考課木簡・選叙木簡以外の考選関係の公文に關わる木簡がいくつか出土したことである。まず、(4)と(5)のように付札の形態をした木簡がある。(4)の内容は多羅鷦(羅子鳥)から返された考文6卷と考状6卷の計12卷が軸の如きものに入っており、それに付けられた付札と考えられるし、(5)は諸司から送られてきた神龜2年分の工長(あるいは長上の誤りか)の考文を式部省でひとまとめにした際に付けられた付札と考えることができる。(4)の裏の「三番」とは式部省で考文を校定する際に式部官人を十番に分け、分担して校定するときの担当を指すのだろうか(延喜式部式考課並引附条)。同様に考えると(5)の「末了」は未だ校定が済んでいない意かとも考えられるが、断定はできない。これらの他にも折損等によって原型のわからないもので「考一 状一 □右□」「□□□考文七卷」「・考文六卷・□三番」といった考文や考状に關する木簡がある。また考選関係公文を巻いた軸も1点出土した。(3)がそれで、軸の木口の両端に墨書きがあり、一端に「出羽国都司考□」とある。更に削屑ではあるが「行事」と記したものもあり、これは「考中行事」なる公文を指していると考えられる。以上のように今回出土した式部省関係木簡は考課木簡の他にも多様な内容をもち、今後の研究に多くの材料を提供

することとなつたといえる。

第3の特徴として、第32次補足調査の木簡と比べると同じ式部省関係木簡でも年代の違いがあることを指摘できる。SD 11640出土の木簡は一応神亀年間頃のものと考えられるのに対し、第32次補足調査木簡のうち年紀のあるものはほとんどが天平宝字以降の奈良時代末期に属する。ただし例外があり、SD 4100 の第32次補足調査区の西端近い地点から出土した一群のみは年紀のある11点全てが神亀5年の続労錢の木簡であった。この地点は SD 4100 と SD 11640 とが接続する部分にあたり、一群の木簡は SD 11640 と同一の堆積層から出土した可能性が高い。年紀の違いのほかにも第32次補足調査のこの交点より東から出土した木簡と、交点および SD 11640 のそれとでは内容上も差異が認められる。それは(+)続労錢木簡は後者のみから出土し、(+)もその一例といえるが、東からは1点も出土していない。(+)前掲(A)のタイプの「去上」といった削屑は圧倒的に前者から出土し、SD 11640 からは出土していない、等である。特にこれは重要で(A)のタイプの木簡があるいは奈良時代前半には使われていなかつた可能性を暗示するものといえよう。

式部省関係木簡以外では、(+)のような巻子本の軸の木口に墨書きしたものが出土しているのも興味深い。1字2mm角ほどの細かい文字で木口を一周するように書かれている。内容も肥後国にあった軍團の一つが「益城軍團」であることが知られ、また兵士歴名帳京進の事実を实物によって示したといえよう。このように木口に墨書きがあり、題籠と同様の役割を果たした軸はこれまでにも宮内から何点か出土しているが、完形のものとしては(+)と(+)が初の出土といえる。(+)と(+)は唐米荷札であり、(+)は SD 11640、(+)は SD 1250 から出土した。(+)は郡里制下のもので、大飯郷の新□里と田中里の唐米が二つまとめて一俵とされており、また、新□里と田中里を指して「二村」と表記するなど、税制史あるいは村落史の方面で興味深い史料といえよう。一方(+)は郡制下の荷札で、他に同じ構から同郷の飯岡郷、川辺郷の計3点の唐米荷札が出土している。

推定第一次朝堂院地区東南隅(第157次) 推定第一次朝堂院南方の調査であり、第一次・第二次の二つの側堂院の間を南流する2条の基幹排水路(SD 3705とSD 3715)の最下流の発掘となる。木簡146点のうち2点の削屑を除き他は全て SD 3715 からの出土である。年紀のあるものが(+)の2点あり、他に「勅旨省」といった令外官の記載がある木簡などから判断すると、同構出土の木簡の多くは奈良時代末期のものと推定される。(+)は河内國の官人名を位階とともに列挙したものであろうが、用途は不明である。(+)は前掲第32次補足調査の(A)と同じ形の木簡である。(+)・(+)・(+)とやはり官人の人事に関わる木簡がこの場所から出土している点は、兵部省の所在地の問題も含めて、周辺の調査を待つて解明していく必要があろう。また第157次調査ではいくつかの官司官職名の木簡が出土している。(+)の「膳工所」の他に「外兵庫」「大炊」「内舍人」等がみられ、墨書き土器では「内木工所」「女嬬」「内大炊」等がある。この地区的性格を論じる程のまとめはないが注目される。

(寺崎保田)

第一五五次調查出土木簡

漢SD100

- * (1) · 下等 兵部省使部從八位下 □ □ 右原上日百 □
- □ □ □ □

漢SD11640

- * (2) · 肥後國第三益城軍團發七年兵士歷名帳
- 肥後國第三益城軍團發七年兵士歷名帳

漢SD1150

- (3) · 出羽郡司考 □
- (輔木(二))

漢SD1151

- * (4) · 神龜五年諸司考六卷
- 多藏船考六卷

漢SD1152

- * (5) · 神龜二年諸司考六卷
- 格勤河懷善 楊 □

漢SD1153

- * (6) · 未了
- 多藏船考六卷

漢SD1154

- (7) · 麻豆
- 多藏船考六卷

漢SD1155

- (8) · 位
- 多藏船考六卷

漢SD1156

- (9) · 道上牧瓦二百枚
- 多藏船考六卷

漢SD1157

- (10) · 三年四月十六日主典田邊史
- 多藏船考六卷

09 · 僧中國手田郡大飯鄉新里唐米

· 四斗五升田中里一斗五升石二村一俵

漢SD1150

- 09 · 新野郡唐米六斗

第一四七次調查出土木簡

漢SD1154

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1155

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1156

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1157

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1158

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1159

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1160

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1161

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1162

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1163

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1164

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1165

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1166

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1167

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1168

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1169

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1170

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1171

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1172

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1173

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1174

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1175

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1176

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1177

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1178

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1179

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1180

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1181

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1182

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1183

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1184

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1185

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1186

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1187

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1188

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1189

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1190

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1191

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1192

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1193

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1194

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1195

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1196

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1197

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1198

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1199

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1200

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1201

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1202

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1203

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1204

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1205

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1206

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1207

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1208

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1209

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1210

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1211

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1212

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1213

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1214

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1215

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1216

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1217

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1218

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1219

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1220

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1221

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1222

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1223

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1224

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1225

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1226

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1227

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1228

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1229

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1230

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1231

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1232

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1233

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1234

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1235

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1236

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1237

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1238

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1239

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1240

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1241

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1242

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1243

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1244

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1245

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1246

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1247

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1248

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1249

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1250

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1251

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1252

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1253

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1254

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1255

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1256

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

漢SD1257

- * 05 · 離從橫河
- 離從橫河

法隆寺百万塔および陀羅尼經の調査

平城宮跡発掘調査部・歴史研究室

1 百万塔の調査

考古第一調査室は、史料調査室とともに法隆寺所蔵百万塔の調査を推進中であるが、本年度はコンピューター処理を目指して塔身部のデータを40項目に整理・記号化し、2,000基分のデータをIBM 5550に入力、本格的な検索処理を開始した。

また、百万塔の製作技術上の問題点を解決するため、百万塔の復原製作を行っている小西木地工房（富山県東礪波郡庄川町青島）で、製作技術の調査を行った。

百万塔の製作 小西久夫氏

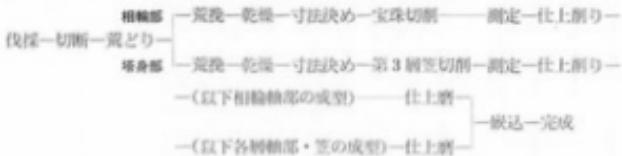
同工房の百万塔の製作は相輪部・塔身部とともに電動機械で挽き出すもので、その工程は、別表の如く10数工程と比較的簡単である。まず、荒挽の段階で塔身の陀羅尼經収納孔と、これに見合う相輪の基部を削り、アゲツの段階で、塔身は第三層の笠から、相輪は宝珠から、以下部分ごとに、削りと測定を繰返し成形する。仕上げの磨きは最終的に全体に行なうが、仕上げの削りは各部ごとにその都度行っている。使用工具はバイト類、ノミ類、ノギス、ゲージなど27種におよぶが、機械切削に一般的な工具や簡単な道具が多い。1基当たりの製作時間は、いずれも30分程度である。製作は、塔身部が比較的容易なのに対し、相輪部が複雑な形態をとるうえ小型で、使用工具数も多く、高度の熟練技術を要する。

小西工房の百万塔は、電動機械を用いること、ケヤキを材料に用いること、相輪部、塔身部とも軸の装着には嵌め型を用いることなど、法隆寺百万塔と異なる点も多いが、今後の製作技術の復原に参考とすべき点が多い。なお、精密な相輪部の製作は、奈良時代の幼稚な横軸機械では不可能とし、旋盤の存在を推定する説もあるが、今調査によって、熟練技術があれば通常の横軸機械でも相輪部の製作は十分可能との見通しを得た。百万塔の製作技術の復原を目指し、今後も調査を続ける予定である。

（金子裕之）

百万塔の製作工程

小西木地工房



2 百万塔陀羅尼經の調査

法隆寺百万塔に納入されていた陀羅尼經の調査を、昭和資財帳作成の一環として行ったものの中間報告である。百万塔納入の陀羅尼經は、現在ではすでに百万塔本体からはとりだされて別置されている。従来からその所在のあきらかであったもの1,800点余(断片を除く)と、今回、昭和資財帳の調査に伴って、新たに発見されたものを合計すると4,500点をこす数になる。

これらの陀羅尼經は、従来からの研究によって、4種類の經典、無垢淨光經根本陀羅尼、同相輪陀羅尼、同自心印陀羅尼、同六度陀羅尼からなっていることが知られており、また版式については、根本陀羅尼が3種類、相輪、自心印、六度陀羅尼がそれぞれ2種類ある。今回の調査でも、この經典の版式の種類については特に新しい知見を得ることがなかった。

現存する陀羅尼經は、保存の良好なものも多いが、断面で保存状況の悪いものもまた數多く、点数として数えにくくいものも多數あった。これらの陀羅尼經について、經典・版式等によつて分類すると同時に、法量の採寸、注記すべき事項等について可能な限り1点ごとに、調書を作成し、写真撮影を行つた。この調査の経過であきらかになったことを、以下に摘記することとする。

1. 版式については、とくに新しい型式のものの発見はないが摺り上りは多様であり同一版と思われるものでも、文字の細い太いにかなりのバラツキが存在する。このような現象がなぜ生じたのかについては詳らかにしない。

2. 料紙の種類については、ほとんどが麻紙であるが、その中にも二種類の異った紙質が存在する。この紙質の相違については、なお後日、科学的な調査を試みる必要がある。

3. 紙の横寸法は4.7 cmから6.2 cmまでぐらいのはばでかなりのバラツキがあり、正確に誤断したものではないようにみえる。

4. また、ごく一部の經典には、上縁ないしは下縁に本文以外の墨痕を残したものがある。そのうち相輪陀羅尼の短いものに付いた墨痕は、比較してみた結果、同じ相輪陀羅尼の長い版式の本文の下端であることが判明した。この結果、陀羅尼經を認るために使用した版式は經典1種のみが刻まれていたのではなく、少なくとも同一經典の2種類の版が同一板に刻まれていた可能性のあることが確認された。それ以上に版が大きく3種類以上の經典が同一板に刻まれていたものであるかどうか、あるいは一版一經でスタンプ式に印刷されたのかはなお不明である。おそらく、同一版で一紙に摺り上げられたものが、後に上下に裁断されたとするのが可能性が高い。その際、本文以外の墨痕までふくめて切りとられたものが生じたものと思われる。

5. この他、摺りのよくない部分については肉筆による補筆が行はれており、この点数はかなりの数にのぼる。残闇中、本文全体が肉筆のものが1点みいだされたが、今日知られている肉筆のものは指定品中に3巻ある。今回発見のものは断簡であるため全文肉筆の例に加えてよいかどうかは判定できない。

(鬼頭清明)

「石山寺」扁額

歴史研究室

石山寺(滋賀県大津市)の総門である東大門(山門)には、「石山寺」と額字のある扁額が掲げられている。この山門は、建久元年(1190)に再建された入母屋造・本瓦葺、三門一戸の八脚門で重要文化財に指定されている。石山寺ではほぼ同時期に建てられた建造物には、他に多宝塔(建久5年建立)がしられ、この時期の再建には源頼朝の尽力があった。

ところで、この山門の現在の寺号額は江戸時代のものかと思われるが、それ以前に掲げられていた「石山寺」扁額が収蔵庫(豊作殿)に収納されており、現在の扁額は、その古い扁額の形態・書風等をほぼ倣っていることがわかる。

古い扁額は、縦 59.9 cm、横 31.8 cm、厚さ 2.9 cm の一枚板の檜材の鏡板に上・左右の三方に、同じ檜材の額縁をつけ、全体で縦 66.5 cm、横 52.5 cm となる。額縁は、縁に縦形を施し、上縁に 2 個、左右縁に各 3 個の猪目透が刺り貫かれている。なお、周縁のない下方には、鏡板の下端に 2 カ所の猪目があるが、この猪目は刺り貫かれていない。鏡板の中央には「石山寺」と隸書体で篆研彫されている。文字は力強さは少ないが、典雅な書風を示す。猪目透は横幅 4.5 cm 前後、縦 3.0~3.5 cm 程度、各例り貫きに鉄釘が残存していて、鏡板と周縁の接合に利用されている。扁額は表裏全面に灰白色塗料(白土)が塗られ、鏡板・周縁の表面はそのままであるが、額字の彫り込み、周縁の側面、猪目透の内側や裏面には黒漆が塗られていたごくまで、裏面とその他の箇所には一部黒漆が残存している。鏡板の四隅に釘穴が各 1 カ所あり、その釘で山門に打ち付けられていたと思われる。なお、鏡板・周縁とも表面がかなり風化していて、長期間外部に掲げられていたことがわかる。

裏面には中央に黒漆を塗ってない部分があり、その部分に二行書きで
「仁治元年十一月十三日能書之 / 従三位藤原朝臣行能」
と行書体にて陰刻されている。なお十三日の下の割書は現状では破損していて不明瞭であるが、「癸卯」かと思われる(『集古十種』)。

銘文にみえる仁治元年(1240)にこの扁額を揮毫した藤原行能は、皇太后宮亮藤原伊経の長男として治承 3 年(1179)に出生、建仁元年(1201)叙爵。宮内権少輔、右京大夫などを経て、嘉祐 2 年(1206)従三位非參議として公卿となり、以後その地位のままで、仁治元年 11 月 26 日出家(法名寂然)、建長 7 年(1255)77 歳にて没した人物である。従って、この額は出家の直前に執筆されたものである。彼は藤原行成の八代の子孫にあたり、能書家として著名な世尊寺流のなかでも、行成・行尹(行能の曾孫)とともに世尊寺の三筆と称され、額・願文・上表など朝廷でのいろいろな書役を勤めた。行能が従三位に叙せられたのも、左近衛府の額を書いた貢であつたといわれる。また歌人としてもよくしられる。

能書家としてしられる行能筆とされるものには宇治切、縁起切などの古筆や、「猪熊撰政初

度上表」や消息があるが、いずれも楷書体もしくは行書体等であり「石山寺」扁額の書風とは比較し難い。しかし、伝行能筆といわれるものは、おむね字形は整っていて、点画は温雅な書風を示している。

扁額の執筆は、行能の祖父にあたる世尊寺伊行若になる『夜鶴庭訓抄』にも、その大事がいわれ、また行能自身の建治8年(1275)の著述である『夜鶴書札抄』(『日本書画第一』)にも、「頬こそ手書の主と令しむるの大事也。」とある。額も大内裏の諸額が当然第一であろうが、諸寺額もそれに次ぐものであったろう。『夜鶴書札抄』にはさらに巻末第四に、内裏書人・諸寺額書人・天下能書得登人之事等の各項目を掲げているが、そこには石山寺の額に関する記述はない。なお、江戸時代後期の『能書事蹟(四巻本)』には、その下巻に、額字法・宮城殿門額并名目考・寛筆扁額等の各項にひきつづいて、神社仏閣額字考証の項目もみられ、そのなかに諸王能書家書扁額のうちとして、

「近江国石山寺 行能題

石山寺」とあり、また『集古十種』にも、この石山寺扁額が記載されており、それにより江戸時代の当額の状態を知ることができる。

現在、扁額で重要文化財指定品は12件15面あるが、鎌倉時代3件のうち、愛媛・大山祇神社の扁額を除いては、三重・伊奈富神社3面(文永11年(1274)在路)、東京・谷保天満宮1面(建治元年(1275)在路)はともに、椎中納言藤原頼貞の子で行能の猶子となった世尊寺經朝執筆の扁額である。行能も経朝と同じく多くの扁額を執筆したかと思われるが、「石山寺」扁額も、その当時の有数の書き手である行能

筆で、年紀も明確であり、
鎌倉時代中期の扁額として
貴重な資料といえよう。こ
の扁額は現在石山寺にある
所蔵品目録のうち江戸末期
の文化6年(1809)加藍宝藏
諸道具改目録や、明治11年
(1878)の仏器什物取調帳な
どに、すでに「一 石山寺
額」と収録されている。

現在の「石山寺」額

(綾村 宏)

(表) 「石山寺」扁額 (表)

滋賀県近世社寺建築の調査（2）

建造物研究室

1983年度から2年計画で行っている滋賀県近世社寺調査第2年度目の1984年度は、主に県の北半部を対象として調査し、2カ年あわせて県全般の調査を完了した。本年度の調査棟数は、二次調査が137件187棟、一次調査が24棟、昨年度を合せると422棟の多数に及んだ。調査建物の全般的傾向は昨年度と異なるものではないが、いくつか地域的・宗派的特徴がみられる。

神社本殿は流造、特に向拝附き三間社の多いのが県下全般の傾向であるが、県北半部では、屋根を複雑にするもの及び方三間入母屋造社殿が多くみられる。前者は唐破風や千鳥破風を付加して屋根を飾る。後者は仏堂とは形態上差がなく、事実かつては仏堂であったを神仏分離後に社殿とした例がある。いずれも江戸時代後半の遺構が多い。綿向神社本殿（日野町・宝永4年）はこれら二つの特色を兼ね備えた古い遺構の一例である。八幡神社本殿（愛知川町・寛文8年）は軒唐破風附流造本殿では珍しく県南部に位置する。大坂の大工の作と考えられており、浜津の遺構と共通する意匠が注目される。拝殿では方三間入母屋造が通例であるが豊満神社拝殿（愛知川町）は桁行七間の横長平面で、柱・頭貫・木鼻に中世の部材が多く混る。筑摩神社拝殿（米原町・文政3年）は方三間ながら、中央方一間の内側の柱上を三手先詰組斗拱で派手に飾る。化粧屋根裏・格天井を張るだけの変化に乏しい県下の拝殿では特異である。中世の社殿として貴船神社本殿（マキノ町）、日吉大宮神社本殿（寛政年間の改造あり）・恩子瀬神社社殿（3棟）（いずれも朽木村）を新たに見出した。

寺院については浄土真宗が圧倒的多数を占めるが、県北部では永平寺との関係もあってか曹洞宗寺院が多くなり上質の仏堂や整った伽藍を備えるものがある。

中世仏堂遺構の多い天台宗寺院については、近世に入ても中世の伝統をひく本堂が多く見られる。萬川明王院本堂（大津市・享保2年）は、孫庇と外陣を一体の空間とし、内外陣の架構に見るべき点が多く、細部の技法・意匠には過渡的要素がみられる。しかも『門葉記』所収の中世の平面にも酷似する点は興味深い。百濟寺本堂（愛東町・慶安3年）は、平面構成としては西明寺・金剛輪寺等近辺の中世仏堂を継承するが、虹梁を殆ど用いず格天井を一面にはり、外觀正面中央間を軒唐破風で飾るのみで、中世仏堂の変化に富む架構・細部の面白さはない。ここに同じ天台宗寺院本堂でも中世と近世の本質的な差が現われている。天台宗の本堂として、常行堂の三間四面の平面を踏襲しつつ内部を内外陣にわける例がみられる。こうした範疇の中で観音寺本堂（山東町・正徳5年）が重要な遺構である。平安時代以来伊吹山麓に散在する寺社の中心的地位を占めた当寺の本堂は、頭貫は虹梁形とし、須弥壇前の桁行には龍の丸彫影刻の火頭虹梁を吊る、柱は立ち登らせ柱を多用する等、18世紀以降派手に装飾要素を多用する近世建築の特質をもつ先駆的作例である。造営の詳細な記録も残り、大工は長浜常喜村在住の宮部太兵衛、長浜近辺に多くの作品を残した彼の一統の作のうち、当堂は最も古く、確実な遺構となる。三

間四面系統の天台宗本堂としてはこの他玉泉寺本堂(虎姫町・安政～寛政)が重層という珍しい形をとり注目される。

浄土真宗寺院では湖北の西徳寺(木之本町)元龍寺(浅井町)常善寺(虎姫町)(いずれも17世紀中～後期)が古式な真宗本堂の例として既に知られている。今回類例として勝安寺本堂(高島町・17世紀後期)を加えた。常善寺本堂は五村別院(虎姫町)現本堂の前身と伝える。両者は規模に差がありすぎ、寺格や寺勢の展開等と関連づけて真宗本堂の発展過程を捉え直す必要性を感じる。五村別院には享保年間から一連の工事で造営された本堂以下の諸建築が揃う。

曹洞宗では洞寿院(余呉町)が禅宗伽藍の形態をよく残す。門以外は幕末の建立である。全長寺本堂(余呉町・安政元年)は前に土間と広縁をもつ方丈形式の典型で上質である。

浄土宗寺院は県北半部には特記すべき遺構がなく、湖東に多い。日野町には信楽院本堂(元文4年)・常福寺本堂(18世紀中期)等、前面に一間幅の土間をもつ特異な浄土宗本堂がある。

時宗の淨信寺(木之本町)は庶民信仰の寺院としては珍しく整った伽藍をもつ。本堂(地蔵堂・宝暦5年)は、貫を内陣側のみ虹梁形とし中備に多様な意匠を並べるいかにも近世的技巧をこらした佳作である。同阿弥陀堂(天保14年)は前面一間通を吹放ちとし、内部は浄土宗本堂に近い。建築年代は新しく技法的に見るべきものは少ないが、野棟木を始め支輪の裏板に至るまで寄進者の名が墨書きされ、時宗の特質をよく表わしている。

天台宗の一分派として明治になって一派を立てた天台真盛宗は念佛を重視する点で浄土宗に近い教義をもち本堂の内部構成も浄土宗に近い。本山の西教寺は近世の堂舎が整っており、本堂(元文4年)は内部の天井高が極めて高く、外陣に虹梁・海老虹梁・貫を多用した複雑な架構をかけ、須弥壇まわり斗拱には具象彫刻を用いる。極めて近世的な意匠の顕著な仏堂で、県下でも屈指の名建築である。江戸初期に盛安寺本堂(大津市・慶安5年)、江戸後期に真光寺本堂(志賀町・文化10年)があり真盛宗本堂の江戸時代内における変遷を知ることができる。

以上優れた作例をとりあげて概観した。2年にわたる調査で、神社については様々な形式、寺院では各宗派について届ることなく県下の近世寺社建築の概要を把握した。これらの建築の中世との関係・様式的特質・大工や生産組織等に関しては今後の研究課題であり、1985年度にこうした考察も含めた報告書を刊行する予定である。

(山岸常人)

年代分布棟数 ※各表いずれも調査棟数の内訳である。

世紀	15			16			17			18			19			20		
	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後
神社	3	11	8	16	27	32	24	15	13	19	7	2						
寺院	0	8	11	22	38	34	45	25	25	22	1	0						

寺院宗派別件数

真言	天台	天台	天台寺門	天台真盛	淨土	淨土真	時	日蓮	曹洞	臨濟	黄檗
10	16	3	7	22	53	2	1	14	9	3	

寺社本殿種類別棟数

流	造	その他の	切妻造	入母屋造	春日造	複合社殿
一間社	三間社	その他	8	13	6	1

奈良県近世社寺建築の調査

建造物研究室

滋賀県の調査と相前後して、今年度から 2 年にわたる、奈良県の近世社寺建築調査を開始した。初年度は昭南郡の吉野郡、宇陀郡、高市郡、北葛城郡の各町村と、大和高田市、橿原市、御所市、五条市、桜井市を対象とした。2 次調査総数は 163 棟、その内神社建築は 52 棟、寺院建築は 111 棟である。神社建築の調査数が寺院建築を大きく下回る結果となったのは、まず昭南では特に本殿の造替が盛んで近世本殿の造構が限られること、次に拝殿を作うものが比較的少なく、あっても付属屋を含めて近世のものはまれであることが大きな理由である。

神社本殿の形式は、予想通り春日造が大半を占め、流造がこれに次ぐ。春日造本殿 26 棟のうち、削木入のものが 9 棟ある。削木入本殿は宇陀郡に最も多く、吉野郡、高市郡、大和高田市、御所市にも及ぶが、五条市、橿原市には少い。一方流造本殿の古い造構は一間社に限られ、五条市と大和高田市に集中している。二間社以上の造構の年代は趣して新しく、吉野町、東吉野村に大規模なものがある。

春日造本殿で注目される造構としては、まず建立年代が 16 世紀に遡る可能性を持つものとして、初生寺白山権現社本殿（橿原町白明）が挙げられるが、後補材も多くかなりの修理を受けているとみられる。天満神社本殿（大和高田市根成郷・17 世紀前半）は比較的大きい削木入春日社で、その明快な意匠には格別のものがある。八幡神社本殿（黒瀬村要飯谷・17 世紀前半）は摂社と 2 棟同時期・同規模で板葺、しかも摂社のみ見世権造とする逸品である。菟田野町には年代の古い小規模な本殿が目立ち、一方五条市には井上内親王を祀る御靈神社が多数（流造を含む）あって装飾的な意匠をもつ一群を形成する。この他に 3 棟同一の本殿を持つ水分神社本殿（大字宇陀町平尾・貞享 4 年）、簡素ながら品格ある春日神社本殿（橿原市外・17 世紀中頃）などが好作品である。また春日大社及び同若宮の古社殿を 4 棟（御所市東持田・萬木坐御靈神社本殿、回戸毛・春日神社本殿、五条市長舟・龍池神社本殿、橿原町萩原・墨坂神社本殿）確認した。

流造本殿では、御靈神社本殿（五条市同町・17 世紀前半）が年代は最も古いが改造が大きい。上記天満神社本殿と同敷地に建つ八幡神社本殿（大和高田市根成郷・17 世紀前半）は、小規模ながら意匠は重厚である。以上は臨障子が身合前面に付くのが特徴で、類例は御靈神社本殿（五条市長舟・17 世紀後期）にも見られる。五条市では落袖神社本殿（黒瀬町・17 世紀後期）が彫刻を多用した異色作である。拝殿その他のについては、先に述べたように近世建築が少なく、現在までに耳成山口神社拝殿（橿原市耳成・寛延元年）、飛鳥坐神社拝殿（明日香村飛鳥・18 世紀中期）の 2 棟を数えるのみである。

寺院建築に眼を転じると、本堂の棟数全 42 棟の内約半数の 22 棟が浄土真宗に属し、次いで浄土宗が 12 棟を数える。この他に真言宗や律宗系諸宗などが若干ある。真宗寺院では大和五坊と称された称念寺（橿原市今井町）、本善寺（吉野町飯良）、願行寺（下市町下山）、光照寺（御所市御所）、

専立寺(大和高田市高田)がいずれも大規模な本堂ないし伽藍を有しており、その威勢がしのばれる。本堂では願行寺本堂(17世紀中期)・本善寺本堂(寛文元年間)の2棟が保存もよく、注目される。平面は当初から後門形式を取り、境内鐘楼も優品を有する。吉野郡山間にほど近く年代の古い満福寺本堂(大塔村源原・伝慶長年間)・光遍寺本堂(天川村源原・伝正保年間)の両造構がある。前者は小規模な対面所形式の堂であり、後者は後門形式とならない古式の平面を保持している。真宗本堂で中古に後門形式に改造されたもののうち、改造年代を知り得る数例では、その年代は18世紀中期に集中していることも注目されよう。

淨土宗本堂では当麻寺奥院本堂(当麻町当麻・慶長9年)が筆頭であるが、向拝の後補をはじめ軸部にも改造を受けている。これに次ぐ17世紀の造構には乏しいが、18世紀に入ると特に御所市及び新庄町に集中して6棟の本堂建築が残されており、平面と細部意匠の変遷過程をうかがうことができる。

その他の建築では、まず社堂風の方三間堂として、春樂院阿弥陀堂(野迫川村北今西・伝天正年間)が挙げられる。木太い軸部は当初のままと認めてよい。観音堂(西吉野村立川前)にも一部中世の古材が再用されている。次に真言寺院の方三間堂では、薬師寺因幡堂(高畠町巣坂・伝慶長年間)・松法輪寺本堂(五条市大洞・寛永17年)・当麻寺大師堂(当麻町当麻・伝正保年間)の3棟が、年代が古く、質も高い。他に当麻寺奥院方丈(当麻町当麻・慶長17年)も古い造構であり、背面中央間が仏間となる本来の方丈形式に復原し得る。後期の壮大な装飾的作品としては龍蓋寺本堂(明日香村岡・伝寛政年間)・専立寺表門(大和高田市高田・寛政6年)が双壁といえよう。

県下には、上記の当麻寺をはじめ、大規模な社寺も數多い。それらには国指定のものなどの優れた建築を含むのが常であるが、今回、大三輪神社(桜井市)の勅使殿・勤番所が重文拝殿(寛文4年)に近い時間のものと推定され、また長谷寺(桜井市)でも鐘楼及び登廊の一部が重文本堂(寛安3年)と同一時期の建立と判明するなど、群としての優秀さを明らかにし得たのも今年度の成果のひとつであった。

(松本修自)

旧奈良町の町並調査（Ⅲ）

建造物研究室

奈良市は旧奈良町の全域を調査範囲とする伝統的建造物群調査を4カ年計画で実施している。1982・1983の両年度は、文化庁補助金の交付を受けて旧奈良町東南部を調査し、1984年度は市で旧奈良町西半部の地域を調査対象とし、また保全計画策定のための基礎作業も行なった。調査はこれまで同様に一次調査として対象地域の主要道路に面した家屋の用途別、構造別、階高別、年代別の調査と外観写真撮影、関係資料の収集を行ない、次いで二次調査として代表的と思われる町家、長屋あわせて10軒を抽出し、建物の実測ならびに内部調査を行った。このほか町並保全計画立案のための基礎調査として、奈良町の街区構成の分析、町並景観を特色づける要素の抽出と分析等を行い、保全計画立案のための課題を整理した。

今回の調査区の大部分が近世奈良町の西限にあたる町々である。三条通は大阪からの主要交通道路であって、近代になつても商店や旅館がたちならび、いわば奈良町の東西軸となつてゐる。三条通より南側は、街区の形態が不整形となり、街路が東西あるいは南北にまっすぐには通らず、川に沿つて曲がったり、くい違つたりしている。三条通より北は、街区の乱れは少ないが、一つの街区が長方形であつたり、規模が大きい点が目立つてゐる。

今回の調査で注目されるのは町家と農家の中間的な形態をもつ町家の存在である。トオリニワ中央に煙返しを置き、この壁を受けるための大梁、大梁を受ける太い柱が意匠上の見せ所ともなつてゐる。次に注目されるのは新しい型式の町家が多く見られることである。奈良町東南部は近世以降に市街化が進んだ地区があり、従つて伝統的な形態をとりながらも、部分的に変更を受けた町家が多く見られる。本来トオリニワか別棟の座敷のみが落棟になったのに、構造上の進展に伴い、トオリニワ以外を落棟とする町家ができたり、庇の広い町家が発生してくる。旧来と変わらぬ長屋は建設され続けるが、独立住宅でありながら隣接して建つ集合住宅が昭和初期に現われる。これは近年の郊外型住宅に受を継がれる型であろう。

奈良町において、伝統的な地域文化財が相俟つて作りあげている景観が町づくりにいかに重要なものであるかは、これまで報告書などで述べてきた。町家の建物構成や意匠は、気候・風土や住宅密集地であること、敷地が狭いことなどを考慮したものである。町家は、木造のため増改築が容易である。いいかえれば、町家は増改築することで住む人の要求に対応しながら景観との調和をはかることが可能である。旧奈良町中心部でも、周縁の地区でも町家の建築が近年目立ちはじめている、奈良町保全の計画と実施が焦眉の課題となりつつある。（上野邦一）



奈良・油坂の町並

本山寺鎮守堂の修理

植物研究所

本山寺は香川県三豊郡豊中町に所在し四国靈場第70番の札所にある古刹で、境内には本堂(1300・国宝)や仁王門(舞台後殿・重要文化財)をはじめ、大師堂(1795)、圓應堂(18世紀)、鐘楼(1793)、五重塔(1910)など数多くの建造物がたちならんでいる。

鎮守堂は仁王門をはいってすぐ左手に東面し、三間社流造の形式をもつ。1984年春から寺の事業としてその維持修理がはじめられたが、解体中檼木や附木から墨書銘が発見され、天文12年から16年(1543~1547)にかけての建立で、正徳4年(1714)に大規模な修理が行われていることが判明した。よって未指定物件ではあるものの急拠文化財建造物としての修理基準による本格的な修理の方針が変更され、その調査と修理指図に改めることになった。

正徳の修理は、円柱舟肘木とする身合部分はそのままとしながらも、角柱三斗組の庇部分を新たにし、妻飾りを太瓶束巻形式に改め、軒まわりに新材を加えるなど各所にわたっている。特にこの時瓦葺に変更したため、破風板は下辺と上辺とでは極端に曲率の異ったものとなりいちじるしく外観を損ねていた。今回の修理ではこれら後補部分のすべてを当初形式に復原する案も検討されたが、正徳修理材がかなり混入していること、軸部や組物については正徳材もそれなりになじんでいることなどを考慮し完全復原は行わないことにした。ただし、屋根については瓦葺とするには柱や梁などの構造部材がありにも細きにすぎ、あきらかに不調和であるところから、瓦以前の葺材と推定される檜皮葺に復することに決めた。同時に化粧垂木の中に相当数反り増しのある天文当初材を残しているため軒まわりはこれによって復原し、あわせて破風板も勾配・曲率とも軒にあわせた旧形式で整備した。この結果庇や妻飾りの細部に江戸時代中期の様式を残すものの、外觀の大半は建立当初である室町時代末の形態を示すことになり、香川県では數少ない中世建築の一つとしてその価値があらためて発揮された。

なお、内部の板扉は各間とも双折れであったが、当初扉を後世襤に二つ割りにしたこと、庭柱通りの襤戸はもと身舎前面通りのもので、格子割りがごひらでありかつ框に釘留めにされ、裏板は手彫りの二重彫り中板形式であることなど中世建具の特色をもっている。(細見齊三)

「天文十二年」
木彌書路(元初)
時本彌書路(元初)
時社建立
天文十六年三月吉日
近所大作人
源四郎 仕作
西郎

(第 77 頁)

大覚寺大沢池の発掘調査

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

大覚寺大沢池は、平安時代初期、嵯峨天皇の造営による嵯峨院の庭園造構と推定されており、池の北約 90 m の位置に存在する名古曾縄跡および現大覚寺境内を含めて国の史跡、名勝に指定されている。1983年、大覚寺は弘法大師大遍忌法要事業の一環として、大沢池北岸の護岸整理工事を企画し、1984年、工事に先立って、国の補助事業として発掘調査を実施した。調査は京都府、京都市文化財保護課の協力のもとに奈良國立文化財研究所が担当し、調査区は12カ所、計 174 m²、期間は1984年 8月20日から10月 3日までである。

調査の結果、大沢池の造成にあたっては、それ以前に自然の渓流によって堆積した疊層を一部園池の汀線に利用し、鎌倉時代以降に、この疊層の上層に新たに埴土整備を行い、挙大の玉石で化粧して洲浜状汀線の改修を行っていることが判明した。また名古曾縄は、現存する縄石組のうち当初の位置を伝えるものは 2 石で、他の 4 石はすべて近世以降に転用していることが明らかとなった。縄石組背後の築山の当初の形状や、瀬口への導水路は調査面積のうえで明確にすることはできなかった。縄石組から流れ出した道水は、端の前面において一旦堰を形成した後、途中水分石や大ぶりの景石等を配した素掘りの溝となり、中島や池状造構が存在するなど変化に富んだ流路となっている。検出したのは、縄石組から大沢池に至る区間の北半部 32.5 m で、南半部は不明である。埋土からの出土遺物は平安時代末から鎌倉時代頃のものであるが、黄褐色粘質土の地山面と前述の疊層上面において検出しており、嵯峨院時代の道水をほぼ踏襲するものと考えてよい。これ以外に、鎌倉時代の旧大覚寺の東西築地堀の痕跡と、これに伴う瓦溜等を検出した。

(田中哲雄・本中 真)

名古曾縄跡（左図の 1）

発掘調査位置図

平城宮跡出土瓦のパソコンによるデータ検索活用システム

平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

平城宮跡から出土した考古遺物については、発掘開始20周年にあたる1978年からデータベース化に着手、データの蓄積をはかってきた。これは、国立民族学博物館との共同研究の一環として、従来から利用していたホールソート形式の遺物登録カードをもとに遺物1点ごとのデータを民博の大型計算機に入力したもので、1981年度以降は特定電話回線を設置して研究所側の端末機によって検索する方式をとっている。1982年度までに入力したデータは計量化の比較的容易な軒瓦32,000点、鏡貨2,000点である(本筋については別のシステムを採用している)。

しかし、このシステムは民族学博物館に依存する度合いが高く、入力に至るまでの操作が繁雑で記入ミスが生じ易く、また整理・登録済み遺物についてすみやかに入力する必要もあるため、1983年度にはパーソナルコンピューターによってデータを直接入力する方式に変更することにした。入力および検索のためのソフトウェアは九段コンピューターサービス(株)に依頼して作製、各遺物について整理終了後直ちにデータを入力する体制を整えた。ハードウェアの構成はNECパーソナルコンピューターPC9801にディスクユニットPC9881およびハードディスクユニットPC98H33を加えたもので、10万点まで処理可能である。1984年度末には第163次調査までに出土した軒瓦・道具瓦・刻印瓦等のデータ入力を完了、総計41,967点に達した。なお、別に伝送プログラムを作製し、ある程度新規データが溜められた段階で民族学博物館の大型計算機へデータを送る。

個々の遺物については、出土地区・地点、遺物番号、型式番号、遺構番号、出土層位、出土年月日等の情報を入力している。検索は出土地区別・地点別および型式番号別・種別の4通りが可能で、後者の場合は特定の地区内だけでも検索できる。

丸・平瓦についてもデータベース化を進めているが、出土量が膨大なうえ破片のため全形を知り得ない資料が多く、分類し数量化するための規準を確定する作業を先行させなければならない。奈良山丘陵にある平城宮瓦窯群出土品を中心に胎土分析を行っているが、この成果も組み込んで効率の良いシステムを検討中である。また、筑波大学情報処理センターに依頼して、統計処理した結果をドットマップ等の方法で表示するシステムも開発中である。(山本忠尚)

** 型式別検索一覧表 **			B. 1		
区	地点	件数			
6AAC	UN48	1	6AAP	QB78	1
6AAC	UN49	1	6AAP	KAO7	1
6AAC	BE04	1	6AAP	KD08	1
6AAC	BH05	4	6AAP	KF05	1
6AAC	DD23	1	6AAP	MA30	2
6AG	JG47	1	6ABD	DD14	1
6AG	JG47	2	6ACU	ER37	1
			** 型式合計 **		24
			** 合計 **		41967

型式別検索結果(6313D型式)

島根県荒神谷銅剣埋納遺跡の調査

平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

島根県教育委員会が、簸川郡斐川町神庭西谷で農道建設に伴う事前調査の実施中のところ、1985年7月12日に銅剣埋納遺跡を発見し、当研究所に発掘指導を依頼した。

遺構と遺物 小さな尾根の南斜面に上下2段の段を削りだし、上段に柱穴3個を掘り、下段に埋納坑を設ける。埋納坑は底を粘土で平らに整え358本の銅剣を4列(東西約2.1m, 南北約1.5mの範囲)にわけて並置したのち、土で被覆している。剣の鉋と茎をほぼ水平にし刃を斜めに立てるが、西の2列(34本・111本)は鉋と茎を交互に揃え、東2列(120本・93本)は鉋で揃えて並べる。

銅剣の型式はすべて中細銅剣c類に属し寸法も比較的揃うが、複数の鋳型でつくられた模様である。鋳造後に刃を研ぎだしているが、刃こぼれなどの損傷はない。茎に「X」印を刻むものがある。型式を同じくするものが14本確認できるが、同型式の鋳型は出土していない。

銅剣の保護 銅剣は素手で取りあげることができないくらいに腐食し、脆弱化していた。本来は強化処理を施したのちに取りあげるべきであるが、発掘期間の関係で十分な時間がとれないこと、周囲の土壤に湿気があり通常の合成樹脂を浸透させるのが困難であることから、現場では仮りの強化措置にとどめた。その手順は次のとおりである。

1. 銅剣に付着する土を除去する。鉋や刃の先端部分は薄くかつ腐蝕が著しいので、銅剣表面の土を除くことはできず、土が付着したままの状態で合成樹脂により強化した。
2. 銅剣の表面にアクリル樹脂を塗布して強化する。前面の露出する片面に合成樹脂を塗布したあと、ガーゼを張りつけて強化した。
3. 造構から取りあげると、さらに添木をあてて剣を横倒しにし、添木のうえにのせて取りあげた。背の部分が鉋のため互いに密着しているものがあり、この場合には分離することなく、2~3本ずつまとめて取りあげざるを得なかった。

発掘終了後は現場で仮り強化したままの状態で乾燥させて保管しているが、今後は本格的な保存措置を行わねばならない。まず、現場での強化措置を解除するのであるが、アセトンやキシレンなどを用いて、アクリル樹脂を溶融・除去する。つぎに、付着する土壤などを除くとともに発掘中に分離した細片を可能なかぎり接合する。銅の腐食がこのほか進行しているので、鉋とりには注意を要し、必要に応じて部分的にエポキシ系合成樹脂を塗り、接合面を強化することも必要となろう。鉋の進行を防ぐためには、はじめにベンゾトリアノールのアルコール溶液を減圧方式でしみこませ、さらに同薬剤をふくむアクリル樹脂を減圧含浸することになろう。

上記の保存措置と平行して、銅剣の正確な測定などを含む考古学的な調査、あるいは材質分析など自然科学的調査なども行われることになる。358本という多量の銅剣だけに、今後、長期の整理期間が予想される。

写真測量 銅剣埋納遺跡という希有の事態に対応するため、写真測量を実施した。その理由として、写真原板さえ保存すればいつでも現場の状況が再現できること、358本の銅剣すべてについてどの個所でも標高測定が可能であること、任意の部分において出土状態の縦横断が測定できることがあげられる。

基準点 はじめに銅剣の周間に標定点を設置。その座標値は発掘調査の基準点を原点とし、発掘調査の基準方位にしたがった局地座標を与えた。これは後の国家座標（平面直角座標系第Ⅲ系）への結合多角測量によって、2様の座標値が与えられる。標定点は8点、木杭に発泡ウレタン製の5cm×5cmの標識を貼付した。測量器械は、T2型トランシット（ウィルド社製）・AT-M3型レベル（トブコン製）・1級スチールテープ、測定精度は±1mm以内である。

撮影 撮影用カメラはSMK-40ステレオカメラ（カールツァイス社製）で、当研究所が開発した二脚ホール（bipod）にSMK用垂直架台を懸架し垂直撮影を行った。カメラレンズにクローズアップレンズを装着。このレンズをつけると、被写界深度が84～120cmとなり、1:16の写真縮尺がえられる。また、このステレオカメラは基線長（2台のカメラの主点位置間隔）が40cmあり、基線比（基線長と撮影距離の比）が1:2となる。これでは銅剣出土状況のように凹凸の大きい被写体では死角が生じやすくなるので、ステレオカメラ架台全体を最初の撮影位置から20cm基線上で移動して撮影した。これによって40cm基線長によるモデルが2対、20cmが3対えられる。クローズアップレンズをはずし、2.4mと5mの高度からも撮影した。これは付近の地形図を作成すると同時に、近接撮影ではステレオモデルに標定点が不足することもあるので、写真上で標定点を増設するためである。撮影作業はカメラの重量が架台をふくめて20kgにおよぶこと、ガラス乾板を用いるためフィルムの取換が頻繁であること、直下の銅剣に損傷を与えてはならないことなどから、通常以上の労力と時間を要することになった。

図化 1:3の縮尺で図化。1:16の写真縮尺は測定用写真としてはかなり大縮尺だが、銅剣の細部観察には不充分な場合を生じる。とくに付着する土の清掃がゆきとどかない個所の測定は不可能となる。そこで平面図については、手彫りによる実測図を参考にした。一方、交錯する稜線を図紙上で識別することがむつかしいところから、機械原図は5本おきに5色で色分けにした。清絵原図は黒赤の2色分版とし、第2原図としては両版を合成した黒1色図、および黒赤の2色刷りの2様を作成している。単点（独立標高点）は銅剣1本につき、茎先端・関・鋒先・剣身部2点の計5点につき測定した。また剣と剣との間で露出している地面についても測定している。単点図は分版オーバーレイ。単点総数は2,000点におよんだ。断面については銅剣の1列ごとに1本、計4本測定した。なお、図化・測定作業はアジア航測株式会社に委嘱して作成した。

発掘指導について、当研究所から佐原真・町田章・伊東太作・沢田正昭・秋山隆保・上原真人・岩永省三が参加した。なお、島根県教育委員会から『荒神谷遺跡銅剣発掘調査概報』が1985年3月に出版されている。

（伊東太作・沢田正昭・岩永省三）

動物遺存体の調査

埋蔵文化財センター

1 現生標本の作成

動物遺存体とは、当時の人々の食料残渣であった骨や貝がほとんどで、その他にそこに生息した陸産の貝類や小動物が含まれる。骨は解体や調理のために細片となって種の判別が難しい場合が多い。そのため細片となった骨片を1点ずつ現生動物の標本と比較しながら何の骨であるかを同定することが不可欠である。そのような目的のため、現生動物の骨格標本の作成につとめ、1984年度には哺乳類40個体、鳥類23個体、魚類50個体、そのほか両生類、爬虫類、貝類などの現生動物の骨格標本を作成してきた。標本の製作には、電気ヒーターを使用してタンパク質分解酵素(ババイン)の5%溶液を50-60°Cに温め、死体を液浸させる。そしてドロフトチャンバー中に悪臭を排氣しながら肉や油脂を溶かし、2~3日で成骨化し、その後エチルアルコールで脱脂して標本としている。

2 大阪府亀井遺跡出土動物遺存体の調査

大阪文化財センター、近畿自動車道吹田天理線関連調査中、亀井遺跡切り広げ部から出土した動物遺存体約2,300点について整理分析を行った。1点1点の骨には解体や調理のための割った痕跡、切り傷、焼け焦げなどの文化的な情報や、性別、年齢、保存度など生物学的な情報が観察できる。そのような多岐に渡る文化的、生物学的な情報を整理するためにパソコンコンピューターの使用を試みた(下図)。この使用法は動物遺存体以外の遺物でも応用可能であるので、今後、出土遺物を全て入力し、各種の遺物の層位や遺構ごとの出土関係などを明らかに出来るようこの研究を推進したい。今回は分析の対象とした破片2,300点中、一定の大きさの1,500点余りを入力し、さまざまな角度から考察を加えた。結果は以下のとおりである。

1.	1 cm 以上の骨片	1,504点	中	684点	が科または種まで同定でき、そのなかではイノシシが383点(56%)、ニホンジカが236点(35%)、両者	ファイルの名前	B:KM2.DAT	カード番号	1296
で同定できた出土量の91%を占める。	2.	1	登録番号	:	1456				
3.	2	遺跡名	:	亀井遺跡 2					
4.	3	地区	:	24					
5.	4	層位	:	下屢上半					
6.	5	遺構	:	SD2401					
7.	6	遺物番号	:						
8.	7	時代/時期	:	弥生中期					
9.	8	日付	:	830719					
10.	9	TAXA	:	Mammal					
11.	10	種名	:	Sus scrofa					
12.	11	部位	:	Mandible(MI-3)					
13.	12	左右	:	R					
14.	13	PORTION	:						
15.	14	SEGMENT	:						
16.	15	成長度	:	M3 worn					
17.	16	切痕	:						
18.	17	火熱	:	Dark					
		計測値	:	M3 L34.5 W16.0					

(松井 章)

コンピューター入力の一例

コンピューターによる発掘調査記録システム

埋蔵文化財センター

発掘調査により出土する夥しい量の遺物は、多くが遺構と密接な関連をもつ。したがって、その採取は、出土地点を正確に計測し記録した上で行う必要がある。この作業が時としてきわめて繁雑であり、正確を期すためには、かなりの技術と労力が要求される。これを迅速かつ正確に行える方法はないものか、当システムはこの要求に応えるべく開発したものである。また、近年、発掘調査関連データをコンピューター処理しようとする試みが行われている。このためには、数値、項目データを手入力しなければならないが、このシステムによれば、発掘現場で直接入力することにより、室内作業の手間を省けるという大きな利点も合せ持つ。

システムのハード構成 屋外 1) 光波測距測角儀 (TS) 光波により距離を測定し、内部の水平角、垂直角目盛を1秒単位で自動的に読みとり、表示すると同時に出力端子(RS232C)に距離と併せて出力する。2) 電源内蔵パーソナルコンピューター (HC) 計測結果を画面表示し記録媒体(カセットテープ、内蔵RAM、フロッピーディスク等)にデータを蓄えると同時に、プリンター印字する性能を持つ。屋内 パーソナルコンピューター(ホスト) 屋外で使用する HC は通常、記憶容量も小さく、プリンターの印字幅も狭いので、ホストコンピューターとして、収集データを受け入れ、マスターファイルを作り、データ処理を行う。最小、フロッピーディスクを装備し、内部記憶容量として 250 Kbyt 以上を備えたもの。

作業手順 1) あらかじめ、その遺跡に関する共通項目を HC に入力しておく(遺跡名、地区名、基準点名、基準点の座標値等) 2) TS を基準点上に整置し、別の基準点を測定する。遺物採取地区が基準点から遠い場合は、任意点に据え付け、2点の基準点を標準、測定する。これにより、HC に方向角が与えられ、後続の測定点の3次元座標を計算することが出来る。3) 遺物採取者は、小ポールに取付けた小型軽量のプラスティックミラーを採取する遺物の中心に置く。観測者はミラーを標準し測定ボタンを押せばよい。必要ならば、その遺物の属する遺構、土層、遺物の種類などを入力(HC のキー1個に意味を持たせてあるため、「カワラ」又は「KAWARA」等とキーインする必要はない)した上で測定ボタンを押す。4) 測定順の追番号、測定値、属性などは即座に HC に蓄えると同時に、プリンターに、小地区名、測定日時を伴って印字する。この間に要する時間は約30秒。5) 測定が終ったならば、終了のシグナルを入力し、ファイルを閉じる。6) HC を室内に持ち帰り、データをホストに転送する。ホストはマスターファイルを作成し、フロッピーディスクに保管する。7) 保管したデータは遺物、遺構の整理、検索、平面図、分布図作成など、さまざまな統計処理に活用する。

操作はすべて問答形式にプログラミングされており、コンピューターの知識も、キーボード操作の熟練も必要としない。今後、実地での使用例を積み重ね、ハード、ソフト両面にわたってシステムを充実させていきたい。

(伊東太作)

年輪年代学(5)

埋蔵文化財センター

ヒノキ材による年輪標準パターンの年代確定範囲は、現在のところ西暦1009年から1984年までである。これは、木曾産ヒノキを主にして、現生木と古建築用材（主に東大寺參龍所の板材等）から得た年輪データをもとに作成したものである。この年代確定範囲においては、実際に年代未定の資料材の実年代を確定し始めている。ここでは、この標準パターンと長野県内に所在する2棟の古建築の解体修理の際に取り換えた用材4点との比較によって年代測定を行った結果を報告する。

若宮八幡神社本殿（元松本城鎮守）——長野県松本市大字筑摩3210 建立年代（桃山時代）

資料は、12cm角の身舎柱（ヒノキ材）1点である。年輪数は143年分を数えた。標準パターンとの照合の結果、最も新しい年輪は1614年と確定できた。この資料は、外観からは辺材部分が確認できないし、これに続く心材部分がどの程度削り取られているかも推定しにくい。したがって、資料の伐採年代は、削り取られたこれら周辺部の年輪数を1614年に加算しなければならない。削り取られた心材部分の年輪数は推定しがたいが、辺材部分の年輪数については、矢沢亀吉の研究によって、50～60年と推定することができる。このことから、資料の伐採は1654年～1664年をさかのばることになる。この結果、この資料は桃山時代（1573年～1614年）ではなく、江戸時代に伐採されたことがわかる。若宮八幡神社本殿の建立年代は、この身舎柱が当初材であるとすれば、江戸初期となり、そうでなければ、この時期に取り換えた材ということになる。ただし、年輪測定から建物の建立年代を推定するには、同一建物につきさらに多数の資料について測定を行う必要がある。

真田信之靈廟（重要文化財）——長野県長野市松代町松代 建立年代——万治3年（1660年）

資料は、厚さ3cm、幅14.5cmの板材の断片3点である。材種は、3点ともサワラ材（ヒノキ科）である。これらをA、B、Cとすると、年輪数はそれぞれ273、291、131年を数え、樹種が異なるにもかかわらず、ヒノキの標準パターンとよく合致した。その結果、それぞれの下限年代は、A—1503年、B—1526年、C—1568年となった。最も新しい年代を示したのはCである。3点とも辺材部分が失われており、これに続く心材部分も加工する際に削り取られているため、周辺部分の総年輪数は不明である。したがって、Cの伐採年代は1618年～1628年以後にとどまる。この建物の場合、建立年代が明らかであることから、削り取られた心材部の年輪数を考慮に入れるに、これらは当初材の可能性が高い。

以上、年代未定の建築部材4点の測定によって、それぞれの最終年輪の実年代を明らかにし、さらにヒノキの標準パターンとサワラの年輪パターンとの相関性が高いことが判明した。今年度は、さらに、この標準パターンを使用して、遺跡出土の木製品等の実年代の測定を開始している。

（光谷拓実）

銅象嵌の保存処理

埋蔵文化財センター

出土した金属製造物の原形を探るためにX線写真がよく利用される。X線写真の撮影によって発見された象嵌遺物も多く、これまで、古墳時代のものとしては約140点余りが発見されている。大半の遺物は、鉄地に銀線が嵌められ、次いで金線が使用されている。今回報告する例は、兵庫県箕谷古墳群2号墳から出土した鉄刀で、古墳時代の遺物からは初めてという銅象嵌による銘文が施されている。

保存処理に先立ち、X線透過による構造調査、材質分析、腐食の原因となる塩化物イオンなどの測定、サビの分析等の事前調査を行った。象嵌の特徴や刀身の腐食状態、および亀裂の状況等を把握し、保存処理の方法が決定された。刀身上の銅象嵌の場合、金・銀象嵌などとは異なり、X線写真は不明瞭で、銘文が判読しにくく、見落としがちになるので注意を要する。

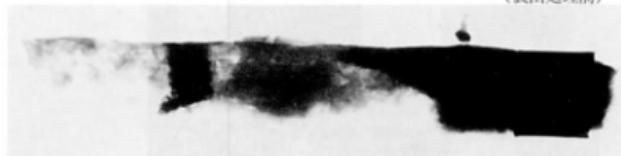
保存処理は脱塩を行ったあと、部分的に合成樹脂で強化し、象嵌銘文の表出作業にとりかかった。この作業は、実体顕微鏡で10～40倍に拡大して観察しながら、小形のグラインダーや解剖用メス等を使用して、サビを一層ずつ削ぎようにして除去する。特に、針鉄鉱や鱗鉄鉱の混在している層が磁鉄鉱と互層をなしている部分は、不用意に剥離して象嵌部分に損傷がおよぶ恐れがあるので、事前に合成樹脂で強化してからサビ取り作業をすすめる。銅は、乾燥状態では安定しているが、湿った空気中では塩基性塩を形成し、金属光沢を消失するので、象嵌銘文の削り出し作業と一緒に防錆のための保存処理を進める必要があった。これは、銀象嵌の場合も同様である。象嵌表出後は刀身全体のサビの除去を行い、合成樹脂含浸後、接合・整形をして完成了。

なお、銅象嵌には鍍金や鍍銀が施されている例があるのでも、今回の場合にも、この種の技法の有無について詳しく調査し、その可能性のないことを確認した。

(肥塙隆保)



(表出処理前)



(X線写真)



箕谷古墳群2号墳出土鉄刀

(表出処理後)

保存科学研究集会

埋蔵文化財センター

保存科学研究集会は、1985年3月19・20日の2日間にわたり、奈良国立文化財研究所・講堂で開かれた。保存科学関係担当者をはじめ、関連諸分野から約60名が参加した。

発掘調査に伴う遺跡・遺物の保存科学的な問題が今日ますます多様化し、かつ、高度な専門技術が要求されるようになってきた。今回は、保存科学の現状と問題点について、研究成果を報告・討議し、さらにお互いの情報を交換することを目的とした。限られた時間内で最大の効果をあげるため、研究発表(7件)に加え、ポスター発表(9件)や保存科学関連機器検討会を設けるなど、新しい企画を盛りこんで行われた。

第1日目は、基調報告(沢田正昭)に続き、出土漆製品の顕微鏡観察から製作の技法を推定し、保存処理の基礎データをなす報告(永島正春)、出土木材の各種保存処理法と強度および寸法安定性に関する報告(増沢文武)、高松塚古墳の修復に関する報告(増田勝彦)、岩石に対する減圧含浸工法の効果(秋山隆保)などの研究発表が行われた。さらに、ポスター発表では金属製造物のサビと保存(秋山隆保)、木製品の保存処理に関する最近の問題(内田俊秀)、中国軍史陶俑の修復保存(岡田文男)、植物質繊維加工品の保存処理(中川正人)、正倉院宝物の非破壊分析(成瀬正和)、60万年前の水浸出土木材の保存(橋本清一)、中性子ラジオグラフィー(増沢文武)、動植物遺体の保存(山口誠治)、石造物の保存(山田拓伸)など幅広い研究成果が紹介された。

第2日目は、赤外線の利用による漆紙、墨書、装飾古墳壁画等の研究(三浦定俊)、象嵌遺物の表出技法の研究(西山要一)、開陽丸や新安沖の海底出土遺物を具体例にあげた、海底出土遺物の保存処理(沢田正昭)について報告された。続いて、保存科学関連機器検討会が行われ、最後に総合討議が行われた。



保存科学研究集会講演会

総合討議では、漆製品の保存処理、遺跡の露出保存の問題などを中心に活発な意見が交換された。特に、岩石の硬化方法とその効果について、総合的な観点から研究をすすめるべきであるとの意見が述べられた。また、わが国では、緒についたばかりではあるが、海底出土遺物の保存処理、特に脱塩処理に関する、より効果的な方法の開発に強い関心が寄せられた。保存科学の、今後ますますの研鑽を合言葉に幕を閉じた。

(沢田正昭)

飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

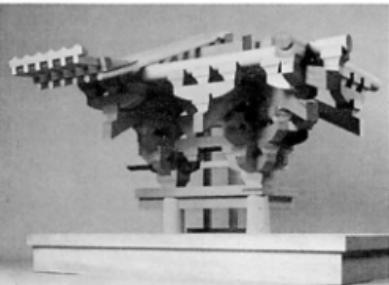
特別展示「小建築の世界」 1973年、平城宮跡で発掘された殿堂雄形部材は、元興寺五重小塔と同じく、实物の十分の一模型と推定された。この他に各地で小形斗、小形瓦などの出土例があり、古代に小建築が広く存在したことを物語る。今回展示した、上記雄形部材による三手先斗構の復原模型と、海童王寺五重小塔の現寸模型は、精巧な模型としての小建築の代表例である。また仏龕・厨子としての小建築も教多く、法隆寺玉虫厨子(模型)、兵庫・古法華山石造仏龕(模型)、重文静岡・智満寺木造仏龕が一堂に会した。一方、埼玉・東山遺跡出土の瓦塔・瓦金堂は、土製の小伽藍とも言うべきものである。これらに加えて、古墳時代の小建築としての家形土器・埴輪の優品が出陳された。岡山・女男岩出土の家形土器は、最も初期の素朴な姿を示し、三重・石山古墳出土家形埴輪は典型的な倉を表す。大阪・美國遺跡出土のものは、外部の表現の写実性に加えて、内部まで作られているということで、一躍脚光を浴びたものであり、大阪・今城塚出土のものはその大きさで他を圧倒する。

これら小建築が、失われた古代建築の姿を残す貴重な遺物であることを見ていただくとともに、時代と用途を超えて、小さな建物を造りだした古代人の心に触れていただくことができたとすればさいわいである。

(松本修二)

特別展示「藤原宮発掘五十年」 藤原宮の発掘調査は、1934年に開始されて以来、戦後しばらくの空白期間を挟んではいるが、本年度で50年目にあたる。飛鳥資料館では、戦前の日本古文化研究所による調査の資料を収集するとともに、調査の関係者である和田軍一氏や松崎宗雄氏あるいは発掘作業に従事した人々から当時の状況を聞き取り、従来必ずしも充分に明らかでなかった調査の経緯の一端を記録することができた。なかでも、宮内庁書陵部に保管されていた日本古文化研究所関係の資料のうち「藤原京址実測平面図」(縦3.1m×横2.3m)は、藤原宮周辺の詳細な地形図(縮尺300分の1)に大極殿や朝堂の遺構を描き入れたもので、当時の調査の質の高さを示すものとして注目された。展示では、日本古文化研究所をはじめ奈良県教育委員会それに当研究所による発掘調査研究史に関する写真資料や実測図面、書簡などを公開した。また、特別展示室内を藤原宮西面中門にみたてて、敷石、礎石、磨居敷、扉、柱などを原寸大で復原し、室内に土器や瓦、木簡などの遺物を、近年の研究成果に基いて効果的に陳列するなど、藤原宮に関する調査研究の歩みと現状を紹介した。

(井上和人)



平城宮跡殿堂雄形斗構模型

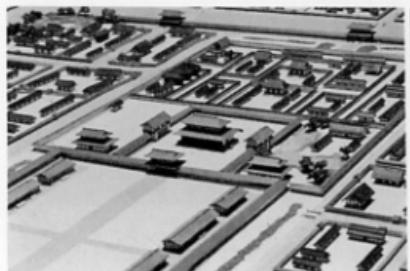
飛鳥・藤原京復原模型の製作

飛鳥資料館

飛鳥資料館では展示内容の充実に努めているが、本年度はその一環として、飛鳥・藤原京復原模型を作成した。模型の縮尺は1,000分の1とし、飛鳥・藤原京城を中心とする5.5km四方の範囲を復原の対象とした。地形の復原は奈文研作成1,000分の1地形図をベースとし、これまでの調査研究の成果に基いて、若干の改変を施した。たとえば、藤原京城内を斜めに縱断する飛鳥川については、後世の改修の跡が明らかであり、現流路の周辺に残る彎曲した水田畠畔等の地割をもとに、やや蛇行する旧流路を復原した。また藤原宮東方に流れる中川は東三坊大路推定位置に沿って南北に通じてるので、京内の堀河であったとする見解をうけて、これを人工的に整備した運河として復原した。その他にも、発掘調査の成果や地形の状況を検討して、1300年前の景観の復原に努めたが、もとより不分明な点はおびただしく、推定あるいは想定をたくましくせざるをえなかった部分も多い。なかでも、景観上最も重要な要素となる藤原京の規模や位置についてさえ、近年いくつかの異説が唱えられているし、あるいは、都の周辺に披掛かる広大な水田の田制に関しても、現在みられる条里制と異なっていたことは確かであるが、その実情は必ずしも明らかにされていない。こうした多くの基本的な問題点があったことに加えて、製作期間がきわめて限られていたために、所期の目論見を充分に表現しきれなかった部分もいくつか残された。

全体で使用した建物は50種およそ8,000棟、枝振りを表した樹木は13,000本をかぞえる。藤原宮大極殿院の諸建物や寺院伽藍建物など一点ずつ個別につくった特殊な建造物以外は、木片とアクリル板で製作した原型をもとに複数の雌型をつくり、それに合成樹脂を流し込んで大量製作する方法をとった。また地形ベースの製作は、地形図の大きさ、つまり100cm×70cmのブロックごとに行った。従って、完成した5.5m四方の大復原模型は、全体で48個のブロックに容易に分割できるようになっている。なお、模型の土台づくりから、最後の仕上げまで、製作作業のはば全工程は、すべて当館の手で行った。

(井上和人)



藤原宮中枢部



藤原宮大官大寺周辺

平城宮跡・藤原宮跡の整備

平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・庶務部

1 平城宮跡の整備

1984年度に実施した平城宮跡の整備は、宮城東南隅部での南面大垣復原と南辺部外周縁隙帯整備、第二次大極殿門基壇等復原整備及び埴積基壇周辺整備などである。

南面大垣の復原等整備 南面大垣の復原建設は1981年度からはじまり、すでに朱雀門の東側と西側、及び西南隅の3カ所が完成している。今年度は東南隅を中心に復原整備し、これによって当初予定していた南面大垣4カ所の復原は一先ず完了したことになる。

宮東南隅は、第32次・同補足・第155次調査によって、大垣の位置や造構面の高さ、大垣と二条大路との関係などが明らかにされている。宮城のコーナーの表示という意味では南面と東面大垣を矩折れに復原するのが本来はあるが、宮内を横断する近鉄線や既存の農道や水路との問題等があって、結局東端を真剣より11.5m西寄りとせざるを得なかった。施工レベルは、宮城内整備面の原則としている造構面から0.8m上を基準としながら、周辺の現状高さをも勘案し、標高63.4mを基準地盤高とした。この結果各既設大垣との高低差は下表のようになる。西高東低の傾向はかわらないものの、大垣中央部分から西南隅までと東南隅までとの数値が異なるのは、宮設定時の勾配そのものを示すものと理解されよう。大垣の復原寸法、施工長さは既設の3カ所と同じく総高5.63m、基底幅2.7m、延長51.0mであり、その工法も従来と同様である。(位置図A)

西南隅	朱雀門西側	朱雀門東側	東南隅
67.3 (差1.3)	66.0 (差0.2)	65.8 (差2.4)	63.4 (標高 m)

今年度の整備地では、大垣の内(北)側で宮内を区画する築地塀や宮外への排水溝を確認している。そこで、築地塀は基底幅に凝灰岩切石を据え、その中にツゲの植栽を行って表示し、また排水溝は玉石緑石を並べて表示し、二条大路北側溝に接続した。今回復原した大垣は近鉄の軌道に非常に近接しており、危険防止の意味から軌道敷境界沿いに入止めのための植栽を行った。

外周縁隙帯整備 宮跡南辺の外周縁隙帯整備は東側を残すのみとなったが、今年度は南面大垣の復原が東端部であり、資材の搬入が宮跡中央を走る南北市道に頼らざるを得ないことなどから、復原大垣の東南部の約7,010m²を整備した。この地域は二条大路と東一坊大路の交差点であり、それらの両側溝及び橋が調査により確認されている。



平城宮整備位置図

大路及びその側溝表示は、昨年までと同仕様とした。なお現在の用水路は、一部流路の変更を行い、出来るだけ表示する側溝に重ねたが、復原表示と区別するためにコンクリートU形ブロックを使用し整備した。橋の造構は、その意匠構造とも明確でないところから、米松の太鼓落し材を並べ表示したが、現存の用水路との関係からその一部(幅5.2m×延長6m)を表示出来たに過ぎない。その他、二条大路南側溝の南側で確認されている築地跡及び建物跡1棟を盛土張りし表示した。(位置図B)

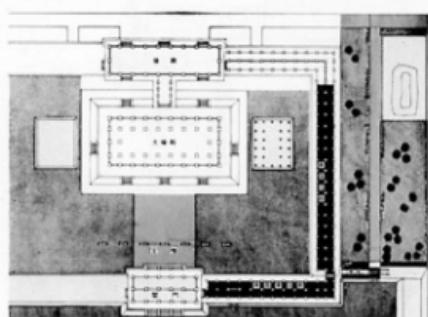
第二次大極殿回廊等復原整備 本年度は第152・153次発掘調査の成果を踏まえ、大極殿回廊、東面回廊、南面東回廊及びこれに続く朝堂院北面築地について基壇復原を実施した。さらに大極殿前庭部に宝幢等の柱を、大極殿の東西に桁行5間、梁行2間の両面廻廊立柱建物の跡を復原表示し、東棲等周辺の整備も行った。全体的な地形造成は造構の養生及び大極殿、後殿の整備計画高に合わせて平均65cm盛土し、この上に基壇等の復原整備を行った。

大極殿回廊は、桁行5間、梁行2間の壇上積基壇に建つ礎石建物である。北側雨落溝、南側基壇地覆石抜き取り痕跡、礎石の根石とその据え付け掘形などから基壇規模を決定した。造営単位尺は1尺あたり0.297mが最も近く、基壇規模は東西25.749m、南北13.604mで建物の柱間寸法は桁行、梁行とも4.455m(15尺)等間、従って東西側面の基壇の出は1.737m、正背面は2.347mとなる。基壇高は水平とし北側で0.94m、南側で1.854mに復原した。回廊には南北両面の中央3間と東西側面前方間に南面回廊へ降りる石階がとりついており、南面を7段、北面を4段、東西側面を2段に復原した。

回廊は、南面東回廊を棟通りで回廊脇を含めて12間、東面回廊は19間分を復原した。平城方位に対し、東面回廊は南で東に0°13'14"振れ、南面東回廊は東で南に0°08'13"振れがある。また、西から東へ約0.5%の下り勾配であるが、これは東南隅に排水するためであろう。南面の西から4間目では南側に石階の跡を検出しておらず、北面東回廊の扉口とも対応することから門の表示を行った。

朝堂院北面の築地は回廊東南隅より北に3間目の側柱位置から東へのびるが、6間分を表示した。5間目には親柱礎石2個をもつ棟門と南側に石階の跡が検出されており、親柱礎石と朝堂院の比高差約1mを考慮して、棟門とこれにとりつく4段の石階を復原した。築地の北側では回廊側溝の水を東へ排水する素掘りの溝が検出されており、これをシュタイン(セメント系固化剤)舗装の溝で表示し、門の北側には凝灰岩製の橋を渡した。

第二次大極殿院全体計画図



宝幢等の柱は、儀式に関連して設置さ

れた仮設の工作物であるが、大極殿や閻門と同時に比定され、大極殿前庭部で多数検出された仮設の工作物の中で、特にその性格が明確なものであり、閻門の北 8.91 m の位置に 7.2 m 間隔で 7 基を復原した。宝幢等の柱は、記録（文安御職調度図）によれば、本柱の高さ 3 大 (9 m) とあるが、周囲との調和をはかり 3 m とし、記録をもとに本柱を黒塗、脇柱・横木を朱塗で仕上げた。基壇上面は、閻門内部と築地層の部分を張芝で表示し、回廊内部をシェタイン舗装、軒下部分を凝灰岩切石敷とした。礎石は花崗岩切石で、閻門では方 0.9 m 径 0.66 m、回廊では方 0.74 m 径 0.50 m で柱座の作り出しのあるものを用いた。築地では親柱礎石を自然石、寄柱礎石には凝灰岩切石を用いている。また、大極殿東の両面廻掘立柱建物跡は盛土の上に張芝を行い、遺構の確認できた建物のみ柱位置を植栽で表示した。（位置図 C）

埠積基壇周辺整備 内裏の東側に、四隅を築地がめぐるいくつかの官衙ブロックがある。そのうちの一つに、建物の基壇や通路の舗装に埠を多用した特徴ある区画がある。この部分は遺構の遺存状況が非常によいところから、区画内の西北隅に位置する桁行 6 間、梁間 4 間の埠積基壇建物跡を、北半部は鉄骨の覆屋をかけて遺構を露出展示し、南半部は遺構直上に 1 m 余のレベルアップを施し現寸で基壇を復原し、あわせて柱の据付けも行い一般の見学に供している。

今回は、これに加えて四周の築地を一定長さ（3 間分、8.46 m）復原すると同時に、復原展示面積を 150 m² 拡張した。築地復原の主旨は、宮外周の大垣を含めて宮城内に延長 10 数 km にわたって存在したと考えられる各種築地のうち、もっとも一般的な官衙周囲の築地を再現することによって当時の築地築成に関する技法を究明するとともに、復原基壇と同一視野におさめて築地のもつボリュームを視覚的に認識しようとすることがある。したがって復原に際しては、使用する材料はもちろんのこと技術的にも古代そのままを再現するようにつとめた。

この場所での築地は、基底幅は 5 尺 (1.5 m) で寄柱はなく屋根は瓦葺であったことが発掘調査によって確認されている。そして、築地壁面から少しぬなれた位置に一定間隔に配られた柱穴があり、築地本体は、限板と添柱をもちいて築きあげていることもわかった。この方式は重要文化財指定の法隆寺の築地修復工事すでに実施しているのとほぼ同様と考えてよく、今回の築地復原にも法隆寺の先例がおおいに参考となった。

築地を築く場合、もっとも大きな要因をしめるのは築土の選定である。端的にいえば、粘土質が多ければよく固まりはするが乾燥収縮による危険が起る原因になるし、また逆に砂質がまさらば収縮変形は少ない反面固まりにくいということになる。法隆寺では築きなおし部分の築土は、古土と新土とを混合しているのとほぼ旧来どおりの仕上りが期待できるが、今回の場合はまったく新しい土を使うことになるから問題が多い。土の選定にあたっては、宮からあまり離らない地点を条件の基本にして数カ所の候補地を選び実地調査を行った結果、京都府相楽郡加茂町大畑背谷の真砂土採取場の表層に近い疊交り粘土質砂を採用した。参考のために法隆寺の築地古土と今回採用土との粒度特性を次表にあげる。

築地の築き上げは、限板 1 枚分 (幅 46 cm, 厚 6 cm, 長 4.0 m) に対し、1 回約 7 cm の厚さに 5

築上の粒度特性	礫分(2000 μm 以上)	砂分(74~2000 μm)	シルト分(5~74μm)	粘土分(5 μm 以下)
法隆寺古土	7%	47%	26%	20%
平城宮採用土	19%	43%	15%	23%

回築き重ね、順次上方へ繰り上げて桁上端まで総高 2.7 m の高さとした。実際の施工では築き固める際に板にかかる土圧が予想以上に強く、造構どおりの 1 間 2 本宛の添柱では到底もちこたえられず、ややもすると外に張り出す結果となった。そこで急拠添柱の本数を増し、かつボルト等をもちいて縦横に締めつける必要が生じた。このことは、当時の築き圧力が今回実施したものよりはるかに弱かったことを示すものとみられるが、「營造法式」や「延喜式」で算定している人工数が、今回実施した分の 7 分の 1 から 10 分の 1 と極端に少ないと関連しているはずである。築土の選定とともに今後の研究課題の一つといえよう。(位置図 D)

	(平城宮) 南面大垣復原等	外周綠陰帶	第二次大極殿開間 基壇等復原	埴生基壇周辺整備	(藤原宮) 南面西門等復原
規模	51m	7,010m ²	10,870m ²	840m ²	6,990m ²
工費(千円)	119,000	41,000	89,500	17,400	23,300

2 藤原宮跡の整備

1984年度の藤原宮跡の整備は、宮の西南隅で南面西門の一部と南面大垣、埴地及び外濠がかかる区域につき、第29—6次・第34次の発掘調査の成果により整備を行った。現況地形は東南から西北に下る約1%の平均勾配であるが、整備区域内を地区道路が2本南北に縱貫する計画があり、これとの調和をはかりつつ全体の勾配と造成高さを決定した。

南面西門は未発掘のため、位置と規模は明らかではない。そこで宮地割復原からその位置を算出して定め、藤原宮宮城門は同規模であると推定されることから、整備地の東端にかかる門の一部を凝灰岩切石による界線で表示した。南面大垣は西で南に $0^{\circ}48'07''$ 振れており、南面西門の西端から西南隅までの約 180 m を表示した。検出された遺構から、大垣は掘立柱解であったことは明らかであり、それが土壇に建つ構造であったと推定されるので、高さ 0.75 m の盛土で土壇を造成し、その法すそで軒の出を示した。また柱位置には 2.7 m 間隔でコウヤマキを植栽し、大垣の規模と構造を表わした。指定地北側の境界に近い所で現況地形との関係から大垣のすべてを表示できない部分では土壇のみ造成を行った。外濠は西で南に $0^{\circ}44'06''$ 振れおり、幅は 5.5 m、地区道路側溝へ排水する関係から深さ約 30 cm とした。底面は砂利埋込みで仕上げ、2 カ所に飛び石状の横断施設を設けた。付属施設の広場と苑路は、藤原宮中軸線幅の



藤原宮南面大廈の整備

振れを採用し、西で南に
0°26'30" 振って設計した。
広場は 200 m²、苑路は 2.4
m 幅で砂石敷とした。

(細見啓三・渡辺康史・内田昭人)

在外研修報告

1985年1月9日から2月24日まで47日間、文部省在外研究員としてインドおよびパキスタン・ネパールに出張した。インドではニューデリーの国立博物館を中心に、バナラシ(ベナレス)・バトナ周辺のサルナート、ナーランダ、ヴァイシャリー、ブッダガヤの仏教遺跡などを見学した。とくに、国立博物館のキーパー、ナラエン氏、キューレーターのシッキー氏らに見学の段取りや案内を含め種々御教示をいただいた。また、歴史建造物・遺跡の調査・修理・整備・管理に当る Archaeological Survey of India、建築の名門校 School of Planning and Architecture をも訪問した。パキスタン滞在は短期間であったが、タキシラを中心には仏教遺跡を観察した。タキシラ考古博物館にキューレーターのゲルザール氏を訪ね、ダルマラージカ、モハラモラドゥ、ジューリアンなどの遺跡のほか、ペシャワル東北方のガンドーラ寺院遺跡タフティーバヒー、ラワルヒンジ東郊の巨大なマニキャラスツーパなどを観察した。

インドの仏教寺院はスツーパ、僧院、チャイティヤ堂などからなる地上の寺院、多数の僧院窟とチャイティヤ窟からなる石窟寺院がある。ガンドーラの寺院は丘陵の上に立地し、スツーパと僧院を中心とし、多数の小スツーパ群や小祠堂が大スツーパを取巻くものがある。石窟寺院などに残された細部には遠く日本まで影響を与えたと見られるものが少なくない。9・10世紀頃のセンズー教寺院の装飾的細部に平安時代末の墓碑に用いられる脚内彫刻の源流と見られる形や中世の禅宗様に見られる細部と同系統のものが見られることも興味ある検討課題である。

インド・パキスタンの遺跡は広大で建造物の規模も大きく、見る者を圧倒するが、重要な遺跡は国の直轄管理下にあり、警備・清掃・草刈・補修などの日常管理は行き届き、遺跡の周辺に小考古博物館を付設するところが多い。

ネパールではカトマンズとバタン、バドガオンを急いで回っただけであったが、王宮や寺院は木造を基調とし、寺院の軒のおさまりはわが國の大仏様となぜか相通じるところが多い。インドの石彫技術を木に応用して一面に細かい彫刻を施す。とくに、各市ともその町並に歴史的な独特の景観をよく残す。これらは、世界的な文化遺産ということができる。デリー周辺にはながくインディスラム王朝の都があったから、イスラムの建造物・遺跡がとくに多い。ラールキラー、プラナキラーのような宮殿や城郭、クトップモスク、ジャーママスジットなどの巨大なモスクをはじめ、12世紀から17世紀にわたるインディスラム建築の発展と急速な衰退のあとがたどれる。スマユーン廟(1569)では発掘調査とともに門の修理を行っていたが、復原的な調査にも充分配慮されているようであった。また、足場をかけてクリーニングを行っていたところも多い。インドでは国や州の管理の行きとどかない文化財保護のため、ナショナルトラストが発足した。財政的な問題や今後の課題も少なくないようであるが、各国とも文化財保護に力をいれている。今回の出張では研究者その他多くの人に接し、実地に記念物を観察する機会を得、今後ともこの体験を生かし、とくに仏教建築の研究に役立てたいと思う。 (岡田英男)

公開講演会発表要旨

中世庶民の食器類 13～14世紀の中世前半の西日本を中心にして、当時一般に使われていた食器にはどんなものがあるのか、遺跡出土品と絵巻物に描かれた状況などを比較し、今後の中世食器類研究の問題点を探りたい。食器の種類・用途は、供膳具の椀・杯・皿、調理具の擂鉢・こね鉢、煮沸具の鍋・釜、貯蔵具の壺・甕が基本である。これらはその材質・形態などをみると大きな地域性があり、またその中の変遷がある。このうち問題となるのは、供膳具では漆器の普及状況、調理具では軟質焼成の擂鉢の盛行、煮沸具では石鍋や三脚付鍋・釜の分布などの点についてである。このような食器の様相は当時の政治・経済的背景と関連するものであり、中世食器類の地域性と変遷については今後とも詳細な研究が必要である。 (安田龍太郎)

年輪から年代を読む 1980年以来、中部および近畿地方産の現生木と、7、8世紀に属する飛鳥・藤原、平城の古代都市遺跡出土木材、古建築用材、その他を資料として、年輪年代学の研究を実施してきた。現生木による検討の結果から、従来の通説に反して、我が国でも少なくともヒノキ、コウヤマキ材を用いれば年輪年代学が充分に可能であることを実証した。すでに、現生木(主に木曾ヒノキ)で作成した標準年輪曲線は現在から1693年まで完成している。さらに、遺跡出土木材(主に平城宮跡出土の柱根類)を用いて、ヒノキ材で637年分、コウヤマキ材で610年分の標準となる年輪曲線を作成した。これら2種類の年輪曲線を使って遺跡出土材や古建築部材とのクロスデーティングにも成功し、成果を得ている。 (光谷拓実)

古代仏殿のイメージ—金堂の原形を求めて— 山田寺金堂が発掘された時、その平面は古代建築の常識を破るものと評価された。しかし、三重・夏見廃寺、滋賀・穴太廃寺両金堂の発掘成果がこれに等しく加わった現在、もはやこれらは異端ではなく、我が国では7世紀を下限とする金堂建築の古形式に属するものと考えたい。今は失われたもうひとつの金堂建築のイメージを喚起するため、その原形を特に中国の仏殿の図像や小建築にたずね、その表現の建築的意味を検討し、その古式たる所以を明らかにした。この形式を前提として、はじめて法隆寺金堂が金堂の発展過程のなかで占める位置や、玉虫厨子の建築的表現の意味が明らかになり、それが、ひいてはいわゆる飛鳥様式の解明にも寄与することであろう。 (松本修自)

日本古代の冠帽 まず、中国においては、歴代の王朝が服飾制度を完備し、身分・官職に応じた冠の着用を定めていたことを示した。また、朝鮮半島においては、新羅統一後の648年に唐に倣った冠位制度の導入をみるが、すでに三国時代高句麗・百濟では4世紀代に、次いで新羅では5世紀代に、中国とは異なる独自の冠位制度を採用していたことを中国正史の記載や考古資料から推定した。一方、日本においては、5・6世紀の各地の古墳からこれまでに30余例の金銅製冠帽が出土しており、推古11年(603)の冠位十二階の制定に先立って冠位制度の存在したことが想定されるが、冠帽の形態には中国・半島三国のように規格性がないことから“大和朝廷”による地方豪族の組織化は未だ不十分であったことを推測した。 (毛利光俊彦)

調査研究彙報

建造物研究室

春日大社末指定建造物の調査 春日顯彰会より国指定重要文化財建造物以外の抵社、末社および移殿についての調査依頼を受け、奈良県文化財保存事務所と共同で調査を実施した。調査対象は榎本・三十八所・紀伊・萩戸・水谷・金龍神社の社殿で、それらについての実測・写真撮影を行った。また、社蔵文書のうち造営関係文書の目録と写真複製を作成した。次年度に移殿の分布調査と報告書刊行の予定である。

(宮本)

金剛輪寺庭園の実測調査 滋賀県教育委員会の依頼をうけて、近江八幡市に所在する金剛輪寺明壽院庭園の実測を行った。面積 8,400 m²。100分の1の図面作成。^{'85年3月。}

(安原・田中・高瀬・光谷・内田)

歴史研究室

興福寺典籍古文書の調査 昨年度にひきつづき、同寺所蔵の古文書・聖教函のうち第64・69・70・72・73函の調書作成をすすめ、同時に第3函にたちもどって調書の点検を行いつつ興福寺文書典籍書目録の原稿を作成した。調査は5, 6, 9, 10, 11月、1985年2月の計6回にわたって行った。

(鬼頭、他)

法隆寺典籍古文書の調査 昭和資財帳作成の一環として記録古文書の調査を、奈良国立博物館と共同で行った。今年度は甲1函から乙6函までの調書作成および写真撮影を終了した。内容は室町時代の記録から江戸時代の文書類を含んでおり、法隆寺の歴史を明らかにするうえで貴重であることがわかった。

(鬼頭、他)

法隆寺百万塔陀羅尼の調査 陀羅尼經3,000余点のうち、一応1,800点について、経典及び版式による分類、法量等の調査を終了した。なお、1984年度末に陀羅尼經2,000点ほどが、あらたに発見されたので、その追加分についても調査をはじめた。あわせて、マイクロフィルムによる台帳登録、写真撮影を行った。

(鬼頭、他)

藥師寺典籍古文書の調査 東京大学史料編纂所との第5回共同調査である。前回にひきつづき、第10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 19, 20函について調査を行い、うち第10, 15, 17, 19函は調書作成を完了した。また第13, 15, 20函について写真撮影を行った。内容は近世文書を中心である。^{'84年7月。}

(鬼頭・綾村・佐藤・寺崎)

仁和寺典籍古文書の調査 従来の調査にひきつづいて、御經藏第151函および江戸時代の記録類(仁和寺日記・年貢納帳・執達所日記・諸通帳等)の調書作成を行った。^{'85年3月。}

(鬼頭・加藤・綾村・佐藤・寺崎)

その他の調査 石山寺(7~8月、12月)(加藤・綾村・佐藤)、醍醐寺(8月)(鬼頭・綾村)、東京大学史料編纂所島津家文書の調査を行った。

平城宮跡発掘調査部

神野向遺跡の発掘調査 常陸國鹿島郡衙推定地の第4次調査である。今回は倉院の北東約100mで、郡庁正殿と前殿、及びこれを囲む回廊・柵を検出した。大きさは3回の建替えがある。開始時期は8世紀、廃絶時期は10世紀後半と考えられる。郡庁域の規模は東西約53m、南北51~52mである。茨城県鹿島町所在。^{'84年9月~'85年3月。} (毛利光・松村)

横瀧山廃寺の発掘調査(第4次) 第3次調査で発見した建物の全体像を把握するために、今回は台地中央部で発掘調査を行った。東西約12m、南北約10mの金堂と推定される仏堂基壇を確認した。基壇の外装は木造で、四辺ともにその痕跡をのこしていた。新潟県寺泊町所在。^{'84年8月。} (上野)

彦根城二の丸御殿跡の発掘調査 昨年度に続いて滋賀県彦根市教育委員会が実施した彦根市博物館建設のための事前発掘調査を指導した。予定地は国の特別史跡に指定されているため、博物館は二の丸御殿の復原を主眼に構想され、ほぼ敷地全域の調査を行なって、元和年間創立以来の御殿の全容が明らかとなった。遺構の保存状況は良好でとくに池庭は石組みが残存し、移築現存する能舞台の旧位置も明らかになり、復原する予定である。工事は地下遺構に影響のない工法を探り盛土整地のうえ、1984年11月より着工。^(宮本)

横須賀城跡の整備基本計画作成 静岡県大須賀町の依頼により横須賀城跡の整備基本計画書を作成した。計画はまず廃城時における城の地割りを復原する作業を行い、これをもとに現況をふまえながら整備のあり方を考えた。**『史跡・横須賀城跡(復原と環境整備のための基本計画)』**として報告書作成。^{'84年4月~'85年3月。} (田中・高瀬・本中)

史跡篠山城二の丸の発掘調査・整備計画指導 篠山城二の丸は1981年度から発掘調査を続いているが、1984年度は南端部の発掘調査を行い、内向きの御殿とともにう庭園築山・堀・溝などを検出し、二の丸のほぼ全域の調査を終了した。発掘調査とともにその成果と古図などにもとづき、二の丸保存整備の基本計画の作成を指導した。兵庫県篠山町所在。^(岡田・安原・田中)

宝塚古墳環境整備 三重県松阪市教育委員会の依頼により、国指定史跡宝塚古墳の環境整備基本計画の指導を行った。全域が未調査であるため、現状には手を加えず、埴丘の形状を視覚的に捕えることができるよう樹林の疎林状抜開を主眼とし、若干の盛土整形と園路、便益施設の敷設を計画案に盛りこんだ。次年度は基本計画の指導に入る予定。^(田中・本中)

建物復原に際しての材料工法の検討 平城宮跡整備の一方法として大規模建築(例えば朱雀門)を復原建設しようとした場合の材料と工法に関わる問題を文化庁の依頼を受けて1980年度以降検討を加えてきた。本年度はおもに重層建築における下層軸部の補強と遺跡保護と建物の軽量化をはかるための基礎工法との二点につき検討した。^(細見)

ユッカ・ヨキレート氏の招請 1984年11月にユッカ・ヨキレート氏を学術振興会の援助を得て招請した。氏は、ICCROM(ローマ文化財修復国際センター)で建造物保存・修復コースの主任を務めている。今回は初めての来日で20日間滞在し、その間日本の歴史的建造物や町並を訪ね、そ

の保存についてヨーロッパでの事例を比較して、相異点を指摘した。日本の今後の文化財保存について多くの示唆を得た。

(上野)

埋蔵文化財センター

青谷遺跡の発掘調査 東西 20.9 m, 南北 12.9 m の基壇規模を有する東西棟建物、この北と西側に L 字形に配された廊状の礎石建物 2 棟、中心殿舎と廊状建物とを結ぶ疊敷舗道・築地状施設、掘立柱建物などを検出した。礎石建物はいずれも瓦葺きで、軒瓦の大半は河内国分寺と同様である。中心殿舎とみられる東西棟礎石建物の雨落溝の側壁には埠を使用している。この遺跡は從来、寺跡とされていたが、建物配置や変遷などの状況から、「竹原井行宮」説も有力である。大阪府柏原市所在。^{'84年9月～10月。}

(山本・山中)

松本城二の丸跡の整備 1979年から継続してきたこの事業も 6 年目の今年度で全てを終了した。発掘調査の成果と古図から復原した御殿跡の復原的整備、濠側の石垣・土坡の修理と復原、明治時代に濠を埋めて造った旧裁判所前の土橋撤去、唯一の江戸時代遺構である土蔵の修理などが終った。調査整備一体の報告書も刊行され、城郭跡保存整備の見本を示すことになった。長野県松本市所在。

(安原・宮本)

森将军塚古墳の整備 今年度は葺石復原の実施設計の最終検討を終え、1980年事業開始以来 5 年目にしてようやく墳丘復原工事の着工をみた。墳丘（特に後円部）の平面がいびつなため、設計が難航し、現場の造方で補正しながら後円部東側の一部の葺石復原が施工された。長野県更埴市所在。

(安原・木下)

故山内清男博士収集資料の整理 1970年に逝去された博士の収集資料のうち、茨城県那珂湊市海門町 1-5、菊地氏宅に保管されていた土器・石器などの考古資料、ならびに図書・雑誌・地形図などの文献資料を、御遺族の承諾に基づき、1984年 5 月 24・25 の両日、本庁舎 3 階大会議室に移動した。考古資料はリンゴ函 393 個、木製平箱 1,052 個、ダンボール函 20 個にあり、文献資料は、木製キャビネット 32 個、地図ケース 4 個、ダンボール函 3 個に詰められていた。到着後、考古資料は具体的な整理作業に入る前の状況写真を、ライカ版 2,600 コマに撮影し、文献資料は、84年度末までに、図書 3,503 冊（和漢書 2,944 冊、欧文書 599 冊）の分類整理を行った。なお、センター研修用実測資料として、石器の一部を活用した。

(松沢・岩本次)

奈良国立文化財研究所要項

I 事業概要

1 研究普及事業

公開講演会

- (1) 1984年5月19日 第55回公開講演会
「中世庶民の食器類」 安田龍太郎
「年輪から年代を読みむ」 光谷 拓実
- (2) 1984年11月17日 第56回公開講演会
「古代仏殿のイメージ—金堂の原形をもとめて—」 松本 修自
「日本古代の冠帽」 毛利光後彦
- 現地説明会
- (1) 1984年5月26日 平城宮跡第155次発掘調査
(南面大垣東端地区) 山崎 信二
- (2) 1984年6月23日 藤原宮跡第41次発掘調査
(東方官衙地区) 加藤 優
- (3) 1984年8月25日 平城宮跡第157次発掘調査
(第一次朝堂院東南隅地区) 松本 修自
- (4) 1984年10月6日 平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査
毛利光後彦
花谷 浩

- (5) 1984年10月13日 山田寺跡(第6次)東回廊発掘調査現地見学会

- (6) 1984年12月1日 石神遺跡第4次発掘調査 川越 俊一
- (7) 1984年12月8日 平城宮跡第161次発掘調査
(第二次朝堂院東第一堂) 山岸 常人
- (8) 1985年2月16日 藤原宮跡第44次発掘調査
(東方官衙地区) 田辺 征夫
- (9) 1985年3月9日 平城宮跡第163次発掘調査
(第二次朝堂院朝庭北東域) 異 淳一郎

平城宮跡資料館・覆屋公開

- (1) 春季特別公開 1984年4月21日～5月6日
見学者 14,085名
- 秋季特別公開 1984年10月12日～11月11日
見学者 22,035名

(2) 見学者数

区分	資料館	覆屋	計
1984年	73,916	45,177	119,093
累計	647,536	972,306	1,619,842

資料館は1970年度、覆屋は1968年度以降の累計

2 1984年文部省科学研究費補助金による研究

種別	研究課題	研究代表者	交付額
一般研究 A	大和における古代豪族の支配の領域についての復原的研究	鬼頭 謙明	8,300千円
一般研究 B	古代理壁建築遺材の復原的研究	宮本長二郎	600
タ	古代における水産物の生産と使用に関する研究	狩野 久	400
タ	古代武具の研究	猪熊 素勝	2,600
タ	中世近世における建物修理の技法に関する研究	岡田 英男	1,500
タ	古代水時計発達史の研究	木下 正史	5,000
一般研究 C	食器の中世化に関する基礎的研究	川越 俊一	1,100
タ	年輪年代法の遺跡への応用—弘法樹跡・草戸千軒町遺跡を例として—	光谷 拓実	1,200
奨励研究 A	様式化石室構造の地域別比較研究—中・四国編—	山崎 信二	800
タ	鉢帶具の集成的研究	松村 忠司	700
タ	中世佛堂の成立と発展過程の研究	山岸 常人	800
特定研究 (I)	山田寺を中心とする出土木材の保存法の改良と考古学的建築史学的研究	坪井 謙足	3,000
研究成果刊行費 (データベース)	航空写真情報	坪井 謙足	6,870
計	13件		32,870

3 飛鳥資料館の運営

展示

第一展示室 常設展示

第二展示室 特別展示「小建築の世界」

(1984. 4. 18～1984. 5. 27)

特別展示「藤原宮発掘五十年」

(1984. 10. 3 ~ 1984. 12. 2)

普 及

前年同様インフォメーションルームで観覧者の質問に応じている。また、特別展示の図録として「小建築の世界」及び「藤原宮」を刊行した。

入館者数 (1984. 4. 1 ~ 1985. 3. 31 開館日数 315日)

	普通観覧	団体観覧	有 料	無 料	合 計
一 般	49,503	24,506			
高・大生	14,697	27,569			
小・中生	16,805	67,915	200,995	10,072	211,069
計	81,005	119,990			

模作製作

藤原宮(西面中門)出土唐居敷

定林寺出土露盤石

金剛三尊押出仏(柳原市一町庵長法寺)

陳列品購入

川原寺礎石

寄 贈

飛鳥古京復原模型(縮尺1/1,000)

4 球藏文化財センターの研修・指導

研 修 球藏文化財の保護に資することを目的として主に地方公共団体の球藏文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

- (1) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者特別研修(石器調査課程)
1984年4月26日~4月28日(参加者22名)
- (2) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者専門研修(遺跡測量課程)

1984年5月10日~5月31日(参加者17名)

- (3) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者専門研修(中近世遺跡調査課程)
- (4) 昭和59年度球藏文化財担当事務職員特別研修(球藏文化財基礎課程)
- (5) 1984年7月5日~7月11日(参加者37名)
- (6) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者一般研修(一般課程)
- (7) 1984年7月24日~8月25日(参加者24名)
- (8) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者専門研修(遺跡保存整備課程)
- (9) 1984年9月18日~10月4日(参加者24名)
- (10) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者専門研修(保存科学課程)
- (11) 1984年10月23日~11月8日(参加者16名)
- (12) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者専門研修(発掘調査実地技術課程)
- (13) 1984年11月27日~12月12日(参加者23名)
- (14) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者専門研修(環境考古課程)
- (15) 1985年1月17日~2月2日(参加者17名)
- (16) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者特別研修(繩紋施紋法調査課程)
- (17) 1985年2月14日~2月16日(参加者30名)
- (18) 昭和59年度球藏文化財発掘技術者専門研修(球藏文化財情報課程)
- (19) 1985年3月5日~3月14日(参加者27名)
- (20) 研修員受入れ(下記一覧表)

研 修 員 一 覧 表

氏 名	所 属	受入れ期間	受入れ室	研修指導内容
進 藤 敏 一	昭和59年度私学研修福会国内研修員(茨城高等学学校教諭)	1984. 4. 1 ~ 7. 31	飛鳥藤原宮跡発掘調査部	発掘及び測量技術
松 尾 忠 幸	香川県四分寺町教育委員会	1984. 4. 20 ~ 5. 9	集落道路研究室	球藏文化財の発掘調査技術
酒 江 忠 美	岩手県盛岡市教委公園緑地課 課長補佐	1984. 5. 29	測量研究室	石垣の測量について
白 枝 敬 介	* 建設係長	1984. 6. 18	考古計画研究室	線刻確認の調査
内 脊 宗 光	* 文化係長	1984. 7. 1 ~ 9. 30	平城宮跡発掘調査部	球藏文化財の発掘調査技術
木 崎 康 弘	熊本県教育厅文化課技術 三重県教委外研修生(度会郡大内山村立中学校教諭)	1984. 7. 2 ~ 7. 9	考古計画研究室	石器製作研修
河 北 秀 実	* (県立白山高等学校教諭)	1984. 8. 13 ~ 8. 17	* 静岡県御殿場市教委社会教育課主事	線刻確認・保存処理
服 部 久 士	山梨県球藏文化財センター貯蔵 古博物館文化財主事			
小 林 広 和				
間 野 哲 雄				

宮田勝功	三重県教委組外研修生 (名張市立北中学校教諭)	1984. 9. 1~11.30	飛鳥藤原宮跡発掘調査部	埋蔵文化財の発掘調査技術
浅尾悟	(龜山市立龜山中学校教諭)			
尹根一	大韓民国文化財管理局文化財研究所美術工芸研究室学芸研究士	1984. 10. 1~ 1985. 3. 30	平城宮跡発掘調査部	発掘調査技術
浜石哲也	福岡市埋蔵文化財センター技術 吏員	1984. 11. 9~11.15	遺物処理研究室	保存科学処理
赤池英男	岩手県立博物館学芸調査員	1984. 11. 27~11.29	*	*

発掘調査・整備・探査指導

(北海道) 茅小牧、登別地域遺跡、開陽丸遺跡、木古内町新道4遺跡、美利河1遺跡、(岩手県) 毛越寺庭園、盛岡城跡、(宮城県) 多賀城跡、岩切城跡、仙台城ノ丸跡、(福島県) 豊日寺跡、関和久上町遺跡、(茨城県) 神野向遺跡、(群馬県) 上野国分寺跡、(千葉県) 大網山田台No.3遺跡、(神奈川県) 瑞泉寺庭園、(新潟県) 横瀬山廃寺跡、(富山県) ジュウベのま遺跡、安田城跡、(石川県) 湯屋古窯跡群、孤山古墳、(滋賀県) 囲津製塙跡、朝倉氏遺跡、(長野県) 松本城二の丸庭園、森得軍塚古墳、信濃国分寺跡、(岐阜県) 橿田信長居館跡、(静岡県) 横須賀城跡、勝間田城跡、(愛知県) 尾張国府跡、下津城跡、市道遺跡、(三重県) 宝塚古墳、草山遺跡、笠生田辻垣内瓦窯跡、斎宮跡、(滋賀県) 彦根城跡内表御殿跡、穴太遺跡、延暦寺東塔遺跡、琵琶湖奥湖尾上湖底遺跡、金剛輪寺明寿院庭園、(京都府) 御堂ヶ池古墳、蛭子山古墳、丹波国分寺跡、栗柄野瓦窯跡、慈照寺(御開寺) 庭園、大慈寺跡、物集女車塚古墳、高麗寺跡、(大阪府) 海会寺遺跡、難波宮跡、青谷廃寺、(兵庫県) 丹波国大山莊、丸山塚古墳、西後明窓跡群、赤穂城本丸、中山莊一号墳、七日市遺跡、三田市No.14地点遺跡、五色塚古墳、小畠古墳、(奈良県) 新沢千塚古墳群、飛鳥水落遺跡、(和歌山県) 尾ノ崎遺跡、田屋遺跡、西田井遺跡、(鳥取県) 鳥取城跡附太閤ケ平、上神猫山遺跡、(鳥取県) 朝日たたら遺構、岡田山古墳、荒神谷遺跡、大念寺古墳、教吳寺跡、山代郷正倉跡、(広島県) 草戸千軒町遺跡、尾市古墳、(山口県) 若宮古墳、土井ヶ浜遺跡、延行条里遺跡、功山寺仏殿地下遺構、(徳島県) 丸山山麓窯跡遺跡、(香川県) 鶴岐国分寺跡、(愛媛県) 松山城二之丸跡、(高知県) 土佐国府跡、(福岡県) 太宰府跡、王塚古墳、金殿遺跡、愛宕遺跡、菜園場窯跡、(佐賀県) 肥前国府跡、物座遺跡、名護屋城並びに陣屋、寺浦瓦窯跡、筑後川下流域遺跡、(長崎県) 出島和蘭商館跡、(熊本県)

江田船山古墳、神水遺跡、塚原古墳群、(大分県)
豊後國分寺跡、ガランドヤ古墳、(宮崎県) 蓼ヶ池横穴群、宮崎学園都市遺跡、(鹿児島県) 指宿橋牟礼川遺物包蔵地、薩摩國分寺跡、(沖縄県) 今帰仁城跡

埋蔵文化財ニュース刊行

- 第47号 埋蔵文化財関係調査報告書一覧
第48号 行政データ・埋蔵文化財関係記事一覧
第49号 漆製品出土遺跡分布図一東日本福一
第50号 遺跡整理関連文献目録
埋蔵文化財ニュース目録 No. 1~No. 50

5 その他

委員会等

第11回飛鳥資料館運営協議会

1984年5月11日 於飛鳥資料館
平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

1984年6月15日・16日 於平城宮跡資料館講堂
保存科学研究集会

1984年3月19日・20日 於平城宮跡資料館講堂
外国出張

佐藤興治 文化財発掘に関する比較研究と意見交換のため大韓民国へ出張

1984年10月29日~同年11月18日

岡田英男 文部在外研究員として古代寺院建築に対するインド芸術の影響の調査研究のためインド・パキスタン・ネパールへ出張

1985年1月9日~同年2月24日

協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度から当研究所が文化庁から支出委託を受けて買収業務を担当しているが、1984年度の状況は下記のとおりである。

区分	面積	金額
1984年度	14,967.22m ²	321,838,901円
国有地合計	285,748.24	5,919,924,098

II 図書及び資料

図書 81,249冊

区分	種別	購入	寄贈	計
84年度	和漢書	4,013	3,714	7,727
	洋書	769	35	804
累計	和漢書	38,974	36,654	75,628
	洋書	4,891	730	5,621

写真 291,671点 (1984年度末現在)

III 研究成果刊行物

1 1984年度刊行物

名 称	
学報	第41冊 研究論集Ⅳ 第42冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ 第43冊 日本における近世民家(農家)の系統的発展
史料	第27冊 木造里成図録—近畿古代篇—
図録	第13冊 藤原宮半世紀にわたる調査と研究
報告書等	昭和58年度平城宮発掘調査部発掘調査概報 飛鳥・藤原宮発掘調査概報14 平城宮発掘調査出土木簡概報17 道路整備資料Ⅳ(城館跡・防塁) 奈良町(II)(奈良町東地区)一昭和58年度伝統的建造物群保存対策調査報告書— 条里制の諸問題Ⅲ—条里制研究会記録3— 平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告 平城京右京一条北四坊六坪発掘調査報告 平城京左京四条二坊十五坪発掘調査報告—田村推定地の調査— 平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告

2 前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名 称
1954	第1冊 仏師連慶の研究
	第2冊 修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊 文史論叢
1956	第4冊 奈良時代僧房の研究
1957	第5冊 飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊 中世庭園文化史
	第7冊 興福寺食堂発掘調査報告
1959	第8冊 文化史論叢Ⅱ
	第9冊 川原寺発掘調査報告
1960	第10冊 平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告
1961	第11冊 院家建築の研究
1962	第12冊 新近阿弥陀仏像
	第13冊 寝殿造系庭園の立地的研究
	第14冊 レースと金龜舍利塔に関する研究
	第15冊 平城宮発掘調査報告Ⅱ 官衙地域の調査
1963	第16冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ 内裏地域の調査

1965	第17冊 平城宮発掘調査報告Ⅳ 官衙地域の調査
	第18冊 小城遺跡の作事
1967	第19冊 藤原氏の氏寺とその院家
	第20冊 名物製の成立
1971	第21冊 研究論集Ⅰ
1973	第22冊 研究論集Ⅱ
1974	第23冊 平城宮発掘調査報告Ⅴ 平城京左京一条三坊の調査
	第24冊 高山一町並調査報告一
1975	第25冊 平城京左京三条二坊
	第26冊 平城宮発掘調査報告Ⅵ
	第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ
	第28冊 研究論集Ⅲ
	第29冊 木曾奈良井一町並調査報告一
1976	第30冊 五条一町並調査の記録一
1977	第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ
	第32冊 研究論集Ⅳ
	第33冊 イタリア中部の一山岳里落における民家調査報告
	第34冊 平城宮発掘調査報告Ⅴ
1978	第35冊 研究論集Ⅴ
	第36冊 平城宮整備調査報告Ⅰ
1979	第37冊 飞鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ
	第38冊 研究論集Ⅵ
1980	第39冊 平城宮発掘調査報告Ⅳ
1981	第40冊 平城宮発掘調査報告Ⅴ

奈良国立文化財研究所史料

年度	名 称
1954	第1冊 南無阿彌陀仏作坐像(複製)
1955	第2冊 西天寺般舟伝記集成
1963	第3冊 仁和寺史料 等誌編Ⅰ
1964	第4冊 俊乗坊重源史料集成
1966	第5冊 平城宮木簡 I 國版
1967	第6冊 仁和寺史料 等誌編Ⅱ
1969	第5冊 平城宮木簡 I 解説(別冊)
1970	第7冊 店招提寺史料 I
1974	第8冊 平城宮木簡 2 國版・解説
	第9冊 日本美術院彌刻等修理記録Ⅰ
1975	第10冊 日本美術院彌刻等修理記録Ⅱ
1976	第11冊 日本美術院彌刻等修理記録Ⅲ
1977	第12冊 藤原宮木簡 1 國版・解説
	第13冊 日本美術院彌刻等修理記録Ⅳ
1978	第14冊 日本美術院彌刻等修理記録Ⅴ
	第15冊 東大寺文書目録第1巻
1979	第16冊 日本美術院彌刻等修理記録Ⅵ
	第17冊 平城宮木簡 3 國版・解説
	第18冊 藤原宮木簡 2 國版・解説
	第19冊 東大寺文書目録第2巻
1980	第20冊 日本美術院彌刻等修理記録Ⅶ
	第21冊 東大寺文書目録第3巻
1981	第22冊 七天寺巡礼私記
	第23冊 東大寺文書目録第4巻
1982	第24冊 東大寺文書目録第5巻
	第25冊 平城宮出土墨書き土器集成Ⅰ
1983	第26冊 東大寺文書目録第6巻

奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名 称
1973	第1冊 瓦編1 解説
1974	第2冊 瓦編2 解説
1975	第3冊 瓦編3
1976	第4冊 瓦編4
	第5冊 瓦編5
1978	第6冊 瓦編6
1979	第7冊 瓦編7
1980	第8冊 瓦編8
1983	第9冊 瓦編9

飛鳥資料館図録

年度	名 称
1976	第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏
	第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇
1977	第3冊 日本古代の墓誌
1978	第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇
	第5冊 古代の誕生仏
1979	第6冊 飛鳥時代の吉墳—高松塚とその周辺—
1980	第7冊 日本古代の鶴尾
1981	第8冊 山田寺展
1982	第9冊 高松塚治年
1983	第10冊 渡来人の寺—柏原寺と坂田寺—
	第11冊 飛鳥の水時計
	第12冊 小笠原の世界—埴輪から瓦塔まで—

IV 定 員

区分	指定職	行政職(→行政職)	研究職	計
1984年度	1	22	4	67
1985年度	1	22	4	66

V 予 算 (1984年度)

人 件 費	489,289千円
御 賞 費	666,789
事 業 管 理	4,478
一 般 研 究	55,916
特 別 研 究	1,602
発 揃 調 査	432,694
宮 跡 整 理 管 理	53,734
飛 鳥 資 料 館 運 営	46,521
理 球 文 化 財 セン ター 運 営	42,006
新 宁 古 墓 等 管 理 等 経 費	29,838
施 設 費	960,442
施 設 整 備 費	39,118
平 城 宮 跡 等 整 備 費	305,348
不 動 產 購 入 費	600,000
各 所 修 積 費	15,976
計	2,116,523

VI 施 設

土 地

奈良国立文化財研究所所管	27,375 m ²
本 庁 舎	8,860 m ²
飛 鳥 資 料 館	17,092 m ²
郡 山 宿 舎	80 m ²
飛 鳥 資 料 館 宿 舎	1,343 m ²
文化庁所管(関係分)	1,347,764 m ²
平 城 宫 跡 地 区	1,056,975 m ²
藤 原 宫 跡 地 区	285,748 m ²
飛 鳥 稲 堀 宫 跡 地 区	5,041 m ²

建 物

1. 庁 舎	23,293 m ²
--------	-----------------------

区 分	本 庁 舎	平 城	藤 原	飛 鳥	藤 原	宮 跡	計
							m ²
事 務 室	568	138	116	90			912
研 究 室	1,419	252	274	77			2,022
資料・図書室	1,021		36	36			1,093
会 議 室	338	64	53	42			497
講 堂		384		89			473
展 示 室		576		648			1,224
写 真 室	79	236	145	64			544
覆 屋・展示棧		1,686					1,686
車 庫	84	200	188	94			566
倉庫・収蔵庫	123	4,945	2,087	480			7,635
研 究 植	1,416						1,416
そ の 他	1,745	2,131	251	1,062			36,522
計	6,793	10,632	3,150	2,682			36,23,293

2. 宿舎等	591 m ²
重 要 文 化 財 旧 米 谷 家 住 宅	213 m ²
郡 山 宿 舎 (→, □)	153 m ²
飛 鳥 資 料 館 宿 舎	225 m ²

主要工事

(1) 施設整備費	千円
飛鳥藤原宮跡発掘調査部写場棟改築工事	4,700
奈良国立文化財研究所第3回覆屋改修工事	34,000
(2) 平城宮跡地等整備費	
平城宮跡環境整備昭和59年度第I期工事	89,500
平城宮跡環境整備昭和59年度第II期工事	41,000
平城宮南面大垣復原その4工事	119,000
埴基墳周辺整備工事	17,400
藤原宮跡環境整備昭和59年度工事	23,300
(3) 各所修繕	
平城宮跡資料館屋根塗装工事	9,490

Ⅲ 人事異動

(1984年4月1日～1985年3月31日)

4月1日	飛鳥藤原宮跡発掘調査部構造調査室長に昇任	村上 誠一 飛鳥資料館庶務室長に昇任	日高 参夫 庶務部会計課課長補佐に昇任	藤本 遼 奈良工業高等専門学校庶務課長に転任	中尾 重徳 京都大学農学部事務長補佐に転任	広沢 常一 平城宮跡発掘調査部主任研究官に転任	細見 啓三 平城宮跡発掘調査部構造調査室に配置換	松本 修自 平城宮跡発掘調査部考古第一調査室に配置換	岩永 省三 平城宮跡発掘調査部考古第三調査室に配置換	杉山 洋 飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室に配置換	清水 真一 飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室に配置換	大脇 謙 飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室に配置換	立木 修 飛鳥資料館学芸室に配置換	井上 和人 埋蔵文化財センター研究指導部発掘技術研究室に配置換	松井 章 埋蔵文化財センター研究指導部測量研究室に配置換	光谷 拓実 埋蔵文化財センター研究指導部保存工学研究室に配置換	内田 昭人 飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に採用	田辺 征夫 平城宮跡発掘調査部考古第一調査室に採用	花谷 浩 研究補佐員(飛鳥藤原宮跡発掘調査部)に採用	納谷 守幸 高野 学	6月21日	事務補佐員(庶務部庶務課)に採用	福本 良子	7月1日	飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に	昇任	安田龍太郎 平城宮跡発掘調査部史料調査室長に採用	綾村 宏 10月20日 辞職	瀧本 正志 2月1日 庶務部会計課長に昇任	赤羽 鍾一 東京国立文化財研究所庶務課長に転任	鶴山 保美 庶務部庶務課長に配置換	松本 保之 3月31日 辞職	泉 雄二
------	----------------------	-----------------------	------------------------	---------------------------	--------------------------	----------------------------	-----------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	------------------------------	----------------------	------------------------------------	---------------------------------	------------------------------------	------------------------------	------------------------------	-------------------------------	---------------	-------	------------------	-------	------	-------------------	----	-----------------------------	-------------------	--------------------------	----------------------------	----------------------	-------------------	------

Ⅳ 組織規定

文部省組織令 抜粋

昭和59年政令第127号
昭和59年7月1日全部改正

第108条

2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立文化財研究所(前後略)

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

文部省設置法施行規則 抜粋

昭和28年1月13日文部省令第2号

追加昭和43年6月15日文部省令第20号

昭和45年4月17日文部省令第11号

昭和45年4月12日文部省令第6号

昭和49年4月11日文部省令第10号

昭和50年4月2日文部省令第13号

昭和51年5月10日文部省令第16号

昭和52年4月18日文部省令第10号

昭和53年4月5日文部省令第19号

昭和53年9月9日文部省令第33号

昭和55年4月5日文部省令第14号

昭和55年6月25日文部省令第23号

昭和58年10月1日文部省令第25号

昭和59年7月1日文部省令第37号

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置

は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第2款 奈良国立文化財研究所

(所長)

第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は所務を掌理する。

(内部組織)

第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2 前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に、飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

(庶務部の分課及び事務)

第125条 庶務部に、次の二課を置く。

一 庶務課

二 会計課

2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

一 職員の人事に関する事務を処理すること。
二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の接受及び公印の管掌その他庶務に関する事務。

四 この研究所の所掌事務に關し、連絡調整すること。

五 この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関する事務。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

3 会計課においては、次の事務をつかさどる。

一 予算に関する事務を処理すること。
二 経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四 厅舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。

五 厅内の取締りに関する事務。

(建造物研究室等の事務)

第127条 建造物研究室においては、建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い、並び

にその結果の公表を行う。

2 歴史研究室においては、考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(平城宮跡発掘調査部の六室及び事務)

第128条 平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、平城宮跡に關し、次項から第六項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。

3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（本簡を除く）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5 計測修景調査室においては、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

6 史料調査室においては、本簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務)

第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に關し、次項から第五項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。

3 考古第一調査室及び考古第二調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（本簡を除く）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5 史料調査室においては、本簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

(飛鳥資料館)

第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴

史的意義及び文化財に關し、國民の理解を深めるため、この地域に関する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の觀覧に供し、あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行う。

(飛鳥資料館の館長)

第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。

2 館長は、館務を掌理する。

(飛鳥資料館の二室及び事務)

第132条 飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置く。

2 庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に関する事務を処理する。

3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。

一 飛鳥地域に関する考古資料、歴史資料、建造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の作成、調査研究及び解説を行うこと。

二 飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行うこと。

三 飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

(理蔵文化財センター)

第133条 理蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。

一 理蔵文化財に關し、調査研究及びその結果の公表を行うこと。

二 理蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共團体の理蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して、専門的、技術的な研修を行うこと。

三 理蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共團体の機関その他関係の機関及び團体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行うこと。

四 理蔵文化財に関する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共團体の機関その他関係の機関及び團体等

の求めに応じ、その利用に供すること。

(理蔵文化財センターの長)

第134条 理蔵文化財センターに長を置く。

2 前項の長は、理蔵文化財センターの事務を掌理する。

(理蔵文化財センターの内部組織)

第135条 理蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。

(教務室の事務)

第136条 教務室においては、研修の実施に関する事務を処理するほか、理蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

(研究指導部の六室及び事務)

第137条 研究指導部に、考古計画研究室、集落遺跡研究室、発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。

2 考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務(他の室の所掌に属するものを除く)をつかさどる。

3 集落遺跡研究室においては、集落遺跡に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務(遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室の所掌に属するものを除く)をつかさどる。

4 発掘技術研究室においては、遺跡の発掘技術に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

5 遺物処理研究室においては、遺物の処理に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

6 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

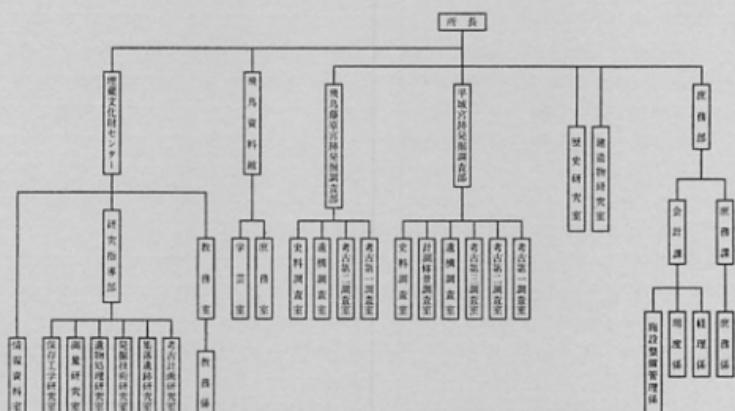
7 保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

(情報資料室の事務)

第138条 情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

職 員 (1985年7月1日現在)

所属	氏名	官職	組
	岡田 英男	文部技官 部長	古吉吉真真守開
考古第一調査室	工室村 永子	室長 (研) 员員	考古考写等保公
平	松永子八幡	官官官官官官官官	考古考古考
城	吉村	技技技技官官官官	考古考古考
考古第二調査室	石川千恵子	技术技能扶助目	考古考古考
宮	田辺 美千	研究研究扶助目	考古考古考
考古第三調査室	山本 芳裕	室長 (研) 员員	考古考古考
跡	杉谷 光利	官官官官官官官官	考古考古考
遺	忠尚	室長 (研) 员員	考古考古考
造構調査室	花谷	技术技能扶助目	考古考古考
類	毛利光後	研究研究扶助目	考古考古考
計測修復調査室	宮本 長二郎	室長 (研) 员員	考古考古考
史科調査室	松本 常人	官官官官官官官官	考古考古考
部	上野	技术技能扶助目	考古考古考
	田中 高鶴	研究研究扶助目	考古考古考
	高橋 寶己	室長 (研) 员員	考古考古考
	木村 信寺	官官官官官官官官	考古考古考
	寺野 駿	技术技能扶助目	考古考古考
	細見 上野	研究研究扶助目	考古考古考
	金子 利光	室長 (研) 员員	考古考古考
	高鶴 千田	官官官官官官官官	考古考古考
	森田	技术技能扶助目	考古考古考
	岡田	研究研究扶助目	考古考古考



ANNUAL BULLETIN
OF
NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE

1985

CONTENTS

	Page
Preface	1
Excavation in the Asuka Area	2
Excavation in the Ancient Fujiwara Palace Site and City Site	15
Excavation in the Heijo Palace Site and City Site	21
Wooden Writing Tablets Excavated in the Heijo Palace and City Site	36
Investigation of "Hyakumanto" (Miniature Wooden Pagoda) and "Dahrani" (Print of Mistic Buddist Incantation) Preserved in <i>Horyu-ji</i> Temple	40
"Hengaku" (Framed Epigraph) of <i>Ishiyama-dera</i> Temple	42
Investigation of the Buddist Temple and Shinto Shrine Buildings in Edo Era, Shiga Pref. (2)	44
Investigation of the Buddist Temple and Shinto Shrine Buildings in Edo Era, Nara Pref.	46
Survey of <i>Nara-Machi</i> (Old Town "Nara") (III)	48
Restoration of the "Chinju-do" Hall, <i>Honzan-ji</i> Temple	49
Excavation of the "Osawa-ike" Pond, <i>Daikaku-ji</i> Temple	50
Information Retrieval System with Personal Computer for Roofing Titles Unearthed in Heijo Palace Site	51
Excavation of the <i>Kojin-dani</i> Bronze Sword Cache, Shimane Pref.	52
Investigation of Excavated Animal Bones	54
Computerized Data Recording System in Archaeological Excavation	55
A Preliminary Study on Dendrochronology (5)	56
Preservation of Copper Inlaid Works	57
Symposium on Conservation and Restoration of Cultural Property	58
Special Exhibtion of Asuka Historical Museum	59
Reconstruction Model of the Ancient City of Asuka and Fujiwara	60
Landscape Arrangement of the Heijo and the Fujiwara Palace Site	61
Brief Reports on the Research Tours Abroad	65
Open Lectures Held by the Institute during 1984	66
Other Specific Researches and Surveys	67
Organization and Activities of the Institute	70

Published by

Nara National Cultural Properties Research Institute
Nara, 1985